「だれか」ではなく、「私たち」が
「いつか」ではなく、「今」から
世界の課題解決に貢献するために

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク2016
Hokkaido University Sustainability Weeks 2016

年次記録

フェスタ
国立大学2016

本書について

本書は、2007 年に北海道大学が開始した、持続可能な社会の実現に向けた研究・教育の促進強化イベント「サステナビリティ・ウィーク」2016 年開催の年次記録です。主に、ウェブサイトをそのまま PDF 化して集約しています。

サステナビリティ・ウィーク企画者の熱い想いを可能な限り記録に残すことに努めました。よって、イベント開催当時の 2016 年時点の情報のため、掲載しているウェブサイト URL がリンク切れしていたり、無効な連絡先を掲載している場合があります。

なお、開催行事のうち、「GiFT2016～Global Issues Forum for Tomorrow～世界の課題解決に向けたフォーラム」については、本学ウェブサイト上にてより詳細を公開しております。「GiFT」をキーワードに、本学ウェブサイト内の検索エンジンをご利用ください。

また、本書はサステナビリティ・ウィーク 2016 年開催に関する日本語の報告書ですが、同内容を英語でも公開しています。また、他年度の報告書も両言語で公開していますので、是非ご覧ください。

最後に、当時の開催イベントに関するお問い合わせについては、詳細をお答えするのが難しいこと、予めご了承ください。持続可能な社会の実現に向けて、本書をお役立て頂ければ幸いです。

平成 29 年 3 月

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

目　次

1.　サステナビリティ・ウィーク 2016 の概要

1.1　本年の特徴 2

1.2　総長あいさつ 3

1.3　プログラム・パンフレット 4

1.4　実行委員長 総括 10

2.　開催行事のウェブサイト（開催日順）

2.1　国際機関情報の探し方セミナー: SDGs（持続可能な開発目標）の現在地 - 統計で知る 12

2.2　国際シンポジウム　環境と健康領域における持続可能な開発目標（SDGs） 14

2.3　講演会　超高齢社会を迎えて －感性工学の果たす役割－ 16

2.4　セミナー　変貌する北極域とアジア～北極海航路とアジア：欧州とアジアの研究者による学際的研究の動向～ 18

2.5　北大×JICA 連携企画　青年海外協力隊トークイベント ～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～ 20

2.6　第１０回応用倫理国際会議 －応用倫理学の過去・現在・未来－ 22

2.7　北大・地球研合同地球環境セミナー「篤農家」 から地域社会と環境の未来を学ぶ 24

2.8　附属図書館（国連寄託図書館）企画 2Days イベント（１日目）法・図 共同ワークショップ 「世界のルールの作り方・使い方 - 人権に関する国連諸機関の仕組みと情報の調べ方 - 」 26

2.9　附属図書館（国連寄託図書館）企画 2Days イベント（２日目）市民セミナー＆図書館ツアー「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」 29

2.10　SW１０周年記念 国際シンポジウム ～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～ 32

2.11　総合博物館ツアー　持続可能な開発を「クール」に考えよう！ －北極域展示室を通して－ 37

2.12　第 10 回 HESD フォーラム in 北海道　事例報告会 40

2.13　対談 「SDGs へ貢献する高等教育のあり方について」 43

2.14　講演会　北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方 46

2.15　学生ワークショップ　大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる 49

2.16　学生ワークショップ　学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う
高等教育どうあるべき？ 53
2.17　講演会　コンフリクトを超える知を生み出す学び －分断社会における
和解の可能性を探る－ 56
2.18　講演会　文化遺産と SDGs－失われた好機？－ 59
2.19　第 2 回 北大－理研－産総研　「触媒研究」合同シンポジウム
～持続可能社会実現に向けたキャタリストインフォマティクス～ 62
2.20　サステイナブルキャンパス国際シンポジウム２０１６
持続可能な大学と地域の発展のためのキャンパスの役割 －サステイナ
ビリティの概念を取り込んだキャンパスマスタープランとは－ 65
2.21　札幌国税局長　特別講演会「税務行政の現状と国税庁の取組」 68
2.22　保健科学研究院公開講座　ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ 70
2.23　国際シンポジウム　東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を
探る －先住民文化遺産と考古学：台湾原住民とアイヌ－ 73
2.24　シンポジウム　高齢化するインフラに、どう対応するか
－インフラ維持管理・更新・マネジメント技術の社会実装－ 76
2.25　留学希望者向けセミナー　SD on Campus 78
2.26　歯学研究科企画第８弾　お口の健康と歯科医療 その２
－患者サイドに立った知識の浸透－ 80
2.27　グリーンランドをめぐる「音楽」・「冒険」・「サイエンス」
－北極域の持続可能な未来にむけて－ 82
2.28　JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道
－ 国際協力の場で働きたい方、専門性を活かしたい方へ－ 85
2.29　協定校企画　北海道大学－フィンランド・ジョイントシンポジウム.....89
2.30　第 31 回 ポテト杯争奪 全日本学生英語弁論大会 90
2.31　CLARK THEATER （クラークシアター）2016 94
2.32　GiFT2016～Global Issues Forum for Tomorrow～ 世界の課題解決に
向けたフォーラム.....96
2.33　HULT PRIZE＠Hokkaido University
～学生による国際社会問題ビジネスコンペティション～.....100
2.34　一般公開フォーラム 「シティズンシップと市民運動：
LGBT をとりまく日本的事情」 104

3. 10 周年記念国際シンポジウムのウェブサイト

3.1　開会あいさつ 110

3.2　趣旨説明 112

3.3　各全体会・分科会のタイムスケジュール 113

3.4　各全体会・分科会の開催報告／セッションの目的・概要

分科会 1

3.4.1　市民セミナー＆図書館ツアー
「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」 117

3.4.2　総合博物館ツアー「持続可能な開発を『クール』に考えよう！
―北極域展示室を通して―」 119

全体会 1

3.4.3　開催報告／セッションのタイムスケジュール.....121

3.4.4　開催趣旨：サステナビリティ・ウィーク 10 年の歩み.....122

3.4.5　招待講演 1：SDGs 達成のための高等教育の役割.....128

3.4.6　招待講演 2：リスク社会における不確実性を生きるための知識とは ～
チェルノブイリ後のドイツにおける市民の"方向性の知"に基づいて～ ...135

3.4.7　特別講演：北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像.....143

a.　指定討論者 1 149

b.　指定討論者 2 153

c.　指定討論者 3.....158

d.　指定討論者 4 161

分科会 2

3.4.8　講演 1：第 10 回 HESD フォーラム in 北海道.....162

3.4.9　講演 2：北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方 ..164

分科会 3

3.4.10　学生ワークショップ 1：
大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる.....168

3.4.11　対談：SDGs へ貢献する高等教育のあり方について 173

分科会 4

3.4.12　学生ワークショップ 2：学生目線で考えよう！
よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？.....176

3.4.13　講演 1：コンフリクトを超える知を生み出す学び
～分断社会における和解の可能性を探る～ 178

3.4.14　講演 2：文化遺産と SDGs ―失われた好機？― 182

全体会 2
3.4.15　総括ディスカッション：SDGs に貢献する高等教育のあり方.....184

1．サステナビリティ・ウィーク 2016 の概要

本年の特徴

・開催テーマ　：　**持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方**

・企画実施期間：　2016 年 10 月 12 日～12 月 18 日
　　- コア期間：2016 年 10 月 22 日（土）～11 月 6 日（日）

・企画数　　：　34 企画

・特筆事項　　：

- 2015 年 9 月に国連にて採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」に焦点を当て、高等教育の役割を考えることをテーマに定めた。

- サステナビリティ・ウィーク（SW）開始から 10 年目にあたり、10 周年記念 国際シンポジウムを 10 月 29 日・30 日に開催した。北海道大学内の 5 つの組織と学外の 9 団体と協働で全体会ならびに分科会を開催したところ国内外から 214 人が参加した。

- SW の 10 年間の累計は、開催企画数が 339、参加者数が 17 万 7 千人に達した。

- 全日本学生英語弁論大会「ポテト杯」や国際社会問題ビジネスコンペ「ハルト・プライズ」など、学生が社会変革に寄与しようとする意欲的な企画が学生によって運営された。

- インターネット・フォーラム「GiFT」は、北海道大学と世界の学生による議論をよりいっそう促進するため、運営における学生の主体的な関与を増やした。その結果、北海道大学留学生協議会「HUISA」の協力により、2 時間の生配信に国内外から 228 人が参加し、これまで以上に積極的な意見交換が実現した。

- 総長を議長とする SW 組織委員会が 2016 年 2 月 29 日開催に決定をした開催期間について、これまで 10 月最終週から 11 月第 1 週をコア期間として開催してきたのを 2017 年度から Hokkaido サマー・インスティテュートの開催期間に合わせて開催することが、SW のパンフレットなどを通じて周知された。

総長あいさつ

北海道大学 総長 山口佳三

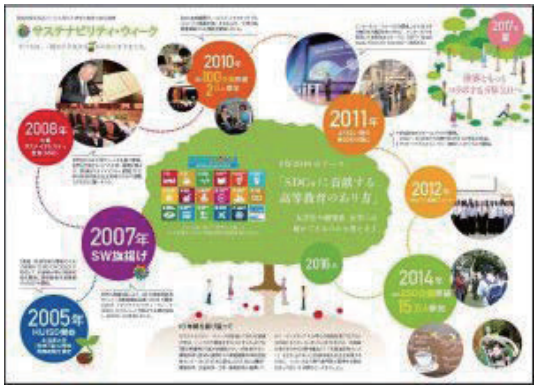
北海道大学サステナビリティ・ウィーク2016にご参集くださりありがとうございます。

今年は、サステナビリティ・ウィーク誕生10周年です。

振り返れば、国連「持続可能な開発のための教育の10年」が始まった2005年に、北海道大学「持続可能な開発」国際戦略を策定したことが、挑戦の始まりでした。世界の持続性に貢献する教育と研究を、全学的に促進させようという挑戦です。

この戦略下で2007年には、一連の学術イベント「サステナビリティ・ウィーク」を開始しました。きっかけは、世界の重要課題を扱う先進国主要会議「G8サミット」が2008年に北海道・洞爺湖で開催されることが決まったことでした。サミット開催に向けて、本学の研究者や学生が取り組んでいる持続性の課題について、より多くの人と議論する機会を設けるべく「サステナビリティ・ウィーク」が2007年に誕生したのです。

最初のウィークは、自然科学系の数個の研究集会のみであったのが、次第に人文社会系や医学系のテーマの企画や学生が主催する企画が加わり、今では多様な企画群に世界から参加者が集まるようになりました。



「小さな一粒の種が、色とりどりの森に」成長し、今では、森を構成するそれぞれの企画が、持続可能な社会づくりに向けた議論の花を咲かせ、次世代へ叡智をつなぐ実や種を育むようになった、と言えるでしょう。

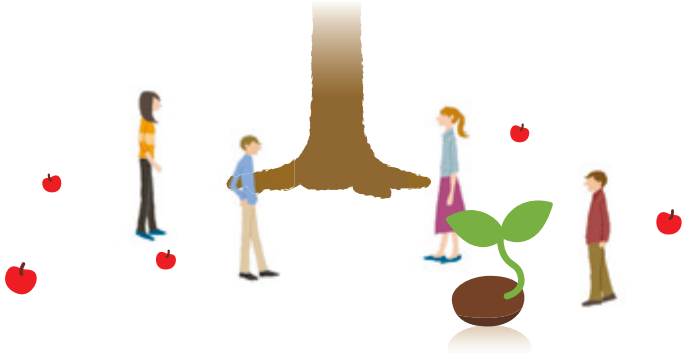
今年はまた、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」が発効した年でもあります。そこで、サステナビリティ・ウィーク10周年の記念すべき年のテーマに、「SDGsに貢献する高等教育のあり方」を選びました。大学生や研究者、そして大学という組織に何ができるのかを多角的に議論します。

2030年までにSDGsの達成を目指す市民ひとり一人そして多くの大学関係者にとって、今後の歩みを考える有意義な機会となるよう心から祈っております。

北海道大学 総長 山口佳三

「だれか」ではなく、「私たち」が
「いつか」ではなく、「今」から
世界の課題解決に貢献するために

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク2016
Hokkaido University Sustainability Weeks 2016



フェスタ
国立大学2016

持続可能な社会づくりに向けた研究と教育の強化週間

サステナビリティ・ウィーク

すべては、一粒の小さなタネからはじまりました。

2005年 HUISD開始

北海道大学「持続可能な開発」国際戦略を策定

「国連・持続可能な開発のための教育の10年」(UN DESD)に呼応して、北海道大学は「持続可能な開発」国際戦略本部事業(HUISD)を開始。

2007年 SW旗揚げ

世界の課題を話し合う、G8北海道洞爺湖サミット(主要国首脳会議)2008の開催に向け、「サステナビリティ・ウィーク(SW)」をスタート。1年目は6企画を実施し、約800人が参加しました。

2008年 札幌サステイナビリティ宣言(SSD)

世界初のG8大学サミットを札幌で開催。世界を代表する27の大学・機関が集まり、『札幌サステイナビリティ宣言』で「大学は持続可能な社会実現のための原動力になる」と誓いました。

SSD実現機関の一つとして、「サステイナブルキャンパス推進本部」を立ち上げ、大学の施設運営面からも貢献を開始しました。

2010年 累計100企画突破 2万人参加

インターネット・フォーラムの開催。2011年3月の東日本大震災をきっかけに、インターネットを利用した世界的なフォーラム「GiFT−Global Issues Forum for Tomorrow−」を始める。

2011年 より広い層の参加を可能に

- 学生研究ポスターコンテストの開催。2009〜2013年の5年間で約450人の学生が参加。
- サステイナブルキャンパス・国際シンポジウムの開始。

2012年 海外での開催スタート

2014年 累計250企画突破 15万人参加

2016年

SW2016のテーマ：

「SDGsに貢献する高等教育のあり方」

大学生や研究者、大学には何ができるのかを考えます。

2030年に向けて世界が合意した17の目標からなる「持続可能な開発目標(SDGs)」

2017年 夏

世界ともっとコラボするSW2.0へ

10年間を振り返って

サステナビリティ・ウィークを持続してきた北海道大学は、いくつかの果実を手に入れました。中でも「異分野連携」の実が特徴的です。一例を挙げると、環境科学と医学が連携する「環境健康科学研究教育センター」を2010年に設立。2012年には農学・環境科学・水産科学・工学・情報科学が連携して、タイ・インドネシア6大学との特別教育プログラム(PARE)をスタートしました。2015年には、北海道大学のあらゆる分野を集約して「北極域研究センター」を立ち上げました。持続可能な社会を実現するために、いろいろな分野の専門家が連携する機会を作ってきた10年間だといえるでしょう。

小さな一粒が色とりどりの森に

北海道大学
サステナビリティ
ウィーク2016

さまざまな角度から、未来に向けて議論します。

それぞれのテーマを木々の色で表しています。

今年のテーマ：
「持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方」
国連SDGsの達成に貢献するには、大学や大学生には何ができるでしょうか？
様々な角度から議論します。

すこやかに人間らしく生きる
ひとり一人が身体的、精神的、社会的に良好な状態（Well-being）で
質の高い生活（Quality of Life）を送ることのできるコミュニティをつくります。

未来への学び
叡智（えいち）や課題を分かち合い共感することを通じて、
新たな未来を切り開く心、ちから、仲間を育みます。

調和を見いだす
自然の恩恵を意識しつつ、
環境を損なわずに暮らす道を模索します。

※行事は変更になる場合があります。最新の情報はウェブサイトでご確認ください。http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/

1

10月17日（月）13：30〜16：00《会場》学術交流会館

国際シンポジウム
環境と健康領域における持続可能な開発目標（SDGs）

SWウェブサイトにて
9/1〜10/13まで受付

SDGs 達成に向けて、安全な水環境、有害物質の排除、
母児の健康などをテーマに、健康な社会を創造するための研究や
教育について考えます。

《主催》環境健康科学研究教育センター
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/cehs/

胎児に影響？
危険な環境要因とは？

3

10月27日（木）18：15〜19：30《会場》国際本部

北大×JICA連携企画
青年海外協力隊トークイベント

途上国の教育に携わるボランティアが、その目で見てきた 2 年間
を語ります。経験をどう日本の教育・社会に還元できるのか、
開発教育の視点から考えます。

《主催》独立行政法人 国際協力機構（JICA）北海道国際センター（札幌）
http://www.jica.go.jp/sapporo/enterprise/volunteer/index.html

ネパールで活動した
現役大学院生がお話します！

2

10月20日（木）18：30〜20：30《会場》学術交流会館

講演会　**超高齢社会を迎えて**
－感性工学の果たす役割－

世界初、超高齢社会を迎えた日本。高齢者に配慮した
モノづくりの重要性が高まる。家電製品やサイン、ユニバーサル
デザインなど、参加者と理解を深めます。

《主催》工学研究院人間機械システムデザイン部門インテリジェントデザイン研究室
http://labs.eng.hokudai.ac.jp/labo/intelligent_design/

今、注目の感性工学とは？

17

11月3日（木）13：00〜16：00《会場》保健科学研究院E棟

保健科学研究院公開講座
ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ

SWウェブサイトにて
9/1〜10/14まで受付

ヘルスサイエンスをテーマに、画像検査で見る老化や、
高齢者の運動習慣、伝統社会で暮らす人々の健康など、
研究内容を分かりやすく紹介します。

《主催》大学院保健科学研究院
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/health/

科学で高齢社会の
可能性を広げる！

4

10月28日(金)13:30〜17:00《会場》農学研究院 食資源研究棟

北大・地球研合同地球環境セミナー
「篤農家」から地域社会と環境の未来を学ぶ

地域に根ざして農を営む「篤農家」。その行動力や人生哲学など、
農業以外でも大きなヒントをくれる人材と、地域で育まれた
知恵・未来社会のあり方を探ります。

《主催》工学研究院、総合地球環境学研究所
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/farm/

地球の課題を解決する
カギは、人材！

15

10月31日（月）13：30〜18：00《会場》学術交流会館

北大－理研－産総研
「触媒研究」合同シンポジウム

SWウェブサイトにて
8月上旬〜定員まで受付

日本の「触媒研究」を牽引する北大―理研―産総研の
各組織が連携して、キャタリストインフォマティクスの構築と
その利用による触媒開発を目指します。

《主催》触媒科学研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人理化学研究所
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/catalyst/

触媒科学の最先端研究者、
ここに集まる。

シンポジウム
関連企画

5

10月28日（金）14：45〜18：00 《会場》附属図書館（本館）

附属図書館（国連寄託図書館）企画 2Days イベント（1 日目）
法・図 共同ワークショップ「世界のルールの作り方・使い方」

高等法政教育研究センター
ウェブサイトにて10/27まで受付

国連広報センターの千葉潔氏が、国連の人権に対する動きや取組みを紹介し、各機関の文書や調べ方、ウェブサイト活用術などを解説します。

《主催》附属図書館（国連寄託図書館）、法学研究科
http://www.juris.hokudai.ac.jp/ad/

「国連と人権」を読み解く実践的な内容です。

シンポジウム
関連企画

6

10月28日（金）12：50〜18：00
29日（土）9：45〜18：00／30日（日）9：45〜12：15
《会場》人文・社会科学総合教育研究棟

第10回応用倫理国際会議 －応用倫理学の過去・現在・未来－

国際的水準での研究・学術交流の推進を目的に、今年で開催 10 回目の研究者向け国際会議。若手研究者の養成と共に、分野全般の研究能力向上を目指す。

《主催》応用倫理研究教育センター
http://ethics.let.hokudai.ac.jp/

応用倫理学領域、国内唯一の国際会議です。

16

11月1日（火）〜2日（水）9：30〜17：00《会場》学術交流会館

サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2016

SWウェブサイトにて
10/1〜10/31まで受付

大学の役割には、知財・人財の社会への還流、社会実験の場としてのキャンパス活用などがあります。持続可能な社会と大学の役割について、キャンパスマスタープランの視点から理解を深めます。

《主催》サステイナブルキャンパス推進本部
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/sc/

持続可能な大学のキャンパスマスタープランとは?

22

11月12日（土）10：00〜17：00《会場》高等教育推進機構

JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道

JICAウェブサイトにて
10/1〜11/2まで受付

「国際協力の仕事をしたい！」社会人・学生向けに、1 日で国際協力業界の仕事やキャリアの概要、求められる人材の資質等がわかるセミナーを開催します。

《主催》独立行政法人 国際協力機構（JICA）
http://partner.jica.go.jp

個別キャリア相談有!

19

11月4日（金）13：30〜17：15 《会場》学術交流会館

シンポジウム
高齢化するインフラにどう対応するか

受付方法は、9月中旬以降
SWウェブサイトで案内予定

橋梁、舗装、トンネルなど、老朽化するインフラを今後どのようにマネジメントしていくか。学内外の研究者、行政関係者とともに考えます。

《主催》公共政策大学院
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/infra/

持続可能な社会基盤のあり方は?

18

11月3日（木）〜4日（金）9：00〜17：00《会場》学術交流会館

国際シンポジウム
東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探る

SWウェブサイトにて
9/30〜11/2まで受付

北海道と台湾を対比し、アジアの先住民族と考古学の協業のあり方を考える。地域連携、先住民族の権利、知的財産権など、広い視野で意見を交換します。

《主催》アイヌ・先住民研究センター
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/ainu/

北海道と台湾の先住民族。地域連携の可能性とは?

24

11月20日(日)（※詳細はウェブサイトにて）《会場》学術交流会館

第31回ポテト杯争奪 全日本学生英語弁論大会

学生企画

SWウェブサイトにて
10/20〜11/19まで受付

北海道唯一の英語弁論全国大会「ポテト杯」では、毎年様々な社会問題をテーマに、全国で選ばれた学生 10 名が 8 分間の英語スピーチで日本一を競います。

《主催》英語研究会
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/potato/

英語やスピーチのコツを学ぶチャンス!

25

11月26日（土）〜27日（日）（※詳細はウェブサイトにて）
《会場》クラーク会館

CLARK THEATER 2016

学生企画

今年で 11 年目を迎える期間限定の北大映画館「クラークシアター」。普段観ない映画や人々との出会いが持続可能な社会へ繋がると信じ、今年も開設します。

《主催》北大映画館プロジェクト
http://www.clarktheater.jp

映画の理解が深まるトークショーも必見!

サステナビリティ・ウィーク10周年記念
国際シンポジウム

10th ANNIVERSARY

10月29日（土）、30日（日）／会場：学術交流会館 他

7 基調講演
「SDGs へ貢献する高等教育のあり方」
「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは」
「北大サステイナビリティ教育に関する将来構想」
《主催》北海道大学

8 市民セミナー＆図書館ツアー
「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」
《主催》附属図書館（国連寄託図書館）

9 総合博物館ツアー
持続可能な開発を「クール」に考えよう！
《主催》北海道大学北極域研究センター

10 フォーラム **「5 大学による ESD 事例報告」**
対談 **「SDGs へ貢献する高等教育のあり方について」**
《共催》HESD フォーラム

11 講演会 **「北欧とバルトの国々に学ぶ サステナブルな高等教育の在り方」**
《主催》北海道大学ヘルシンキオフィス

12 ワークショップ **「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」**
《共催》環境省北海道環境パートナーシップオフィス

13 講演会 **「コンフリクトを超える知を生み出す学び」**
《主催》北海道大学教育学研究院

14 講演会 **「文化遺産・文化財の保護を通した持続可能な社会の構築に向けた課題と展望」**
《主催》北海道大学応用倫理研究教育センター

詳細、参加申し込みは ▶▶▶▶▶▶ ウェブサイトにて
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/

高等教育の将来を議論する、分野横断的コラボレーション!

20

11月6日（日）9：30〜13：00 《会場》歯学部講堂

お口の健康と歯科医療 その2 —患者サイドに立った知識の浸透—

SWウェブサイトにて
11/4まで受付

生活の質を左右する要素の一つである食事。食事を楽しくするのに必要なお口の健康と、問題への対処法について話上手な講師がわかりやすく紹介します。

《主催》歯学研究科
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/dent/

おいしい食事は、健康なお口から。

23

11月16日(水)（※詳細はウェブサイトにて）《会場》フィンランド

北海道大学—フィンランド ジョイントシンポジウム

これまで協働を続けてきたフィンランドの大学と、北大の教育研究関係者が最新の研究成果を共有。相互交流を図り、今後の更なる協働の可能性を探る。

《主催》オウル大学（フィンランド）
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/finland/

今年で 6 回目の開催。海外開催企画!

21

11月7日（月）15：00〜18：00《会場》総合博物館

公開イベント **グリーンランドをめぐる「音楽」・「冒険」・「サイエンス」**

自然・社会環境・文化をテーマに、ミニセミナー、音楽コンサート、冒険スキーヤートークショーなどを開催。グリーンランドについて楽しく学んでみませんか?

《主催》低温科学研究所、北極域研究センター、ArCS北極域研究推進プロジェクト、THE MUSIC PLANET
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/green/

グリーンランドの人気バンド、ナヌークが北大に!

26

11月27日（日）20：00〜22：00《会場》インターネット上

GiFT2016
〜Global Issues Forum for Tomorrow〜

インターネットを通じて世界の大学生・高校生とつながり、英語で約 2 時間のディスカッションをする学生向けフォーラムです。

《主催》北海道大学
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/index.html

参加学生大募集!

27

12月18日(日)13:30〜16:30 《会場》学術交流会館

一般公開フォーラム
シティズンシップと市民運動 －LGBTをとりまく日本的事情－

性的少数者が社会的認知や権利を得るには、行政や性多数者の理解と協力が必要です。その方策の一つが市民運動。私たちの世界の可能性と限界を議論します。

《主催》応用倫理研究教育センター
http://ethics.let.hokudai.ac.jp/

少数者の問題は多数者の問題でもあるのです。

会場案内図　札幌キャンパスマップ

※学部と同じ建物の大学院は名称を省略している。
※〔　〕は他機関の建物を示す。

イベントスケジュール

※7〜14の　　の部分はSW10周年記念 国際シンポジウム企画です。

	日　程	行事名	主　催	共　催	主な対象 専門家	市　民	大学生院生	高校生
1	10月17日（月）	国際シンポジウム 環境と健康領域における持続可能な開発目標（SDGs）	環境健康科学研究教育センター	保健科学研究院、医学研究科、地球環境科学研究院、文学研究科	●	●	●	
2	10月20日（木）	講演会 超高齢社会を迎えて ―感性工学の果たす役割―	工学研究院人間機械システムデザイン部門　インテリジェントデザイン研究室	日本感性工学会北海道支部、札幌市立大学デザイン学部		●	●	
3	10月27日（木）	北大×JICA 連携企画　青年海外協力隊トークイベント ～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～	独立行政法人国際協力機構（JICA）北海道国際センター（札幌）	国際本部		●	●	●
4	10月28日（金）	北大・地球研合同地球環境セミナー 「篤農家」から地域社会と環境の未来を学ぶ	工学研究院、総合地球環境学研究所	農学研究院、国際連携研究教育局食水土資源グローバルステーション	●	●	●	
5	10月28日（金）	法・図 共同ワークショップ 「世界のルールの作り方・使い方」	附属図書館（国連寄託図書館）、法学研究科	国連広報センター	●	●	●	●
6	10月28日（金）～30日（日）	第10回応用倫理国際会議 ―応用倫理学の過去・現在・未来―	応用倫理研究教育センター		●		●	
7	10月29日（土）	基調講演「SDGs へ貢献する高等教育のあり方」 「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは」 「北大サステイナビリティ教育に関する将来構想」	北海道大学		●	●	●	
8	10月29日（土）	市民セミナー＆図書館ツアー 「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」	附属図書館（国連寄託図書館）	国連広報センター	●	●	●	●
9	10月29日（土）、30日（日）	総合博物館ツアー 持続可能な開発を「クール」に考えよう！	北極域研究センター			●	●	●
10	10月30日（日）	フォーラム「5大学による ESD 事例報告」 対談「SDGs へ貢献する高等教育のあり方について」	北海道大学	HESD フォーラム	●	●	●	
11	10月30日（日）	講演会 「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」	ヘルシンキオフィス		●	●	●	●
12	10月30日（日）	ランチセッション「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」 ワークショップ「よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」	北海道大学	環境省北海道環境パートナーシップオフィス		●	●	●
13	10月30日（日）	講演会 「コンフリクトを超える知を生み出す学び」	教育学研究院		●	●	●	
14	10月30日（日）	講演会 「文化遺産・文化財の保護を通した持続可能な社会の構築に向けた課題と展望」	応用倫理研究教育センター		●		●	
15	10月31日（月）	北大ー理研ー産総研「触媒研究」合同シンポジウム	触媒科学研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国立研究開発法人理化学研究所		●		●	
16	11月1日（火）、2日（水）	サステイナブルキャンパス国際シンポジウム 2016 ―持続可能な社会とキャンパスマスタープランの役割―	サステイナブルキャンパス推進本部		●	●	●	
17	11月3日（祝・木）	保健科学研究院公開講座 ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ	大学院保健科学研究院			●		
18	11月3日（祝・木）、4日（金）	国際シンポジウム 東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探る	アイヌ・先住民研究センター	新学術領域研究稲作と中国文明	●	●	●	●
19	11月4日（金）	シンポジウム 高齢化するインフラにどう対応するか	公共政策大学院		●	●	●	●
20	11月6日（日）	お口の健康と歯科医療 その2 ―患者サイドに立った知識の浸透―	歯学研究科		●	●	●	●
21	11月7日（月）	グリーンランドをめぐる「音楽」・「冒険」・「サイエンス」	低温科学研究所、北極域研究センター、ArCS北極域研究推進プロジェクト、THE MUSIC PLANET		●	●	●	●
22	11月12日（土）	JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道	独立行政法人国際協力機構（JICA）		●	●	●	●
23	11月16日（水）	北海道大学ーフィンランド　ジョイントシンポジウム	オウル大学	ラップランド大学、ヘルシンキ大学、北海道大学	●	●	●	
24	11月20日（日）	第31回ポテト杯争奪　全日本学生英語弁論大会　学生企画	英語研究会			●	●	●
25	11月26日（土）、27日（日）	CLARK THEATER 2016　学生企画	北大映画館プロジェクト		●	●	●	●
26	11月27日（日）	GiFT2016 ～ Global Issues Forum for Tomorrow ～	北海道大学				●	●
27	12月18日（日）	一般公開フォーラム シティズンシップと市民運動 ―LGBTをとりまく日本的事情―	応用倫理研究教育センター	法学研究科附属高等法政教育研究センター	●	●	●	●

サステナビリティ・ウィーク事務局

北海道大学国際本部（2016 年 10 月より国際連携機構に改組予定）
〒060-0815 北海道札幌市北区北15条西8丁目
TEL: 011-706-8031　FAX: 011-706-8036　E-mail: sw1@oia.hokudai.ac.jp

詳しい情報はウェブサイトで公開しています。
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/

古紙配合率100%再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOYINK
2016年9月発行

サステナビリティ・ウィーク2016を振り返って

サステナビリティ・ウィーク2016実行委員長
国際担当理事・副学長 上田 一郎

サステナビリティ・ウィーク事業は今年10周年を迎え、34企画が集まりました。今年は、国連「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が掲げた「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向け、大学が、研究者が、学生が、市民社会が、どのように貢献できるのかについて、提案そして議論を行う年となりました。特徴的な企画の一つが、10月29日・30日に開催された10周年記念 国際シンポジウムでした。「SDGsに貢献する高等教育のあり方」という共通テーマの下で、図書館、北極域研究センター、本学ヘルシンキオフィス、教育学研究院、応用倫理研究教育センター、国際連携機構が分科会を提供し、多角的な議論を可能にしてくれました。強調されたのは、学生が社会変革に参画しつつ学んでいけるような学修環境の重要性でした。

図らずも本学の学生が企画した2つのコンテストは、まさしく学生が社会変革に寄与しようとする意欲的な取り組みでした。一つは、全日本学生英語弁論大会「ポテト杯」、もう一つは学生による国際社会問題ビジネスコンペティション「HULT PRIZE」です。どちらも持続可能な社会を実現するための解決法を学生が自ら考え出し、英語でプレゼンテーションし、社会人を含む審査員を納得させ、将来の希望の大きさを競う企画でした。これらの企画は、授業や研究そして生活の中で得た知識や技術を総動員して、学生がカリキュラムの外でさらに学び成長する機会を提供するものです。こういった学生の自主的な学びの機会を支えるのも、サステナビリティ・ウィークが果たすべき重要な役割だとあらためて思いました。

10年間を振り返りますと、「持続可能な社会の実現に向けた教育研究の推進週間」と位置づけられる当該事業に賛同し集った企画は合計339あり、参加者は17万7,000人を超えました。人間社会、自然環境、経済の最適なバランスを求めて、啓発・啓蒙、成果報告、議論、提案などを行った本学の教職員や学生のグループが339あったということです。主催者や企画タイトルを見ると、この人類の課題に対し多角的なアプローチが必要であることを痛感すると共に、北海道大学がこれらを提供し得る豊かな人的資源と教育研究成果を保有している事実に誇りを思います。

10年間の歴史と経験そして恵まれた人的資源を活かして、近未来戦略150のビジョンでもある「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向かって、サステナビリティ・ウィークを続けて行きますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

２. 開催行事のウェブサイト

国際機関情報の探し方セミナー:
SDGs（持続可能な開発目標）の現在地 - 統計で知る

行事内容

開催日時	2016年10月12、14、18、20、24、26日（計6回） 18:30～19:30（終了しました）
主催者	北海道大学附属図書館（国連寄託図書館）
会場	附属図書館 本館 リテラシールーム
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	2016年から国連の新しい開発目標であるSDGs（持続可能な開発目標）が始まりました。SDGsには17の目標、169のターゲット、230の指標があります。指標の多くは統計として無料のWebツールで入手可能です。 このセミナーでは、これらの統計データの入手方法を実習形式でご紹介します。 SDGsの達成度の探し方を知ることで、グローバル社会をより深く見つめることにもつながるはずです。ぜひご参加ください。 ポスター （画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。）

北海道大学側の実施責任者	附属図書館 利用支援課 利用支援課長 樋口秀樹
事前申し込み	必要（以下URL、附属図書館Webサイト内の申込フォームより、開催日の前日15時まで）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学附属図書館（国連寄託図書館） 細井 真弓美 TEL: 011-706-2973 E-mail: cref[at]lib.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	https://www.lib.hokudai.ac.jp/2016/09/20/40924/#application

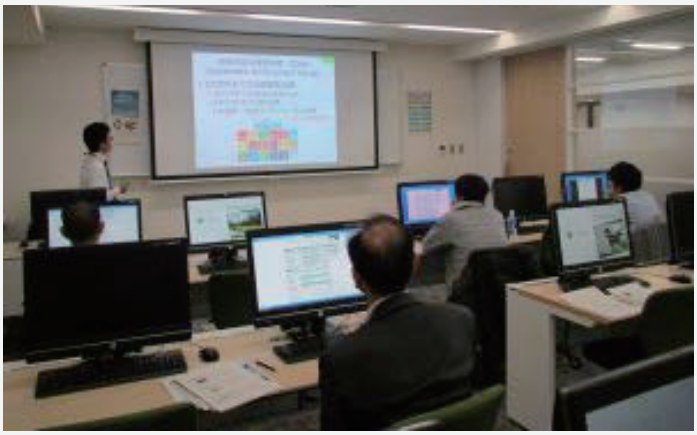
実施報告

附属図書館は、国連寄託図書館として国連をはじめとする国際機関の資料・情報の探し方セミナーを年2回、不定期に開催しています。この秋は、「SDGs（持続可能な開発目標）の現在地-統計で知る」と題して、今年から始まった開発目標であるSDGsをテーマに実施しました。

SDGsには17の目標、169のターゲット、230の指標があります。指標の多くは統計として無料のWebツールで入手可能です。今回のセミナーでは、これらの統計データの入手方法を実習形式でご紹介することで、SDGsの達成度を各参加者が自ら深く知ることを目的としました。

セミナーでは、あらかじめ用意しておいた20個のSDGsの指標のうち、参加者の多数決によって実習を行なうものを選びました。実習をしないものについても、対応する統計のWebツールと、その利用方法を示した資料を配布しています。

参加者は、本学の学生20名と一般市民2名でした。セミナー終了後に実施したアンケートでは、「SDGsに関するデータを細かく検索する方法を学べ、たいへん有意義だった」、「手を動かしながらの講義だったのでよく理解できた」との回答がみられました。当日の資料についてはHUSCAP（北海道大学学術成果コレクション）に掲載しています。（HUSCAP「国際機関情報の探し方セミナー」: http://hdl.handle.net/2115/63797）



セミナーで実習を行う参加者の様子

国際シンポジウム 環境と健康領域における持続可能な開発目標（SDGs）

行事内容

開催日時	2016年10月17日（月）13:30～16:00（受付開始 13:00）（終了しました）
主催者	環境健康科学研究教育センター
共催	保健科学研究院、文学研究科、地球環境科学研究院
会場	学術交流会館（小講堂）
言語：日本語・英語（同時通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	国連が定める持続可能な開発目標（SDGs）の達成には、すべての国々で、豊かさを追求しながら地球を守るための行動が求められています。 本シンポジウムでは、特に環境と健康に関係して、安全な水環境、タバココントロール、有害物質の排除、母児の健康などの重要な課題をテーマに、危険な環境要因を削減し、健康な社会を創造するための研究や活動を取り上げます。 【プログラム】

北海道大学側の実施責任者	環境健康科学研究教育センター 教授 小笠原克彦
事前申し込み	必要（※申し込み受付は終了しました）
参加費	無料
問い合わせ先	環境健康科学研究教育センター 准教授 荒木 敦子 TEL：011－706-4748 E-mail：AAraki[at]cehs.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.cehs.hokudai.ac.jp

実施報告

本シンポジウムでは，国連が定める「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向けて，特に環境と健康に関係して，安全な水環境，タバココントロール，有害物質の排除，母児の健康などの重要な課題をテーマに，危険な環境要因を削減し，健康な社会を創造するための研究や活動を取り上げた4つの講演を行いました。

フィリピン大学のRomeo Quizon 公衆衛生学部長からは，「フィリピンにおける水質と化学物質管理の改善に向けたフィリピン大学公衆衛生学部の貢献」，国立保健医療科学院/WHOたばこ製品の成分規制に関する研究協力センターの稲葉 洋平 特命上席主任研究官からは，「たばこの規制に関する世界保健機関枠組条約と日本におけるたばこ対策」という題目で，SDGs達成に向けた活動について講演しました。

引き続いて，本センターの宮下 ちひろ 特任准教授より，「環境化学物質による母児への健康影響」，北海道大学大学院地球環境科学研究院の田中 俊逸 教授からは，「汚染物質除去のための新規吸着剤の開発」について，それぞれの研究が人々の健康や環境改善にどう役立つかについて，発表しました。

本シンポジウム中では，参加した市民や学生から演者への質疑応答も行われました。

本センターは，WHOCCのひとつとして世界の人々と協力し，SDGsに沿って進んでいきます。また，環境と健康に関する様々な課題に取り組むと共に，市民講演会や，研究成果の発表をできるだけ多く実施していく予定です。

講演者・関係者の集合写真

稲葉特命上席主任研究の講演の様子

講演会 超高齢社会を迎えて －感性工学の果たす役割－

行事内容

開催日時	2016年10月20日（木）18:30 ～ 20:30（受付開始 18:00）（終了しました）
主催者	工学研究院 人間機械システムデザイン部門 インテリジェントデザイン研究室
共催	日本感性工学会北海道支部, 札幌市立大学デザイン学部情報プロダクト研究室
会場	学術交流会館（第3会議室）
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	現在、生活者における高齢者の割合は人口の4人に1人であり、今後の高齢者の割合は増加の一途をたどるとの予測があります。 こうした中で、生活環境でのモノづくり、コトつくりの重要性が「高齢者に配慮する」という観点から高まることは言うまでもありません。 本企画は、世界で最も早く超高齢社会を迎えた日本の現状を理解するため、人間の豊かな暮らしを支える感性工学の分野からアプローチする講演会です。 「超高齢社会とは何か」からはじめ、「高齢者と家電製品・サイン」、「ユニバーサルデザインと高齢者」などについて参加者とともに語り合うことで、超高齢社会における理解が高まり、超高齢社会における様々な課題が見つかることを期待します。

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 人間機械システムデザイン部門 特任教授 成田吉弘
事前申し込み	「問い合わせ先」に、お名前・年齢を記載したメールをお送り頂くことで事前申し込みができます。（当日会場へ直接お越し頂いても受付します。）
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院 人間機械システムデザイン部門 助教 李 美龍 TEL：011-706-6416 E-mail：leemiyong [at] eng.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://labs.eng.hokudai.ac.jp/labo/intelligent_design/

実施報告

現在、生活者における高齢者の割合は人口の4人に1人であり、高齢者の割合が今後も増加の一途をたどることは確実です。この状況の中で、生活環境でのモノづくり、コトつくりの重要性が「高齢者に配慮する」という観点から高まることは言うまでもありません。本企画は、人間の豊かな暮らしを支える感性工学の分野から、世界で最も早く超高齢社会を迎えた日本の現状を理解し、超高齢社会における様々な課題を見つけ出すことを目的としました。

本講演会では3名の講師を招いて、超高齢社会に関する全般的な説明から、高齢者に関する感性工学的理解、また感性工学と学問的関連が深いデザイン分野の事例について講演してもらいました。
具体的には、講演1で、さらなる高齢化の進展や高齢者世帯の状況、介護保険制度の概要と制度の変容、また高齢者の住まいと在宅生活の困難など、日本における「超高齢社会の現状」についてを紹介してもらいました。続いて講演2では、感性工学の定義から、感性工学分野で行われている高齢社会に関する研究の紹介や高齢者の認識の特性について感性工学的観点で解説してもらいました。講演3では、高齢社会に対するデザイン分野の研究成果や高齢者によるデザイン評価など、超高齢社会のためのより具体的な事例を紹介してもらいました。講演後は参加者との質疑応答を通して、超高齢社会における理解を高めることができました。

開催日はあいにく10月の初雪が降った悪天気の影響もあり、参加者は14名で多くはありませんでしたが、講演内容に関する関心は非常に高く密度の高い意見交換ができました。今後は、本講演会で指摘された課題を検討し、実際の生活に反映するための試みを感性工学分野はもちろん、関連分野と連携して探っていきます。

開会あいさつを述べる成田教授

講演に熱心に聴き入る参加者の様子

セミナー 変貌する北極域とアジア
～北極海航路とアジア：欧州とアジアの研究者によ学際的研究の動向～

行事内容

開催日時	2016年10月26日（水） 10:00～16:30（受付開始 9:30）（終了しました）
主催者	北海道大学北極域研究センター、リーズ大学東アジア研究所、北海道大学GI-CoRE北極域研究グローバルステーション
後援	（一社）寒地港湾技術研究センター、北海道経済同友会
会場	創成研究機構（10:00～12:00）、遠友学舎（14:00～16:30）
言語：英語（逐次通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	北極海航路の長期的な活用は、多くの環境的、経済的、地政学的、気候的、社会的、ならびに国家政策的な要因に強く由来しており、学際的・多面的視点から考えることが必要となっています。 本セミナーは、アジア・北米・欧州の多様な研究者が協働し、前記のような特性をもつ北極海航路に関して、アジア地域の政策ならびにその背景を中心とした研究成果を紹介し、研究の社会的実装をはかると同時に、参加者からの反応を今後の研究にフィードバックすることを企図しています。 午前のセミナーは専門家を対象に英語で開催し、発表とディスカッションを実施予定です。 午後のセミナーは、より一般の参加者を想定し、研究成果の紹介を主体に日本語の逐次通訳で提供し、質疑の時間も設けます。

北海道大学側の実施責任者	北極域研究センター 教授 大塚夏彦
事前申し込み	必要（申込者を優先します）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学北極域研究センター 大塚夏彦 TEL: 011-706-9625 E-mail: natsuhiko.otsuka[at]arc.hokudai.ac.jp （※[at]を＠に変えて送信ください）
URL	http://asiachangingarctic.com/asia-nsr

実施報告

本国際セミナーは、英国リーズ大学 デント教授を代表とする研究プロジェクト、『北極海航路とアジア』の研究成果を広く社会に紹介することを目的に開催したものです。このプロジェクトは、英国・フィンランド・スウェーデン・ノルウェー・インド・日本・韓国・中国の研究者による、政治・経済・海事・地政学・環境分野にわたる学際的ネットワークのもとで進められています。

今日、北極海航路の活用に関しては、環境的、経済的、地政学的、社会的、ならびに国家政策的な要因に強く由来しながら、いかに持続的に実現するかが重要な課題となっています。そこで本セミナーでは、北極海航路に関わるインフラ投資、経済インパクト、海運分野の政策動向、リスクマネジメント、展望などに関する研究者からの講演を、専門家や研究者向けのワークショップと学生や一般市民向けセミナーの2部構成で開催しました。

専門家向けワークショップでは、研究者・学生主体に17名が参加、一般市民向けセミナーには産官学あわせて37名が参加しました。いずれにおいても、多くの質問・コメントが参加者から寄せられ、予定時間を超えて質疑が実施されました。特に一般市民向けセミナーのあと、複数の参加者から、『今回のセミナーによって、北極海航路に関する欧州やアジア各国の多様な視点を知ることができて有意義であった』との感想を得ることができました。

北極域研究センターでは、今後も産・官ならびに一般市民を対象として北極研究の情報発信および共同での活動を展開し、北極に関わる新しい研究領域および事業機会の創出に取り組む計画です。

ワークショップの様子

公開セミナーの様子

北大×JICA連携企画 青年海外協力隊トークイベント
～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～

行事内容

開催日時	2016年10月27日（木）18:15～19:30（受付開始 18:00）（終了しました）
主催者	独立行政法人 国際協力機構 北海道国際センター（札幌）
共催	北海道大学国際連携機構
会場	北海道大学国際連携機構
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	青年海外協力隊として開発途上国の教育現場に携わってきたJICAボランティアが、自分の目で見て、耳で聞いた2年間についてお話します。 また、その経験を今後どのように日本の教育・社会に還元できるのか、開発教育の視点からみなさんと考えます。協力隊に興味のある方、国際協力に関わりたい方、ぜひご参加下さい。
北海道大学側の実施責任者	国際部国際連携課 国際協力マネージャー 榎本宏
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	JICA北海道（札幌）市民参加協力課 野々垣 真実 TEL：011-866-8421 E-mail：hkictpp[at]jica.go.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.jica.go.jp/sapporo/enterprise/volunteer/index.html

実施報告

持続可能な発展に資する海外ボランティアとして、青年海外協力隊の事業説明および北海道大学大学院に在籍する帰国隊員の報告会を行いました。

青年海外協力隊の事業説明では、ODA（政府開発援助）とは何か、また日本が国際協力を行う必要性から、実際に青年海外協力隊に参加するにあたってどういった制度があるのかを、JICAボランティア事業担当者が講演しました。

帰国報告では、北海道大学在学中に青年海外協力隊に参加し、ネパールにてコミュニティ開発という職種に従事した現役大学院生の隊員が自身の体験談を語りました。

青年海外協力隊の活動期間は2年であり、決して大きなことが出来るわけではありませんが、現地に溶け込み、現地のニーズを把握し、本当に現地に必要なものを現地のリソースの中から見つけ出し繋げていくことが持続可能な発展において大切なことだと、参加者と共有することが出来ました。

帰国報告の様子

第10回応用倫理国際会議 －応用倫理学の過去・現在・未来－

行事内容

開催日時	2016年10月28日（金）～ 10月30日（日）（終了しました）
主催者	応用倫理研究教育センター
会場	人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）409室
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	今年で通算10回目を迎える本会議は、北海道大学大学院文学研究科・応用倫理研究教育センターが、現代の応用倫理学領域における諸問題を国際的な水準を満たすレベルで研究・学術交流を推進することを目的として継続的に開催している、当該研究領域において国内唯一の国際会議です。 第10回となる今年は、海外より4名の基調講演者を招聘し、基調講演ないし全体会議を開催予定です。 また、国内外の研究者に応用倫理研究領域における発表募集を呼びかけ、研究テーマごとに発表セッションを設けて、一般発表を行います。 特に国内外の若手研究者や大学院生の参加を広く呼びかけており、国際的な通用力を持つ研究者を養成するとともに、応用倫理研究分野全般について、研究能力のレベルアップを図ることも大きな目的の一つです。

北海道大学側の実施責任者	応用倫理研究教育センター 准教授 眞嶋俊造
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	応用倫理研究教育センター TEL：011-706-4088 E-mail：caep[at]let.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://ethics.let.hokudai.ac.jp/

実施報告

本行事は、第10回応用倫理国際会議（2016年10月28日～30日）にて、ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授を含む4名の全体講演、4つのワークショップと59件の一般発表を行いました。

応用倫理国際会議は2007年に始まり、2008年より毎年行って参りました。今回の会議のテーマは「応用倫理学の過去・現在・未来」でした。ストーン教授は文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステイナビリティの倫理についての研究の第一人者です。ストーン教授の講演は ‘Ethical Issues Relating to the Protection of Cultural Property and Cultural Heritage During Armed Conflict’ という題名でした。武力紛争下において犠牲になるのは人々だけではなく、他の動物や自然や環境も影響を受けますが、文化遺産や文化財も例外ではないことを私たちに強く自覚させ、文化遺産や文化財の保護や回復・修復に向けた努力を強く動機付ける内容でした。

本講演は、武力紛争の際の文化財の保護に関する条約（1954ハーグ条約）で定められたブルーシールドの活動に焦点をあて、人類共通の遺産であり、未来世代に受け継ぐべき文化遺産や文化財が戦闘によって付随的に破壊されるだけではなく、それ自体が直接の攻撃の標的になる場合やその破壊自体が目的になる場合、さらに文化財の略奪や密売に至るまでの武力紛争の事実と、それを回避・阻止することの重要性と実施する方法についての議論が展開されました。この点において、本講演はまさにサステイナビリティウィークの行事としてふさわしいものであったと考えられます。

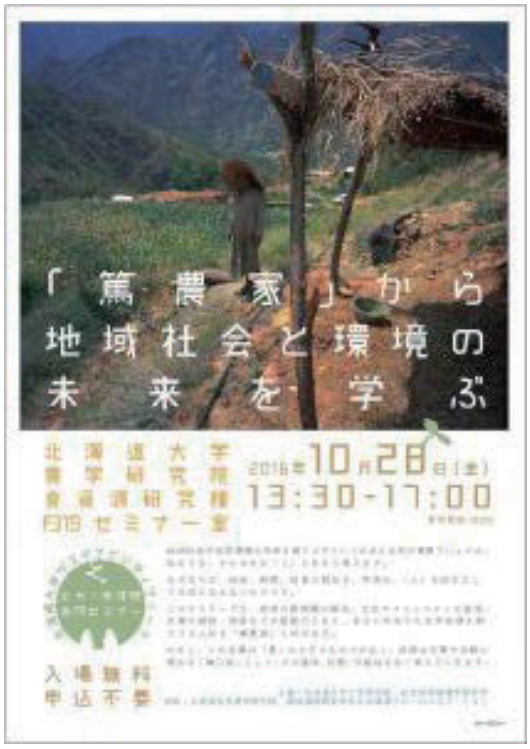
次年度以降においても、サステイナビリティの倫理を応用倫理国際会議の主要なテーマのひとつとしていく基盤を作ることができました。

ピーター・ストーン教授による講演の様子

マイケル・デイビス教授による講演の様子

北大・地球研合同地球環境セミナー「篤農家」から地域社会と環境の未来を学ぶ

行事内容

開催日時	2016年10月28日（金）13:30～17:00（受付開始 13:00）（終了しました）
主催者	工学研究院、総合地球環境学研究所
共催	農学研究院、国際連携研究教育局食水土資源グローバルステーション
会場	農学研究院 食資源研究棟（F319セミナー室）
言語：日本語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	地域や地球が抱える問題を解決し、未来を築くためには、様々なアプローチがあります。技術的アプローチ、経済的アプローチ、制度的アプローチ、あるいは哲学的アプローチなどです。いくつかのアプローチを複合的に組み合わせる場合もあります。どのようなアプローチをとるにせよ人材が重要な役割を果たすことに異論はないでしょう。 このセミナーの目的は、地域に根ざして農を営む人材を「篤農家」と呼び、その仕事や生き方から地域で育まれた知恵や未来社会のあり方を探ることにあります。 「篤農家」の魅力は農業を超えたところにもあります。バイタリティあふれる行動力と実践力、長年の経験から得た人生哲学なども「篤農家」が私たちの未来に大きなヒントを与えてくれるのではないでしょうか。このようが考え方を他の仕事にも当てはめ、「篤漁家」、「篤林家」、「篤〇家」といった多彩な地域の人材からも多くのことを学び取ることも重要です。 ポスター  （※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。）

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 教授 船水尚行
事前申し込み	不要（直接会場へお越しください）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院工学研究院 教授 船水 尚行 TEL：011-706-6270 E-mail：funamizu[at]eng.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

『「篤農家」から地域社会と環境の未来を学ぶ』というセミナーを、機関連携プロジェクトを実施している北海道大学と総合地球環境学研究所の共催で行いました。総合地球環境学研究所と共催でサステイナビリティ・ウィークでの行事を行うのは今回で3回目となります。

地域や地球が抱える問題を解決し、持続可能な未来を築くためには、多様な観点から地域を見ていく必要があります。例えば、技術的、経済的、制度的、哲学的観点を複合的に組み合わせていくのです。今回、「篤農家」に注目したのは、「篤農家」は地域に根ざして農を営む人たちであり、バイタリティあふれる行動力と実践力、長年の経験から得た人生哲学などをお持ちだからです。そして、持続可能な生活の実践者であるとも思います。すなわち、「篤農家」の方々は多様な観点を複合的に組み合わせ、それを実践しておられると思います。「篤農家」の魅力は農業を超えたところにもあります。「篤農家」が私たちの未来に大きなヒントを与えてくれるのではないでしょうか。

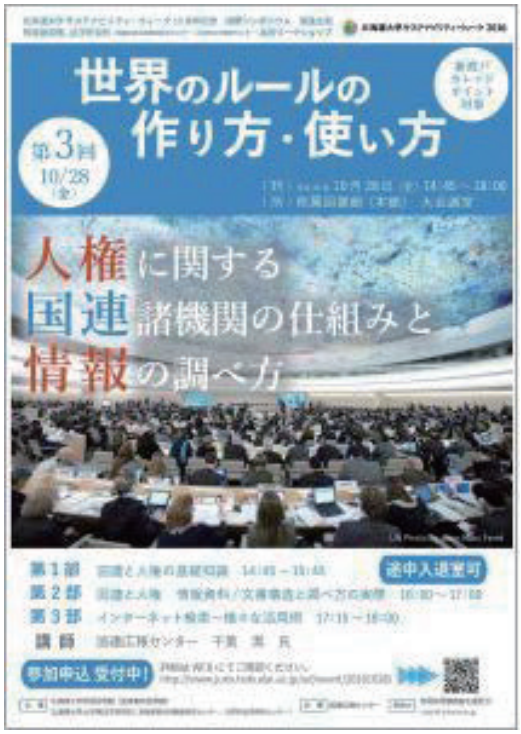
このような目的のもと、アラブ世界と日本の篤農家の比較についての話、西条野外学校の取り組み、水産増殖技術の開発と実践の3つの話題提供と議論を行いました。私たちは「篤農家」に限らず、「篤漁家」、「篤林家」、「篤〇家」といった地域に根差したリーダーから、多くのことを学びことができると思います。そのことを実感させる会合でした。

開会の挨拶をする船水尚行北海道大学工学研究院教授・地球研教授

秋田県とサウジアラビアの篤農家について発表する縄田浩志秋田大学教授

附属図書館（国連寄託図書館）企画 2Daysイベント（1日目） 法・図 共同ワークショップ「世界のルールの作り方・使い方-人権に関する国連諸機関の仕組みと情報の調べ方-」

行事内容

開催日時	2016年10月28日（金）14:45～18:00（受付開始 14:30）（終了しました）
主催者	附属図書館、大学院法学研究科（附属高等法政教育研究センター、法学政治学資料センター）
会場	附属図書館 本館 大会議室
言語：日本語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	日本において国連の広報活動を行う、国連広報センターの千葉 潔 氏による「国連と人権、その資料」のガイダンスです。 第一部では、国連の人権諸機関やその最近の動きなど、国連の人権に対する取り組みに関する基礎知識を案内します。 第二部では、人権理事会や各種機関の文書構造と調べ方の実際を解説します。 第三部では、国連の人権に関するWebサイトやWebツールの概観と活用術を紹介します。 平和、開発を含め、あらゆる活動を結ぶ共通の糸とも言える人権という切り口から世界を見渡すための実践的なリテラシーが身につく企画です。  （※画像をクリックすると、詳細をご覧になれます。）

北海道大学側の実施責任者	附属図書館 利用支援課 利用支援課長 樋口秀樹
事前申し込み	必要（※お申込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学附属図書館 細井 真弓美 TEL：011-706-2973 E-mail：cref[at]ib.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.juris.hokudai.ac.jp/ad/event/20161028/

実施報告

附属図書館が国連寄託図書館として開催した2Daysイベント、1日目の企画は、附属図書館・法学研究科共同ワークショップ「世界のルールの作り方・使い方」第3回、「人権に関する国連諸機関の仕組みと情報の調べ方」です。本企画は、『サステナビリティ・ウィーク10 周年記念 国際シンポジウム』の関連企画でもあります。

今回の世界のルールの作り方・使い方の内容は、国連広報センターで不定期に実施している国連資料ガイダンスの人権編にあたります。同センターから講師の千葉潔氏を招聘し、開催しました。

3部構成の第1部は、国連と人権の基礎知識でした。国連の各機関における人権への取り組みの進展、現在の国連の人権に関する文書の種類や出所、特に重要な文書などのレクチャーがありました。第2部は、国連と人権 情報資料／文書構造と調べ方の実際でした。参加者が2人1組になって、手元の国連資料のサンプルについて、識別のために付与されている文書記号を手がかりにして、どの機関が出したどのような文書なのかを解くワークショップを行いました。そして、第3部では、インターネット検索方法と様々な活用術でした。第1部、第2部で触れた国連文書をWebページから入手する手順などの解説がありました。

参加者は、本学の学生33名と一般市民5名でした。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連が人権に関してどのような種類の文書を出しているのか知れてよかった。」、「図書館とグローバルとサステナビリティがうまくくみあわさったイベントだと感じた。」、「マスコミでの取材活動に大変有用な講義と思いました。ありがとうございました！」といった声が寄せられました。閉会後は、参加者が千葉氏に熱心に質問をする様子が見受けられました。

北海道大学附属図書館および法学研究科（附属高等法政教育研究センター、法学政治学資料センター）では、今後もテーマを変えての「世界のルールの作り方・使い方」開催を予定しています。

文書情報を学ぶワークショップの様子

ウェブサイトでの調べ方を説明する千葉氏

附属図書館（国連寄託図書館）企画2Daysイベント（２日目）
市民セミナー＆図書館ツアー「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」

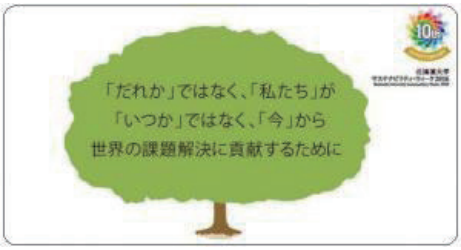
行事内容

開催日時	2016年10月29日（土）11:00～12:30（終了しました）
主催者	附属図書館（国連寄託図書館）
共催	国連広報センター
後援	独立行政法人国際協力機構北海道国際センター（JICA 北海道）、公益財団法人札幌国際プラザ、札幌市、日本国際連合協会北海道本部、北海道
会場	附属図書館 本館
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	北海道大学附属図書館は国連寄託図書館に指定されています。本セミナーは、国連についてのレクチャーと図書館（本館）のツアーによって、国連の現状と国連寄託図書館の趣旨を知る市民向けセミナーです。 まずは、国連広報センターの千葉潔氏から、国連とその活動、そして、国連を知るうえで役に立つ資料などについてお話いただきます。 続いて、附属図書館のスタッフの案内で千葉氏のお話に関連した箇所を中心とした図書館ツアーを行います。 国連の活動全般を知り、北大図書館でより深く学ぶきっかけとなる企画です。

プログラム詳細、最新情報

「市民セミナー＆図書館アー 聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウムの共催企画です。プログラム詳細、最新情報は特設サイトにて公開しています。

・SW10周年記念 国際シンポジウム特設ウェブサイ
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/



北海道大学側の実施責任者	附属図書館 利用支援課長 樋口秀樹
事前申し込み	（※お申込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学附属図書館（国連寄託図書館） 細井 真弓美 TEL：011-706-2973 E-mail：cref[at]ib.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	https://www.lib.hokudai.ac.jp/2016/09/08/40563/

実施報告

附属図書館が国連寄託図書館として開催した2Daysイベントの2日目の企画は、市民セミナー＆図書館ツアー「聞いて見て知る！ 国連の活動と北大図書館」です。本企画は北海道大学サステナビリティ・ウィーク10 周年記念 国際シンポジウムの分科会でもあります。

前半は講師の国連広報センターの千葉潔氏から、国連広報センターの概要、国連の現状、国連の広報活動の実際、国連寄託図書館の趣旨などの講話がありました。国連は現在、著名人の起用等による親しみやすい動画を用いた広報活動に力を入れており、これらの動画の紹介も複数あり、国連の取り組みについて映像と音楽で楽しめる内容でした。

後半は、附属図書館スタッフによる千葉氏のお話を踏まえての図書館ツアーでした。国連などの国際機関の資料を集めた国際資料コーナーや、札幌農学校2期生であり国際連盟事務次長としても活躍した新渡戸稲造にゆかりの資料展示、地下の自動化書庫等の見学を行いました。新渡戸稲造の資料展示では、図書館の資料だけではなく、大学文書館の協力により、新渡戸稲造が国際連盟の便箋を使った書簡のレプリカも展示しました。

参加者は、本学の学生1名と一般市民37名でした。市民の中には高校生や親子連れの方も多く含まれていました。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連のことをたくさん聞ける機会はなかなかないので、とても良い講演で、自分にとって、とても興味がわく内容でした。」といった声が寄せられました。図書館ツアーの後、高校生をはじめとする参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。

附属図書館（国連寄託図書館）では、今後も国連の資料の収集・提供に加えて、国連のアウトリーチ活動に寄与するような講演会やセミナーなどを実施する予定です。

千葉氏によるセミナーの様子

図書館ツアーの様子

SW10周年記念 国際シンポジウム
～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

行事内容

開催日時	2016年10月29日（土）10:30～19:30、30日（日）9:30～17:00（終了しました）
主催者	北海道大学
会場	学術交流会館
言語：日本語・英語（一部、同時通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	2007年に開始して以来、サステナビリティ・ウィークは2016年で10回目を迎えます。これを記念し、持続可能な社会の実現を目指して、教育研究ならびに産学官民連携に励む国内外の団体や機関と協働してシンポジウムを開催することにより、高等教育が果たしてきた役割の視認性を高めると共に、国連「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成に向けた今後のあり方について多角的に議論します。 ＊プログラム詳細、最新情報はSW10周年記念 国際シンポジウム特設サイトにて公開しています。http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

プログラム

10／29（土）

10:30～13:45 分科会1

10:30～12:30 総合博物館ツアー（1回目）

持続可能な開発を「クール」に考えよう！ ー北極域展示室を通してー

（北極域研究センター）

11:00～12:30 市民セミナー＆図書館ツアー

「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」（附属図書館）

11:30～13:30 総合博物館ツアー（2回目）

持続可能な開発を「クール」に考えよう！ー北極域展示室を通してー（北極域研究センター）

12:30～14:00 HESDフォーラム総会（※クローズド会議）

14:00～17:30 全体会

14:00～14:10 開催あいさつ

・北海道大学理事・副学長 上田一郎

・文部科学省国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会事務局）国際統括官補佐 鈴木規子

14:10～14:30 開催趣旨 ～サステナビリティ・ウィーク10年の歩み～

北海道大学理事・副学長 上田一郎

14:30～15:15 招待講演 1 「SDGs達成のための高等教育の役割」

AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事 キンバリー・D・スミス

15:15～16:00 招待講演 2

「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の”方向性の知”に基づいて～」

フェリス女学院大学 准教授 高雄綾子

16:00～16:20 休憩

16:20～17:30 講演 「北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像」

・司会：北海道大学 教育学研究院長 小内透

・発表者：北海道大学副学長 山下正兼

・指定討論者：ソウル大学校師範大学長 Kim Chan-Jong

・指定討論者：東京大学 大学院教育学研究科 准教授 北村友人

・指定討論者：駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部 Mats Engström

・指定討論者：駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー 松本宏

17：30～18：30 交流会

１０／３０（日）

9:00 開場・受付開始

9:30～12:30 分科会 ２

9:30～12:00 講演 １

「第10回HESDフォーラム：事例報告」（HESDフォーラム）

9:30～12:00 講演 ２

「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」（北海道大学欧州ヘルシンキオフィス）

10:30～12:30 総合博物館ツアー（３回目）

持続可能な開発を「クール」に考えよう！ －北極域展示室を通して－（北極域研究センター）

12:15～14:30 分科会 ３

12:15～13:45 学生ワークショップ １

「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」（環境省北海道環境パートナーシップオフィス北海道）

12:30～14:30 総合博物館ツアー（４回目）

持続可能な開発を「クール」に考えよう！ －北極域展示室を通して－（北極域研究センター）

12:15～13:45 対談

「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」（HESDフォーラム）

14:00～16:00 分科会 4

14:00～16:00 学生ワークショップ 2

「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」（環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO）北海道）

14:00～16:00 総合博物館ツアー（5回目）

持続可能な開発を「クール」に考えよう！ ー北極域展示室を通してー（北極域研究センター）

14:00～16:00 講演会

「コンフリクトを超える知を生み出す学びー分断社会における和解の可能性ー」（教育学研究院）

14:00～16:00 講演会

「文化遺産とSDGs ー失われた好機？ー」（応用倫理研究教育センター）

16:15～17:00 全体会

16:15～17:00 総括ディスカッション

「SDGsに貢献する高等教育のあり方」（北海道大学）

北海道大学側の実施責任者	北海道大学理事・副学長 上田一郎
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局 TEL: 011-706-8031 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp （[at] を@に置き換えて送信してください）
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

実施報告

サステナビリティ・ウィークの10周年を記念して、10月29日（土）・30日（日）に学術交流会館にて国際シンポジウムを開催しました。世界規模で2030年までの達成を目指す国連「持続可能な開発目標（SDGs）」へ貢献する高等教育のあり方を議論すべく、214人が参加しました。

本シンポジウムは、サステナビリティ・ウィークの縮小版の形式を取りました。つまり、共通テーマの下でサステナビリティ・ウィーク実行委員会は全体会を開催し、学内の5つの組織が学外の団体と共催して9つの企画を分科会という位置付けで提供しました。

全体会は二部制とし、第一部は29日（土）に開催し、文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐 鈴木規子氏による挨拶の後、上田一郎理事がサステナビリティ・ウィーク10年の歩みを紹介しました。つづく二つの招待講演と、本学の「サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム」による特別講演を通じて、参加者は今回のテーマについて理解を深めました。第二部は30日（日）に開催し、分科会からの報告を聞いた上で、SDGsに貢献する高等教育のあり方について参加者間で議論が行われました。

第一部における招待講演では、持続可能性を追求するための国連SDGsをはじめとする主要なイニシアチブが概説されました。その上で、アメリカとドイツで高等教育機関や研究者が関与した社会教育や市民教育の事例、課題、その発展可能性が、イニシアチブと関連づけて論じられました。特別講演は、小内透教育研究院長が進行しました。まず、山下副学長より、北海道大学総長へ提言する予定のサステイナビリティ教育の推進方策案が示されました。その後、4人の指定討論者により、当概方策の特徴や課題、改善案が論じられました。北海道大学におけるサステイナビリティ教育の定義と意義について、より明確化させることの必要性が強調されました。

第二部では、持続性に係る課題や教育のステイクホルダーごとに分かれて議論された内容が分科会の代表者から報告されました。その後、SDGsに貢献する人材育成に関わる教員や学生を支える大学の組織や制度のあり方について参加者間で議論を行いました。それにより、特に本学において継続的な議論を必要とする課題の方向性について示唆が得られました。

詳しくはシンポジウム特設ウェブサイトをご覧ください。http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/index.html

開催主旨を述べる上田一郎 北海道大学理事・副学長

スミス氏による招待講演での質疑応答の様子

総合博物館ツアー 持続可能な開発を「クール」に考えよう！
ー北極域展示室を通してー

行事内容

開催日時	2016年10月29日（土）、30日（日）（終了しました）
主催者	北極域研究センター
会場	北海道大学総合博物館
言語：日本語・英語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	この夏、北大総合博物館に新しく北極域研究センターの展示が設置されました。ここでは、北大北極域研究者の様々な研究アクティビティを紹介されています。 地球で最も変動の大きい環境、生態系、人々の暮らしや文化を知り「持続可能な開発」とは何か、私たちとどういう関係あるのか、そして何ができるかを一緒に考えてみましょう！ 展示室では、人々の暮らし（北方の技術、政治・経済）、生態系（陸上・海棲動物、鳥類）、陸の環境（シベリアとアラスカの環境と人との関係）、海と大気（海氷と生態系の変化、モデリング、衛星観測）、雪と氷（グリーンランドの氷河、北大の北極研究）、中谷宇吉郎教授の研究を紹介しています。 ホッキョクグマの剥製（本物）もあります！

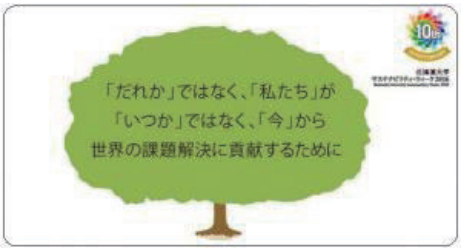
ツアー時刻

- ツアー1回目 10/29（土）10:30～12:30
- ツアー2回目 10/29（土）11:30～13:30
- ツアー3回目 10/30（日）10:30～12:30
- ツアー4回目 10/30（日）12:30～14:30
- ツアー5回目 10/30（日）14:00～16:00

SW10周年記念 国際シンポジウム 詳細情報

総合博物館ツアーは、『サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウム』の共催企画です。シンポジウムのプログラム詳細、最新情報は特設サイトにて公開しています。

・SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/



北海道大学側の実施責任者	大学力強化推進本部 URAステーション URA 小俣友輝
事前申し込み	必要（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	大学力強化推進本部 URAステーション 小俣 友輝 TEL：011-706-9595 E-mail：y-komata[at]cris.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.museum.hokudai.ac.jp/

実施報告

2016年7月にリニューアルオープンした北大総合博物館に、北極域研究センターの展示、『いま最も「クール」な研究』が新設されました。そこには北極域の人々の暮らし、陸や海・大気、グリーンランドの氷河に関する北大の研究、および中谷宇吉郎教授の研究について、解説パネルと展示物が設置されています。

総合博物館ツアー『持続可能な開発を「クール」に考えよう！ ー北極域展示室を通してー』は、地球環境変動の影響を顕著に受ける北極域の課題や、研究成果を通じて「北極域や持続可能な開発目標と自分との関わり」、「持続可能な開発目標に対する高等教育機関の役割」について来場者とともに考えることを目的として実施しました。

本企画の対象者は「SW10周年記念 国際シンポジウム」の参加者やSWのwebサイトを通じて企画を知る国内外の幅広い層の方および博物館を訪問中の北極域に興味のある方でした。北極域をフィールドとする本学大学院生が、北極域の概要、それぞれの研究活動、持続可能な開発目標について解説し、アンケートを実施しました。

アンケート回答者は海外の方5名を含む、学生、市民、企業関係者、教育関係者／研究者等の32名でした。北極域に関しては97%以上が、持続可能な開発目標に関しては85%が「少し以上は関係ある」と回答しました。ときに質疑応答を交えつつ、北極域や地球規模で生じている様々な課題を、より自分たちに関係のある出来事と感じていただけたようです。

ガイドを務めた大学院生は、性別、年齢、国籍の異なる多様な参加者に対して、フィールドで使用する器具を実際に手に取って見せるなど工夫を凝らし、一般的にあまり馴染みのない課題の共有に熱心に取り組みました。

参加者からは「博物館の展示において、インタラクティブなガイドツアーは新鮮」との声も聞かれました。また本学の多様なアクティビティをより広く深く共有するための手段として、博物館展示を利用した専門家によるツアーは非常に効果的との印象を持ちました。

今後、国際連携機構、総合博物館とも継続的に連携し、互いに関係を発展させていきたいと思います。

展示について説明する北大生とツアー参加者の様子

熱心に説明を聴くツアー参加者の様子

第10回HESDフォーラム in 北海道 事例報告会

行事内容

開催日時	2016年10月30日（日）9:30～12:00（終了しました）
主催者	HESDフォーラム
共催	北海道大学国際連携機構、北海道大学大学院教育学研究院
会場	学術交流会館 第一会議室
言語：日本語	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」に取り組む大学が、2007年に第1回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、立教大学、岡山大学、上智大学、徳島大学、京都大学、金沢大学、名古屋市立大学、琉球大学と開催してきました。ここ北海道大学での開催が、記念すべき第10回大会になります。

プログラム

9：30 開会（進行：琉球大学 大島順子）

HESDフォーラムについて

（HESDフォーラム代表／立教大学 阿部 治）

【大学セッション】

9：35『ESDキャンパスアジアーパシフィック・プログラムの成果と展望』

（北海道大学大学院教育学研究院 水野眞佐夫）

9：50『大学の付置機関をとおしたESD教育・研究の可能性ー立教大学ESD研究所の10年間の取り組みをとおしてー』

（立教大学ESD研究所 阿部 治）

10：05『現代GP「豊饒な吉野川を持続可能とする共生環境教育」の報告とその後（改組2）～持続可能な地方発展に関する一考察～』

（徳島大学理工学部 三好徳和）

10:20『金沢大学におけるESDへの取組み』

（金沢大学国際基幹教育院 鈴木克徳）

10:35『地（知）の拠点として取り組む琉球大学の事業の現状と課題』

（琉球大学観光産業科学部 大島順子）

10:50 休憩

【学生セッション】

11:00 琉球大学エコロジカルキャンパス学生委員会の活動

琉球大学（清水萌衣、宮城俊貴、用あかり）

11:15 北海道大学教育学部・大学院教育学院における双方向型短期留学プログラム

北海道大学（増田風雅、真鍋優志、田中真一郎）

11:30 総合討論

教員＆学生

12:00 終了

事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料

実施報告

HESDフォーラムは、ESDに取り組む高等教育機関がその実践等に関する様々な情報交換を行い、ESDの質の向上を図ることを目的として2007年に設立されました。この度、第10回HESDフォーラムを北海道大学のサステナビリティ・ウィークに合わせて開催することができました。開催に際し、会場のご提供ならびに運営にご協力頂きました北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局の皆さまに厚く御礼申し上げます。

午前中の大学セッションでは、五つの大学より事例報告がありました。まず、北海道大学より「ESDキャンパス・アジアパシフィック・プログラム」の成果と展望についての報告があり、続いて、立教大学のESD研究所より、大学の附置機関を通したESD教育研究の可能性とESD研究所の10年間の取り組みについてレビュー頂きました。

次に、徳島大学より、2000年以降多数の大学が取り組んだ文部科学省の「現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）」の持続可能な社会につながる環境教育の推進について、徳島大学が採択を受けて実施したプログラムの内容と実施後の展開をお話し頂きました。

そして、金沢大学からは大学のESDの取り組みをお話し頂きました。金沢大学は、さまざまな変遷を経ながら、現在もESDの関連科目を共通教育のレベルで展開している好事例の一つだと思います。

最後に琉球大学より、文部科学省の展開する「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」という、地域の課題を解決するための事業について、現状と課題を発表頂きました。全体としては、各大学が文部科学省からの様々な補助事業を受け、展開してきた／している取り組みの現状と課題、今後の方向性について、具体的な事例に基づいて忌憚のない意見交換ができたと思います。

また、学生セッションとして、北海道大学と琉球大学の学生による発表の機会を設けました。琉球大学からは、「エコロジカルキャンパス学生委員会」の活動を率直に学生目線で話しました。ボランティアであると同時に、単位付与されるキャンパスの中での活動という点が、非常に特徴的だったと思います。北海道大学は、双方向型の短期留学プログラムについて、写真を基に発表して頂きました。

今までは大学教員や大学としての報告がほとんどでしたが、昨年度より学生セッションを設けました。大学側がある目的をもって行っているものを学生はどう受け取っているか、学生の目線をきちんと知らないと、一方的なやり方になるのではないかという反省もあったためです。今年も学生側の話が聞けたことは非常に良かったと思います。

今後も、各大学の全学教育としてESDをどのように継続することが期待されているか、あるいは望ましいのかということをざっくばらんに話し合うことができることを期待し、HESDフォーラムを継続していきたいと思います。今回の発表内容は、HESDフォーラムのウェブサイトでも公開されますので、事例の報告内容の詳細はぜひ後ほど確認して頂ければと思います。

大学セッションでの発表の様子

学生発表の様子

対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

行事内容

開催日時	2016年10月30日（日） 12:15～13:45
主催者	HESDフォーラム
共催	北海道大学国際連携機構
会場	学術交流会館 第一会議室
言語：日本語	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育の10年」に取り組む大学が、2007年に第1回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、ここ北海道大学にて開催が、記念すべき第10回大会になる。 今年はまた、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」が発効した年でもあり、ポストESDとして、今後高等教育機関がSDGsに対しどのようにかかわっていくべきか、あらかじめ募集した質問や意見を基に、対談形式にて講演を行う。その後、フリートーク的ディスカッションを行う。

スケジュール

12:15 ～ 12:30

開会並びにHESDフォーラム10年の歩みについて（紹介）

12:30 ～ 13:15

阿部治教授、鈴木教授との対談（事前意見聴取に関する応答を交えて）

13:15 ～ 13:45

会場参加者とのフリートークセッション

講演者

講演者1

立教大学社会学部教授・ESD研究所長 阿部治

1955年新潟県生まれ。立教大学社会学部・同研究科教授、専門は環境教育/ESD。現在、同大学ESD研究所長などとして、日本を含むアジア太平洋地域の環境教育/ESDのアクションリサーチを行っている。前日本環境教育学会会長（Fomer President, Japanese Society of Environmental Education）

講演者2

金沢大学国際基幹教育院教授 環境保全センター長 鈴木克徳

環境省（環境庁）に在籍し、オゾン層保護、気候変動等の国際交渉、国際環境協力等に従事。その間、国連アジア太平洋経済社会委員会、世界銀行、日本環境衛生センター酸性雨研究センター、国際連合大学高等研究所（UNU-IAS）等の国際的機関に出向し、活動。UNU-IAS時代には、UNESCOとともに、国連ESDの10年（DESD）の推進を図り、DESD国際実施計画づくりなどを行う。また、ESD地域拠点（RCE）づくりを推進。現在、金沢大学で、北陸におけるESD活動を推進している。

司会

徳島大学大学院理工学研究部 三好徳和

事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました）
参加費	無料

実施報告

「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」という題にて、立教大学の阿部治先生、金沢大学の鈴木克徳先生に対談をしていただく予定であった。しかし、参加者が10余名であったため、両先生に話題提供していただき、フロアーからの質問に答える形として実施した。

簡単に内容をまとめると、まず、SDGsに関する前に、ESDに関し参加者全体での共通認識を作るためのディスカッションを行った。資本主義社会における競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るためにどのようにしなければならないのか。そのように価値観の変換を求めるものがESDである。

では、高等教育機関としてはどのように実施していくかが課題となる。体験プログラムで地域問題を理解するという観点からしたら、初等教育と高等教育では一見すると同じような中身かもしれない。しかしESDとしての中身は、深さが違う。高等教育では問題解決のための調査研究がなされる。

ただ、そうすると、ESDは専門教育と言うことになりはしないか。ESDとして、課題解決のための専門教育もある。しかし、ESDには、先に述べた、競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るために価値観の変換を求めるいわゆる「教養」も重要なことである。これらの事に関しディスカッションを行い相互理解に努めた。

SDGsに関しては、深く議論はできなかったが、post ESDとして、今後ESDを推進する高等教育機関が何を目指すべきかという有用な議論が行えた。第10回目のHESDフォーラムとしては、次の10年に向けて、総括を含めた良い議論ができたと考えている。

活発に意見交換をする参加者の様子

講演会 北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方

行事内容

開催日時	2016年10月30日（日） 9:55～12:00（終了しました）
主催者	北海道大学欧州ヘルシンキオフィス
会場	学術交流会館
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	持続可能な開発目標に貢献する高等教育の実施例としては、北欧（フィンランド、スウェーデン、ノルウェイ、デンマーク）とバルト（エストニア、ラトビア、リトアニア）の国々がよく知られています。本企画では、サステナビリティーウィークのテーマに関して、先進的な取り組みをしているこれらの国々の現状を紹介し、市民、学生、教職員への啓蒙を図ります。

スケジュール

9:55 開会

10:00 ～ 10:30

「ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試み」（駐日ノルウェー王国大使館 松本宏）

10:30 ～ 11:00

「言葉から結果へ:持続的発展のための高等教育に関するスウェーデンの経験」（駐日スウェーデン大使館 Mats Engström）

11:00 ～ 11:30

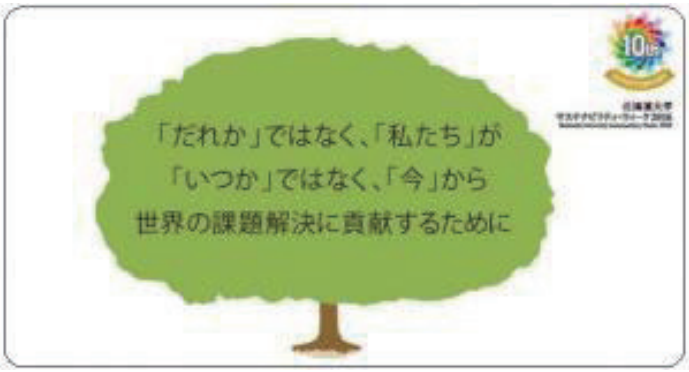
「エストニアから見た持続的発展と教育」（駐日エストニア共和国大使館 Argo Kangro）

11:30 ～ 12:00

「欧州全体の高等教育の流れとFinlandの大学改革の歩み」（北大欧州ヘルシンキオフィス 成田吉弘 ）

プログラム、詳細情報

「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウム参加企画です。プログラム詳細、最新情報はシンポジウム特設サイトにて公開しています。



・ SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 人間システムデザイン部門 特任教授／ヘルシンキオフィス 所長 成田吉弘
事前申し込み	※申し込み受付は終了しました。
参加費	無料
問い合わせ先	大学院工学研究院 人間システムデザイン部門 特任教授 成田吉弘 TEL: 011-706-6414 E-mail: ynarita[at]eng.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください。）

実施報告

2012月4月にフィンランドのヘルシンキに開設された北海道大学欧州ヘルシンキオフィスは、北欧を中心とした欧州全体の大学、研究機関との学術交流のリエゾン役を果たしています。また、FSP(First Step Program)や海外インターンシップなど、学生が欧州で海外体験をする際の手助けをしています。欧州は持続可能な社会実現に対する関心が深いですが、特に北欧はサステナブル社会の実現に貢献する教育でよく知られています。本企画では、サステナブルな高等教育に関して、先進的な取り組みをしている国々の現状を紹介する機会を設け、3人の講師を外部からお招きしました。

はじめに、駐日ノルウェー王国大使館の松本宏氏より、ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試みを紹介しました。続いて、駐日スウェーデン大使館のMats Engström氏は、スウェーデンの高等教育において実施された先進的な試みと評価を詳細に話されました。バルト3国からの唯一の代表となったエストニアからは、Argo Kangro氏が、ノルウェー、スウェーデンとは異なる視点での持続的発展と教育の紹介をされました。最後に、欧州ヘルシンキオフィスを代表して、所長の成田が欧州全体の高等教育の流れを総括した後、とくにフィンランドの大学改革の歩みを紹介しました。

聴衆は約30名であり、講演後に時間を越えて、3人の外部講師へそれぞれ熱心な質問が投げかけられました。札幌で北欧やバルトの国々の高等教育、特に持続可能な社会実現に向けた試みを聞く機会はほとんど無いため、次年度以降もこうした企画の継続が期待されています。

エストニア大使館 アルゴ・カングロ氏による講演の様子

講演会終了後に4人の講師で記念撮影
（左から松本氏，Engström氏，成田ヘルシンキ所長，Kangro氏）

学生ワークショップ 大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる

行事内容

開催日時	2016年10月30日（日） 12:15～13:45 （終了しました）
主催者	北海道大学国際連携機構
共催	環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）
後援	一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ
会場	学術交流会館 1階ホール
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	世界の大きな流れの1つである「持続可能な開発目標（SDGs）」。これだけ聞くと、敷居が高く、自分ごととしてとらえることが難しく感じるかもしれませんが、視点を変えてみると、実は私たちとつながっていることが多く発見できます！3名の大学生の方からお話を伺ってヒントをみつけませんか？ セッションは、ランチを食べながら参加者の皆さんで交流できる時間にしたいと考えています。気軽にご参加ください。 この後は14時からの、学生ワークショップ2「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」も続けてご参加ください。（分科会4の詳細は、こちらをどうぞ！） 私たちにとって身近な存在である「教育」を通して、どのように世界の目標に貢献していけるかワークショップ形式で考えていきます。

スケジュール

12:15 開会

12:20～12:30 情報提供：世界の目標「SDGs」について

12:30～13:00 事例紹介１「大学内でのSDGsの普及啓発について」

13:00～13:30 事例紹介２「実は身近な世界の目標」

13:30～13:45 参加者同士の交流会

13:45 閉会

講演者

「大学内でのSDGsの普及啓発について」

慶應義塾大学 総合政策学部 4年 和田 恵

SDGsを中心とした環境問題を専門とする慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス 蟹江憲史研究会では、実践プロジェクトとしてSDGsの普及啓発活動に取り組んでいます。例えばインスタグラム（SNS）を利用し、SDGsと自分の関心の関連を考えてもらう活動、またキャンパス内をSDGsの１７要素でカバーする「キャンパスSDGs」プロジェクトなどです。特に「キャンパスSDGs」など、学生であること、そしてキャンパスを活かしたプロジェクトについてお話します。

「実は身近な世界の目標」

酪農学園大学 環境共生学類 2年 三品 未和（写真左）

東海大学札幌キャンパス 生物学部 3年 赤松 遼太朗（写真右）

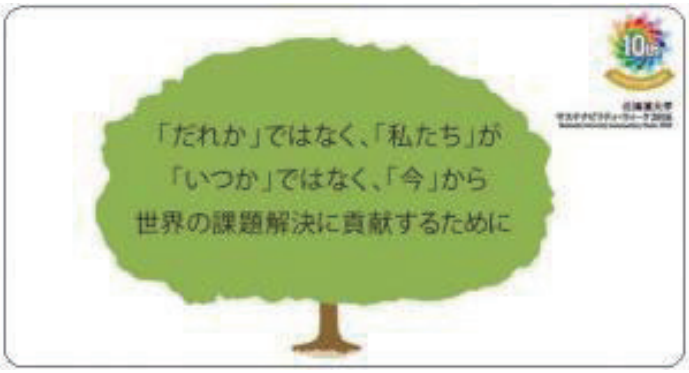
大学の授業で学んだ「生物多様性」。
机の上では理解はできたけど、実世界ではどうなっているのか・・・学外の環境団体（NPO法人ezorock）による環境保全活動に参加して、植物と土や水の関係性などを現場で五感から言葉の意味や概念を体験することで理解がより深まりました。ここでは私たちが行う活動内容の紹介と、それがSDGsのどの目標とつながっているのか紹介します。

司会者

環境省北海道環境パートナーシップオフィス 大崎美佳

プログラム、詳細情報

学生ワークショップ「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウムの共催企画です。プログラム詳細、最新情報はシンポジウム特設サイトにて公開しています。



・SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

事前申し込み	※申し込み受付は終了しました。
参加費	無料（昼食が必要な場合は持込み要）
問い合わせ先	環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道） 大崎美佳 TEL: 011-596-0921 FAX: 011-596-0931 E-mail: epoh-webadmin□epohok.jp（□をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/jp/workshop1.html

実施報告

遠い世界の出来事として捉えがちな「SDGs（持続可能な開発目標）」。本ワークショップでは、3名の学生を招き、SDGsを使った取り組みや自身の活動とSDGsの関わりを発表いただきました。

はじめにEPO北海道から、報告書「成長の限界（1972年）」等に触れ、昔から世界の資源は有限であり、持続可能な社会を作っていくことが必要と言われてきたことを踏まえ、SDGsの経緯や特徴について紹介させていただきました。

和田恵さん（慶応義塾大学 総合政策学部4年生）からは、所属する研究室での取り組みとして、SDGsを同世代の方へ普及啓発するためにSNSを活用した情報発信、シールにしたSDGs各目標を大学構内の関連個所等に貼る「キャンパスSDGs」についてご紹介いただきました。世界の目標を自分事としてとらえてもらうための工夫を凝らした取り組みでした。

三品未和さん（酪農学園大学 環境共生学類2年生）、赤松遼太朗さん（東海大学札幌キャンパス 生物学部3年生）からは、学外の取り組みとして、お二人が所属するNPO法人ezorockの「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」とSDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」や目標15「陸の豊かさも守ろう」との繋がりについてご紹介いただきました。また、登山者への長靴貸し出し等の活動一つ一つが、どのように自然保護とつながっているのか活動の効果を丁寧に説明いただきました。

発表いただいた内容は、グラフィックレコードをという手法を用いて、牧原ゆりえさん（一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ）、丸藤たつのりさん（ユースコミュニティデザイナー）にまとめていただきました。

参加者からは、「SDGsを身近に感じることができた」などの声を頂き、発表内容から多くの示唆を得ることができたようです。その後参加者には、もう一つのワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」へ続けて参加頂きました。

ワークショップの様子

学生発表の様子

学生ワークショップ
学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？

行事内容

開催日時	2016年10月30日（日）14:00～16:00（終了しました）
主催者	北海道大学国際連携機構
共催	環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）
後援	一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ
会場	学術交流会館
言語：日本語	対象：大学生・院生・高校生
行事概要	こちらでは、参加者の皆さんとワークショップ形式で、「SDGsの貢献とは？」「世界とのつながりを持つにはどうしたらいいのか？」などを学生目線から教育について考え、シンポジウム全体に意見を発信します。 12:15～13:45のランチセッションで学んだことをヒントに、参加者の皆さんと話し合いながら自分の想いを形にしていきませんか。もちろん、ここだけの参加も歓迎です。 「SDGsに関する授業があるといい」などの小さなことから、「SDGsに貢献する海外の取り組みを知るために留学制度があるといい」などの大きなことまで、世界の目標と関りを持つ教育になるよう、皆さんの声を届けましょう！ （ランチセッションの詳細は、こちらをどうぞ）

（※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます）

スケジュール

14:00～14:05 開会

14:05～15:45 ワークショップ

（世界の目標と関わりを持つ教育について、参加者と一緒に考えます！）

15:45～16:00 まとめ

16:00 閉会

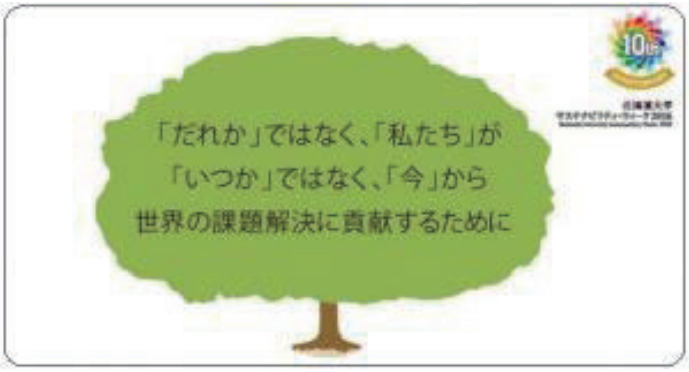
ファシリテーター

一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ 牧原ゆりえ

http://www.sustainabilitydialogue.vision

プログラム、詳細情報

学生ワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウムの共催企画です。プログラム詳細、最新情報は特設サイトにて公開しています。



・ SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	環境省北海道パートナシップオフィス（ EPO北海道） 担当：大崎 TEL: 011 -596 -0921　FAX: 011 -596-0931 E-mail: epoh-webadmin□epohok.jp（※□をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/jp/workshop2.html

実施報告

本ワークショップでは、SDGsの達成に向け、よりよい地域づくりのために高等教育がどうあるべきかを参加者と一緒に考えました。まず、自分たちの暮らしや実現したい夢が、SDGsのどの目標と関わりがあるのか考え、話し合う時間をとおして、SDGsをさらに身近なものにしました。

次に、牧原ゆりえさん（一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ）より「サステナビリティ」実現に向けた考え方の紹介があり、SDGsの達成に向けて高等教育がどうあるべきか参加者と意見交換をしました。高等教育に期待することとして参加者の方から「学内外の方とつながることができるオープンな場所」「無駄なことに挑戦できる」「学生結婚の推奨・支援」「シラバスを教員と一緒に作成すること」等、多彩な意見がでてきました。また、高等教育が学びの部分で恵まれた場所であるかを再認識した機会ともなりました。

最後に、大沼 進准教授（北海道大学大学院 文学研究科）が全体をとおして「活発なディスカッションがされ貴重な意見が出された」とまとめました。

参加者からは、「多様な意見がでたけど高等教育に求めることは皆同じでおもしろい」等、普段は会えない人と意見交換する良い機会になったという声が多く寄せられました。

2つの分科会をとおしてEPO北海道は、今後も持続可能な地域づくりに向けSDGsの普及啓発を行うとともに、社会の次世代の担い手である学生の取り組みや意見が国内がいへ発信される場づくり等をしていきます。分科会を開催するにあたり関係者の皆さまには改めて心より感謝申し上げます。

ワークショップで議論する参加者の様子

参加者の集合写真

講演会 コンフリクトを超える知を生み出す学び
ー分断社会における和解の可能性を探るー

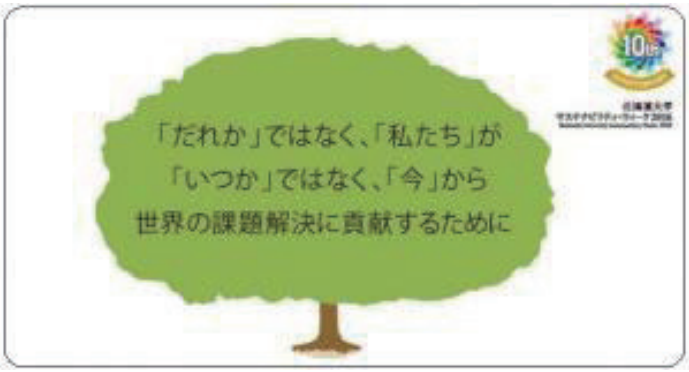
行事内容

開催日時	2016年10月30日（日）14:00～16:00（受付開始：13:00）（終了しました）
主催者	大学院教育学研究院
共催	大学院教育学研究院 附属子ども発達臨床研究センター（予定）
会場	学術交流会館
言語：日本語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	排除型社会は分断と囲い込みをもたらし、人々の間に、そして人々の中にコンフリクトを生じさせます。このコンフリクトを超えて、和解としての平和を構築するためにはどのような学びが必要なのでしょうか？ 本分科会では、被害・加害の対立を超える対話的実践、紛争地域における演劇活動、そして貧困集積地域でのアート活動をとり上げ、この主題について検討します。また、このような活動がESDとして持つ意味についても検討したいと考えています。 プログラム 報告１『平和・和解とESD ～戦争加害国ドイツに見る和解のための対話～』 高雄綾子・フェリス女学院大学 報告２『占領下で「抵抗する芸術」ーパレスチナ、ジェニン自由劇場の事例から』 佐々木陽子・南山大学 報告３『釜ヶ崎で表現の場をつくりつづける喫茶店、ココルームで考えたこと』 上田假奈代・特定非営利法人ココルーム 指定討論『貧困を生きる者の支店からーフィリピンのフィールドワークの事例をもとに』 石岡丈昇・北海道大学教育学研究院 コーディネーター 宮崎隆志・北海道大学教育学研究院

詳細情報

「コンフリクトを超える知を生み出す学び」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウムの共催企画です。プログラム詳細、最新情報は」シンポジウム特設サイトにて公開しています。

・SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/



北海道大学側の実施責任者	教育学研究院 教授 宮崎隆志
事前申し込み	必要（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	教育学研究院 宮崎 隆志 TEL：011-706-3495 E-mail：miyazaki[at]edu.hokudai.ac.jp （※[at]を@に変えて送信ください）

実施報告

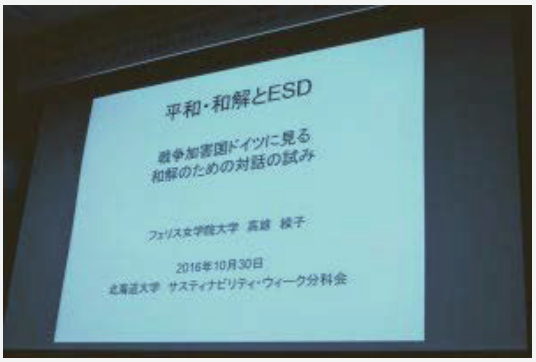
SDGsに取り組む際に必ず浮上するのが、利害対立に起因する葛藤です。この分科会では、葛藤そのものに焦点をあてて、和解や赦しとしての平和を構築するために必要な学びを3つの事例に即して検討しました（スタッフ3人・登壇者4人を除く参加者は45名、計52名）。

高雄先生（フェリス女学院大学）からは、ドイツとポーランドの市民レベルの和解の模索の実践、佐々木陽子先生（南山大学）からはイスラエルの占領下にあるパレスチナのジェニン自由劇場での表現活動、そして上田假奈代さん（ココルーム代表）からは大阪の釜ヶ崎地区における表現による関わりづくりの活動を紹介して頂き、本学の石岡先生（教育学研究院）からコメントを述べて頂きました。

討議では、マクロなレベルで語られる紛争解決としての「和解」ではなく、個人としての当事者の間での「マイクロな平和」に着目する必要性が確認されました。また、そのためには、第一に、分断社会の下で引き裂かれた状況にある個人の声を発することができ、その声が聴き取られる場を社会的に構築することが必要であること、第二に、それにもかかわらず、そのような場を組み込んだシステムが成立していない状況で、演劇のようなシミュレーションによって感情や関係性を取り戻す可能性に着目する必要があること、さらに第三に、関係を固定化させないで揺らし続ける活動が重要であることが確認されました。

環境正義や地球市民という概念は、コンフリクトを解消するものとして語られることがありますが、この分科会ではそれらを平和をもたらす「青い鳥」として扱うのではなく、むしろコンフリクトのもつリアリティから出発し、その矛盾と不断に対峙しながら問いを深める学びが重要であることが明らかにされました。教育学研究院ならびに子ども発達臨床研究センターでは、このような課題をさらに多くの実践者とともに探求していくつもりです。

討議の様子



高雄綾子准教授による講演時のスライド

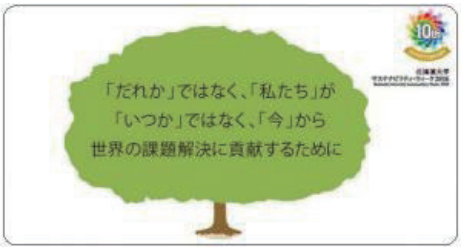
講演会 文化遺産とSDGs－失われた好機？－

行事内容

開催日時	2016年10月30日（14:00～16:00）（終了しました）
主催者	応用倫理研究教育センター
会場	学術交流会館
言語：英語	対象：専門家・大学生・院生・高校生
行事概要	2015年9月25日、国連は「持続可能な開発のための目標」(SDGs)を始動させました。これは2030年までに「貧困に終止符を打ち、地球を守り、すべての人の繁栄を確保する」ための行動目標を「持続可能な開発のための新アジェンダ」として示したものです。 その11番目の目標が「持続可能な都市及び人間居住」です。これには「包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）な都市を実現する」という副題が付いています。11.4では「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」という取り組みを定めています。SDGsの中で「遺産」や「分化」に具体的に言及した箇所は、他にはありません。 「人間、地球、繁栄、平和、パートナーシップ」というコンセプトを中心とするイニシアチブが、1つの目標の下に遺産保護を取り込むのに、都市をターゲットとするのはどこか奇妙にも思えます。何と言っても、世界で自然遺産が見つかる都市というのは皆無に近いのですから！実際のところ、世界の都市人口が増加し続ける一方で、有形の文化遺産のほとんどが、この発展し増え続けるコンクリート街の外に存在しています。エコノミスト以外の人にとっては、「すべての国が持続的で、包摂的で、持続可能な経済成長を享受できる世界」で、この目標を達成できる、と考えるのは、現実の世界の原理に即していないように思えます。 本質的には、これらの目標は人類の長きに渡る存続を実現するのに不可欠な、まさに賞賛すべきアジェンダを定めたものです。これらの目標は、暗に世界を脅かしているものの真因が、概して人類であることを認識しています。では、これらの目標が、人類と地球上の他の生物とを分け隔てる唯一のもの、すなわち「人間の文化」を無視しているように思えるのは、少なくともほとんど注目していないのは、一体なぜなのでしょうか？ 本講演では、ニューキャッスル大学のピーター・ストーン教授を招き、文化遺産・文化財の保護を通した持続可能な社会の構築に向けた課題と展望についての講演を行います。

プログラム詳細、最新情報

講演会「文化遺産とSDGs－失われた好機？－」は、サステナビリティ・ウィーク10周年記念 国際シンポジウムの共催企画です。プログラム詳細、最新情報はシンポジウム特設サイトにて公開しています。



・ SW10周年記念 国際シンポジウムウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/

北海道大学側の実施責任者	応用倫理研究教育センター 准教授 眞嶋俊造
事前申し込み	※申し込み受付は終了しました。
参加費	無料
問い合わせ先	応用倫理研究教育センター TEL: 011-706-4088 E-mail: caep[at]let.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

本行事では、文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステイナビリティの倫理についての研究の第一人者である英ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授に”Cultural heritage and the Sustainable Development Goals. A missed opportunity?”というタイトルの講演を行って頂きました。

SDGsの11-4にも掲げられているように、文化遺産・文化財の保護というのは現代社会において喫緊の課題であり、また持続可能な社会を構築するために必要不可欠であることが指摘されました。また、文化遺産・文化財の保護を通した持続可能な社会の構築に向けた課題と展望についての議論を深めました。

ストーン教授は大学教員になる前にイングリッシュ・ヘリテージ財団に勤務し、ハドリアヌスの壁の管理責任者であった実務経験を踏まえた議論は、教育の重要性を強調するものでした。ストーン教授がこれまで行った、英国国防省より依頼されたイラク戦争における遺跡の損壊・破壊に関する調査、またユネスコにおけるリビア等での武力紛争における遺跡の略奪状況などの調査についての報告は、当事者でしか知ることができないであろう非常に興味深い、また貴重な内容でした。

歴史家であるストーン教授が講演において強調された言葉は以下の通りです。「私たちが歴史を学ぶのは現代を理解するためであり、また未来を創るためである」。文化遺産や文化財を保護しそれらの歴史を学ぶことの重要性を論じることは、人性の涵養という持続可能な社会の構築について考えるという、まさに本シンポジウムの趣旨に合致するものでした。

ストーン教授による講演の様子

会場の様子

第2回 北大ー理研ー産総研「触媒研究」合同シンポジウム
～持続可能社会実現に向けたキャタリストインフォマティクス～

行事内容

開催日時	2016年10月31日（月） 13:30～18:00（開場 12:30）（終了しました）
主催者	触媒科学研究所 産業技術総合研究所 理化学研究所
会場	学術交流会館
言語：英語（通訳無し）	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	ものづくりの基盤を支えている「触媒研究」は、我が国の強みであり、今後さらにその強みに磨きをかけて行くことが求められている。 日本の触媒研究を牽引する研究組織である北海道大学・触媒科学研究所、理化学研究所・環境資源科学研究センターおよび産業技術総合研究所・触媒化学融合研究センター・人工知能研究センターは、国際競争に打ち勝つ強靭なイノベーションシステムの構築に向け、触媒化学における研究成果の最大化を達成するべく連携を開始した。 今回、「持続可能社会実現に向けたキャタリストインフォマティクス」の創成を目指して、第二回合同シンポジウムを北海道大学で開催する。 ≪≪ 懇親会 ≫≫ ・【日時】2016年10月31日（月） 18:30～20:30 ・【場所】アパホテル TKP札幌駅北口 EXCELLENT レストラン サンレモ http://www.apahotel.com/hotel/hokkaido/09_tkp-sapporoeki-kitaguchi/ ・【会費】5,000円 ・【申込】下記の事前申し込みから、お申し込みください。

【ポスター】

（※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。）

北海道大学側の実施責任者	触媒科学研究所 教授 西田まゆみ
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	シンポジウム参加無料
問い合わせ先	触媒科学研究所　合同シンポジウム事務局 TEL: 011-706-9381 E-mail: HRA-Joint-Sympo[at]cat.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

持続可能社会実現に向けた、キャタリストインフォマティクスの創成を目指している北海道大学触媒科学研究所、産業技術総合研究所、理化学研究所が主催となり、第2回北大−理研−産総研「触媒研究」合同シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、昨年、理化学研究所を企画者として、第1回理研−北大−産総研「触媒研究」合同シンポジウムー知の発掘と革新触媒創造をめざすキャタリストインフォマティクスーが東京にて開催され、キックオフも兼ねて各主催機関を代表する研究者が今後の触媒研究のあり方について講演を行いました。東京開催ということもあり、企業や官公庁からの出席者も多くみられました。

本年は、北海道大学触媒科学研究所が企画者となり、ドイツのFHIやアメリカのSUNCATから講演者を招いて国際シンポジウムへと発展させ、キャタリストインフォマティクス創成のためのより具体的な研究について若手を含めて7名の講演者が講演を行いました。来場者は約120名におよび、大変有意義なシンポジウムだったとの感想が多く寄せらせました。

来年には産業技術総合研究所が企画者となり、更なるキャタリストインフォマティクスの発展を目指して第3回シンポジウムが関東にて開催される予定です。

講演の様子

講演者・参加者の集合写真

サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2016
持続可能な大学と地域の発展のためのキャンパスの役割
ーサステイナビリティの概念を取り込んだキャンパスマスタープランとはー

行事内容

開催日時	2016年11月1日（火）基調講演 10:00～14:30（受付開始 9:00）/ 意見交換会 18:00～20:00 （終了しました）
主催者	サステイナブルキャンパス推進本部、施設部
後援	北海道、札幌市、日本建築学会北海道支部
会場	学術交流会館（基調講演）、レストラン「エルム」（意見交換会）
言語：英語（逐次通訳あり）及び日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	持続可能な社会構築のための大学の役割として、その教育研究によって産み出される知財、学生や研究者のような人財を社会へ還流させることと、大学キャンパスをひとつの社会の縮図と見立て、ハード･ソフトに関わらず社会実験の場として活用し、得られた知見を基に社会実装の道筋を付けることがあります。 これらの役割を果たすキャンパスの、物理的空間およびその機能を計画したものがキャンパスマスタープランであり、大学運営に伴う環境負荷を低減させ、さらにキャンパスで生活する大学構成員のwell-beingを支える物理的空間及びその機能を計画したものでもあります。 サステイナブルキャンパスをどのように捉え、キャンパスマスタープランへどのように描ききっていくのか、国内外からの招待講演者による基調講演およびワークショップによる実践を通して理解を深めます。

	意見交換会 場所・お申し込みについて ・場所：ファカルティハウス「えんれいそう」内レストラン「エルム」 ・事前申し込み：メールまたは下記の申込サイトより要申込。10/28 17:00まで。 E-mail: osc[at]osc.hokudai.ac.jp（[at]を@に変えて送信してください）
北海道大学側の実施責任者	サステイナブルキャンパス推進本部 特任准教授・プロジェクトマネージャー 横山隆
事前申し込み	※申し込み受付は終了しました。
参加費	無料
問い合わせ先	サステイナブルキャンパス推進本部 横山 隆 TEL：011-706-3661 E-mail：osc[at]osc.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.osc.hokudai.ac.jp/

実施報告

本シンポジウムは、今年で6回目の開催です。今年は「持続可能な大学と地域の発展のためのキャンパスの役割 – サステイナビリティの概念を取り込んだキャンパスマスタープランとは」をテーマに掲げました。

サステイナビリティの概念について共通理解を深める方策として、キャンパスの機能及び物理的空間形成を計画するキャンパスマスタープランに焦点を当て、サステイナビリティの概念をキャンパスマスタープランに取り込む過程とサステイナブルキャンパス実現への道程を議論しました。

山口総長より、ビデオメッセージ「キャンパスマスタープランについて議論して欲しいこと」の中で、「北海道大学近未来戦略150」で世界の課題解決に貢献する北海道大学となることを宣言したことや、地球の未来と北海道大学の未来とを同時に考えながら力を注いで欲しい、とのお考えを頂きました。

基調講演には66名の参加があり、ミラノ工科大からエウジェニオ・モレロ助教、九州大学から鶴崎直木 准教授、名古屋大学から恒川和久 准教授、大阪大学から吉岡聡司 准教授をお招きして、先進的なキャンパスマスタープランをまとめた事例を紹介して頂きました。

続いて行なったワークショップでは、36名が5つのグループに分かれ、「北大キャンパスの重要課題を選定」して「北大の新キャンパスマスタープランに書くべきことを決定」し、「北大キャンパスの重要課題を解決する方策の提案」を具体的（計画実現のプロセス、方策、体制、キャンパスを活性化させるための仕組み、資金等）にまとめました。5つの発表では活発に質問も出ており、他大学の教職員、キャンパス計画に携わる民間企業社員の方々と本学の教職員及び学生が協働する、大変貴重な機会となりました。

講演者・スタッフ の集合写真

ワークショップの様子

札幌国税局長 特別講演会「税務行政の現状と国税庁の取組」

行事内容

開催日時	2016年11月2日（水） 10:30～12:00（終了しました）
主催者	経済学部
会場	学術交流会館 講堂
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	税は、国や地方公共団体の財政支出の中心的な財源です。日本の社会保障制度や教育制度などが持続可能であるためには、税収の安定した確保が不可欠です。 消費税率の引き上げを平成31年10月まで延期した今、持続的な社会保障制度や教育制度などを支えるためにはどのような税制のあり方が求められているのでしょうか。 経済学部では、札幌国税局長の山崎浩二 氏をお迎えして、我が国における財政及び税務行政の現状と、国税庁の取組や国税職員の仕事について講演していただきます。 沢山の大学生、市民の参加をお待ちしています。

北海道大学側の実施責任者	大学院経済学研究科 教授 小山光一
事前申し込み	不要
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院経済学研究科 小山 光一 TEL: 011-706-3996 E-mail: koyama[at]econ.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.econ.hokudai.ac.jp/

実施報告

経済学部では、札幌国税局長の山崎浩二氏による特別講演会を11月2日（水）午前10時30分より学術交流会館・講堂において開催しました。特別講演会のタイトルは「税務行政の現状と国税庁の取組」で、査察調査や納税環境の整備などの問題とともに、国際化という環境変化に対しどのように対応しているかという税務行政の現状について講演して頂きました。

講演者である山崎氏は、国税庁に勤務し、名古屋と大阪の国税局の査察部長、国税庁の個人課税課長を務めてきました。

講演では、まず、査察調査の現状についてビデオが放映され理解を深めることができました。次に、税務行政が国際的な取引にどのように対応しているかという問題について説明しました。さらに、確実な税金の納付と納税環境の整備の問題などについて述べました。

講演会には212名という多数の出席者があり、経済学部の学生と大学院生ばかりでなく、北海道大学の他学部や他大学の学生、一般の方の参加もありました。当日、参加者にアンケートを配付したところ、参加者の多くから山崎氏の講演が非常に有益であった旨の回答がありました。

国民が税に関心を持ち、税の理解を通して社会に参加し、納税を通して真剣に社会を支えていこうとする意識を持つことが重要です。このような講演会が、学生の皆さんに現実の問題に関心を抱かせ、真剣に社会の在り方を考えてもらうよい機会になることを期待します。

講演の様子

熱心に講演に耳を傾ける聴衆の様子

保健科学研究院公開講座 ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ

行事内容

開催日時	2016年11月3日（木）13:00～16:00（受付開始 12:00）（終了しました）
主催者	大学院保健科学研究院
会場	大学院保健科学研究院 E棟1階 多目的室
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民
行事概要	保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を分かりやすく行います。講演予定については、次のとおりです。 第1限目は、「老化を画像検査で見る」と題して、加藤教授が老化に伴う症状として、腰痛や関節痛から鬱症状、癌など画像検査でどこまで診断できるか紹介いたします。 第2限目は、「高齢者の運動習慣によるヘルスプロモーション 」と題し、前島教授が高齢者における運動習慣は運動機能の低下に加えて認知症の予防に対しても有効であることから、運動による広範な予防的効果の可能性についてご紹介します。 第3限目は、「伝統社会で暮らす人々のライフスタイルと健康：異文化フィールドワークの方法と事例」と題して、山内教授が開発途上国の農村部など伝統的な生活を色濃く残している社会で暮らす人々の健康について、生活に密着したフィールド調査によって明らかにしていき、その方法論と事例を紹介します。

【ポスター】

（※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。）

北海道大学側の実施責任者	大学院保健科学研究院 教授 惠淑萍
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院 保健科学研究院 医学系事務部 保健科学研究院 事務課 E-mail：shomu[at]hs.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	https://www.hs.hokudai.ac.jp/archives/9803/

実施報告

保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を行い、75名の参加がありました。

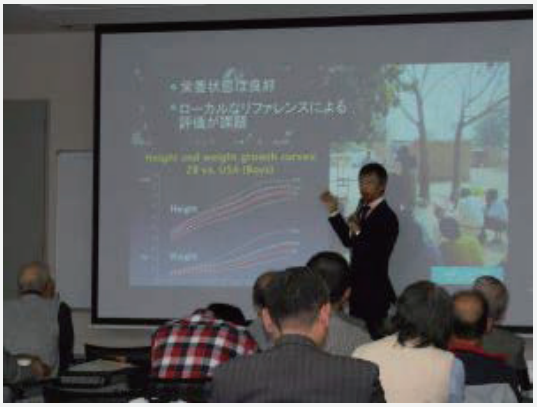
第1限目は、加藤千恵次 教授が「老化を画像検査で見る」と題して、老化に伴う症状として、腰痛や関節痛から鬱症状、癌など画像検査でどこまで診断できるかについて講演しました。

第2限目は、前島 洋 教授が「高齢者の運動習慣によるヘルスプロモーション」と題して、高齢者における運動習慣は運動機能の低下に加えて認知症の予防に対しても有効であることから、運動による広範な予防的効果の可能性について講演しました。

第3限目は、山内太郎 教授が「伝統社会で暮らす人々のライフスタイルと健康～異文化フィールドワークの方法と事例～」と題して、開発途上国の農村部など伝統的な生活を色濃く残している社会で暮らす人々の健康について、生活に密着したフィールド調査によって明らかにしていく方法論と事例について講演しました。

講演者は、サステナビリティ・ウィーク2016のキャッチ・コピーである「『だれか』ではなく、『私たち』が『いつか』ではなく、『今』から世界の課題解決に貢献するために」から、「持続可能な社会づくりに向けた“世界の交流プラットフォーム”」をキーワードとして、保健科学の視点から講演しました。

参加者からは概ね好評を博し、さまざまな質問があり、各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。今後も毎年、その時の時代を反映するようなテーマや興味を持って参加いただけるようなテーマを設定して、同じ時期に公開講座を開催していく予定です。



山内太郎教授による講演の様子

質疑応答の様子

国際シンポジウム 東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探る
ー先住民文化遺産と考古学：台湾原住民とアイヌー

行事内容

開催日時	2016年11月3日（木） 9:30～17:30（終了しました）
主催者	アイヌ・先住民研究センター
共催	文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究「稲作と中国文明 – 総合稲作文明学の新構築 –」
後援	観光学高等研究センター
会場	学術交流会館（第1会議室）
言語：日本語・英語（逐次通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	本シンポジウムでは、先住民族の文化と伝統を共に有する北海道と台湾を対比することから、アジアにおける先住民族と考古学の協業のあり方を考えます。 文化遺産の保全と管理の取り組みを手掛かりに、地域社会との連携や、先住民族の権利、知的財産権についても検討します。植民地経験の多様性を考える上でもアジア以外の北米や北欧の研究者を対話者に迎えて、より幅広い世界的な視野から意見交換を行います。 コーディネーター 加藤 博文 北海道大学アイヌ先住民研究センター・教授 発表者 吉開 将人 北海道大学文学研究科・教授 劉 益昌 中央研究院歴史語言研究所・研究員 陳 有貝 国立台湾大学人類学系・副教授 青野 友哉 伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 陳 瑪玲 国立台湾大学人類学系・教授 鄭 安睎 国立台中教育大学区域与社会発展学系・助理教授

ポスター

東アジアにおける大学と
先住民族との
協業のあり方を探る
2016年11月3日 木
9:30~17:30
北海道大学学術交流会館第1 会議室
https://hucloia.hokudai.ac.jp/sw/list

東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探る
プログラム

北海道大学側の実施責任者	アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	アイヌ・先住民研究センター 加藤 博文 TEL：011-706-2859 E-mail：ainu[at]let.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.cais.hokudai.ac.jp

実施報告

先住民族の文化遺産の保存活用に考古学がどのように取り組むことができるか、また地域社会と連携した有効な取り組みの事例の国際比較をテーマとして議論を行いました。過去のシンポジウムでは、北米や北欧との比較を行ってきましたが、今年度は特に東アジアに焦点を絞り、先住民族との協業に取り組んでいる台湾と日本との事例比較を行いました。

台湾からの報告は、国立台湾大学、国立成功大学、国立台中教育大学の研究者による台湾での取り組みの報告でした。シンポジウムでは、最初に北大と台湾側から東日本と台湾の概説的な報告を皮切りに、具体的な地域での取り組み事例についての報告を行いました。特に台湾の事例では、政権交代後の新たな原住民族の政策展開の中で、考古学の調査を通じた原住民族の文化遺産の確認と評価が原住民族の権利獲得に繋がる具体的な事例の報告があり、台湾で進みつつある新たな動きを学ぶ良い機会となりました。北海道側の取り組みについては、伊達市の事例を報告いただくことで日本側の新たな動きについての情報共有も可能となりました。

また、2日目には平取町へ場所を移し、アイヌ文化行政や文化振興に取り組む自治体職員や地域住民を交えて討論を行うことができました。

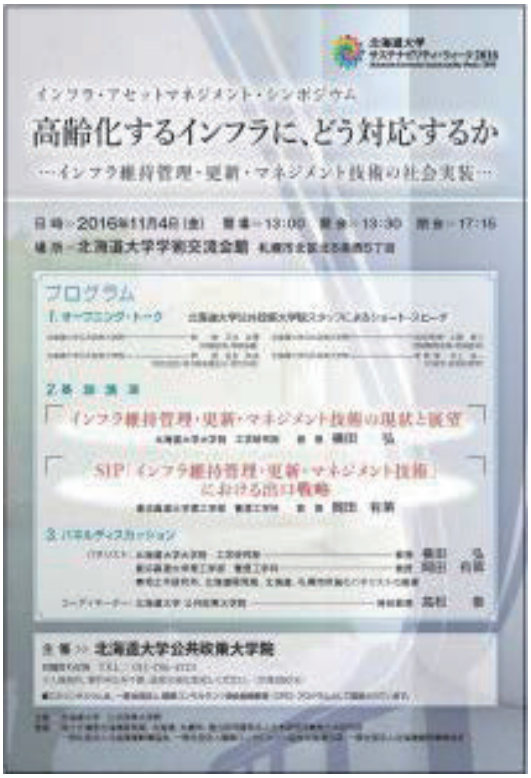
内容的に身近で、交流頻度の高い東アジアでの事例の比較であったことを考えると、次年度以降は、通用の一般向けのアナウンスに加えて授業の一環としての開催など、より学生や留学生を巻き込んだ取り組みにするなどの工夫を行っていく必要があると考えています。

発表者の集合写真

講演会場の様子

シンポジウム 高齢化するインフラに、どう対応するか
ーインフラ維持管理・更新・マネジメント技術の社会実装ー

行事内容

開催日時	2016年11月4日（金）13:30～17:15（受付開始 13:00）（終了しました）
主催者	公共政策大学院
後援	国土交通省北海道開発局、北海道、札幌市、国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所、一般社団法人北海道建設業協会、一般社団法人建設コンサルタンツ協会北海道支部、一般社団法人北海道塗装事業協会
会場	学術交流会館 講堂
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	私たちの生活や社会活動を支える橋梁・舗装・トンネルといった社会インフラは、その多くが高度経済成長期に建設されたもので、近年、大事故が頻発するなど、老朽化の問題が指摘されています。 このシンポジウムでは、公共政策大学院スタッフによるオープニング・トークの後、慶応義塾大学管理工学科の岡田有策教授、北海道大学工学研究院の横田弘教授より基調講演をいただき、後半は、寒地土木研究所・北海道開発局・北海道庁・札幌市からもパネリストを迎えて、老朽化するインフラを今後どのようにマネジメントしていくか議論を行います。 
北海道大学側の実施責任者	公共政策大学院 特任教授 高松泰

事前申し込み	不要。当日、直接会場にお越しください。（定員250名）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学公共政策大学院 田中 みどり TEL：011-706-4723 E-mail：office[at]hops.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.hops.hokudai.ac.jp/

実施報告

公共政策大学院では、11月4日（金）、学術交流会館にてインフラ・アセットマネジメント・シンポジウム「高齢化するインフラに、どう対応するか …インフラ維持管理・更新・マネジメント技術の社会実装…」を開催しました。

冒頭オープニング・トークの部では、本大学院の石井吉春 教授（地域経済）、笠松拓史 教授（地方自治・地方行財政）、小磯修二 特任教授（地域開発政策）、村上裕一 准教授（行政学・技術政策学）が、各観点からの問題提起を中心に、ショートスピーチを行いました。

基調講演の部では、北海道大学工学研究院の横田弘 教授と慶應義塾大学理工学部の岡田有策 教授から講演をいただきました。横田教授からは「インフラ維持管理・更新・マネジメント技術の現状と展望」というタイトルで、先駆的研究の動向や海外での実践例を、岡田教授からは北海道の地域特性にひきよせながら「SIP『インフラ維持管理・更新・マネジメント技術』における出口戦略」についてお話しいただきました。

シンポジウムの後半では、講演講師の2名のほか、行政機関等からもパネリストを迎え、高松 泰 特任教授をコーディネータとするパネルディスカッションを行いました。北海道開発局建設部 道路維持課長の坂場武彦 氏、北海道建設部 建設政策局維持担当課長の若山 浩 氏、札幌建設局土木部 維持担当部長の渡辺和俊 氏、国立研究開発法人 土木研究所寒地土木研究所 寒地保全技術研究グループ長の熊谷政行氏から最近の取組みを紹介いただいた後、アセットマネジメント技術の社会実装について多角的な議論が交わされました。

会場には、自治体、道内の土木建設関係の民間企業、コンサルタント、一般市民の方々等、160名ほどにおいでいただきました。今後は、室蘭工業大学、北見工業大学の研究チームと協力し、各地でのワークショップ、研究開発にあたってまいります。

オープニングトークの様子

パネルディスカッションの様子

留学希望者向けセミナー SD on Campus

行事内容

開催日時	2016年11月4日（金）18:10～20:10（受付開始 17:40）（終了しました）
主催者	国際連携機構
会場	国際連携機構 1階 111室
言語：英語	対象：大学生・院生
行事概要	本企画は、協定大学においてサスティナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを、北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)で交換留学している留学生等に依頼し、学生の目線での情報提供を行ってもらう、学生向けセミナーです。

北海道大学側の実施責任者	文学研究科 教授 瀬名波栄潤
事前申し込み	※申し込み受付は終了しました。
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際部国際交流課 石黒 公美 TEL: 011-706-8053 E-mail: jryugaku[at]oia.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

国際連携機構は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校、フィンランド・東フィンランド大学、本学の4大学でした。学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム(HUSTEP)で交換留学している留学生等に依頼しました。

イベントでは、各大学がサスティナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。

本イベントは本年で9度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「SDについて、また世界の大学がSDにどう取り組んでいるかを詳細に知れて良かった」、「英語でプレゼンを聞く良い機会になった」「社会の諸事情に目を向けるモチベーションになった」などの回答がみられました。また、発表した留学生等も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。

学生による発表の様子

会場の様子

歯学研究科企画第8弾 お口の健康と歯科医療 その2
ー患者サイドに立った知識の浸透ー

行事内容

開催日時	2016年11月6日（日）9:30～13:00（受付開始 9:00）（終了しました）
主催者	歯学研究科
会場	歯学部講堂
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	生活の質を左右する要素の一つに、食事があります。本企画は、この「食事」を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的とします。 内容的には一般の方でも十分理解できるわかりやすい日本語で、かつ、話上手な講師による講演会を開催いたします。好評であれば今後、シリーズ化して継続的に提供していこうと考えています。みなさま奮ってご参加ください。
北海道大学側の実施責任者	歯学研究科 講師 有馬太郎
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 大学院歯学研究科 有馬 太郎 TEL：011-706-4275 FAX：011-706-4276 E-mail：tar[at]den.hokudai.ac.jp（※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

歯学研究科では、平成28年11月6日（土）9時30分から13時00分まで歯学部講堂において、市民公開特別講座として「お口の健康と歯科医療 その2−患者サイドに立った知識の浸透」を開催しました。本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、歯学研究科としては8つめの企画でした。

同講座では、食事を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で3名の講師が講演を行いました。

大学院歯学研究科長・歯学部長横山敦郎教授の開会挨拶の後、大学院歯学研究科有馬講師から「唾液と摂食嚥下のメカニズム」について、北海道歯科衛生士会・札幌北楡病院歯科衛生士原田晴子氏から「オーダーメイドのブラッシング」について、最後に北海道大学病院後藤まりえ助教から「義歯を中心とした補綴治療の現状と義歯に関する留意点（清掃や食事の仕方）」についての講演が行われました。

また、同講座は道民カレッジ連携講座としての開催でもありました。前日から雪が降り、当日も雪が残るという悪天候となりましたが、当日受付の方も含めて32名の方が参加されました。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。またサステナビリティ・ウィークにも「持続的に」話題を提供してまいります。

開会挨拶をする横山敦郎 歯学研究科長

会場の様子

グリーンランドをめぐる「音楽」・「冒険」・「サイエンス」
ー北極域の持続可能な未来にむけてー

行事内容

開催日時	2016年11月7日（月）15:00～18:00（受付開始 14:00）（終了しました）
主催者	低温科学研究所、北極域研究センター、THE MUSIC PLANT、ArCS北極域研究推進プロジェクト
会場	北海道大学 総合博物館
言語：日本語・英語（逐次通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	北極域研究における日本の研究拠点、低温科学研究所・北極域研究センターが、自然・社会環境の著しい変化に直面するグリーンランドをテーマに開催するイベントです。 グリーンランドで氷河・氷床、海洋、社会科学などに取り組む研究者のミニセミナー、グリーンランドの人気音楽グループNanookによるコンサート、北海道在住の冒険家・立本明広氏と奈良亘氏による現地の映像を交えたトークなど、ユニークで多彩なプログラムを通じて、「持続可能な社会」に向けた大学の貢献について市民のみなさまと考えます。 7月にリニューアルオープンした北海道大学の総合博物館を会場に、グリーンランドの自然・社会環境・文化についてこの機会に学んでみませんか？そして、「日本にいる私たちがいまできること」について一緒に考えましょう。 Nanook：グリーンランドで随一の人気を誇るバンドです。中心メンバーのクリスチャン・フレデリック兄弟が北大を訪れて演奏します。

立本明広・奈良亘：北海道を拠点に活動する冒険家。二人が友人と行った2回のグリーンランド遠征が美しい写真集として出版されています。

プログラムが入ったポスターができました。ぜひご覧ください。

北海道大学側の実施責任者	低温科学研究所 准教授 杉山慎
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	低温科学研究所 杉山 慎 TEL：011-706-7441 E-mail：sugishin[at]lowtem.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

日本の北極研究をリードする北大の取り組みを一般市民・学生に伝えるため、グリーンランドに焦点をあてた本イベントを実施しました。本学からは、低温科学研究所の雪氷研究者、スラブ・ユーラシア研究センターの社会科学研究者がそれぞれグリーンランドの自然と社会の概要を紹介。その後、北海道を拠点とする冒険家によるトーク、グリーンランド随一の人気を誇るバンド「ナヌーク」による演奏が行われました。最後はナヌークのメンバー2人を交えたパネルディスカッションを実施し、グリーンランドのサステナブルな将来について意見を交換しました。

会場を埋めた約100名の参加者は、大学生から年配まで様々。科学・冒険・音楽という3つのキーワードそれぞれに惹かれて、幅広い範囲の方々が集りました。各講演に関して熱心な質問が飛び、通訳を交えたパネルディスカッションの一問一答に大変良い反応がありました。休憩時間にはナヌークとイベント参加者との交流もあり、普段はなじみが薄いグリーンランド・北極・極域について身近に感じてもらえたと考えています。

7月に北極展示が新規オープンしたタイミングでもあり、今回のイベントを北海道大学博物館で開催することになりました。シロクマのはく製や、グリーンランドを含む北極の写真を展示したコーナーはイベント内容にぴったりで、休憩時間を有効に使って展示を見てもらうことができました。北極に力を入れる北大の良いアピールになったと感じます。今後も極域での研究活動を市民に伝えるために、研究以外の要素を取り入れた行事の開催を検討していきたいと考えています。

杉山慎教授によるオープニングの様子

参加者との活発な質疑応答の様子

グリーンランドの音楽グループ「Nanook」によるトークの様子

JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道
ー国際協力の場で働きたい方、専門性を活かしたい方へー

行事内容

開催日時	2016年11月12日（土）10:00～17:00（受付開始 9:30）（終了しました）
主催者	国際協力機構（JICA）
共催	北海道大学 国際部国際連携課
会場	北海道大学 高等教育推進機構
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	JICAでは、“国際協力の世界で仕事をしたい”と考えている社会人や大学生・大学院生などを対象に、『国際協力人材セミナー』を開催しています。 JICAをはじめ、開発コンサルタントや国際機関などの国際協力実施団体から講師を招き、実際の仕事内容やキャリアパス、求められる資質や能力について解説頂きます。 1日で国際協力業界の様々な仕事・キャリアについて知ることができる貴重な機会です！個別のキャリア相談なども実施予定です。 （※画像をクリックすると、詳細がご覧になれます。）

タイムスケジュール

10:00～　受付

10：30～11：20 基調講演/国際協力の全体像

講師）JICA国際協力人材部

11:20～11:30 ～休憩10分～

11:30～12:30 JICA公募型専門家セッション

講師）JICA国際協力人材部、公募型専門家

12:30～13:00 ワンポイント相談／フリートーク

相談員）JICA国際協力人材部、JICA公募型専門家 他

13:00～13:15 ～休憩15分～

13:15～14:30 NGO/NPOセッション ＠1階会場

・NPO法人「飛んでけ！車いす」の会

国際基幹セッション ＠2階会場

・外務省 国際機関人事センター

・国際連合工業開発機関（UNIDO）

14:30～14:45 ～休憩15分～

14:45～16:00 ワンポイント相談/フリートーク ＠1階会場

・NPO法人「飛んでけ！車いす」の会
・外務省 国際機関人事センター
・国際連合工業開発機関（UNIDO）

開発コンサルタントセッション ＠2階会場

・一般社団法人 海外コンサルタンツ協会（ECFA）
・株式会社パデコ
・日本工営株式会社

16:00～16:10 閉会

16:10～16:15 ～休憩5分～

16:15～17:00 ワンポイント相談/フリートーク ＠2階会場

・閉会後、同会場にて開発コンサルタントセッション講師によるワンポイント相談/フリートーク実施

JICA PARTNERとは？

＊ PARTNERのサービス詳細はこちら。（ウェブサイト：http://partner.jica.go.jp/）

北海道大学側の実施責任者	国際部国際連携課 国際協力マネージャー 榎本宏
事前申し込み	必要（※お申込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	国際協力機構（JICA） 国際協力人材部 PARTNER事務局 TEL：03-5226-6785 E-mail：jicahrp[at]jica.go.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://partner.jica.go.jp/resource/newsemi/jinzai/20161112_hokkaido.html

実施報告

国際協力に関心がある、または国際協力の現場で活躍を目指す人材に対し国際協力業界におけるキャリアの情報を提供し、国際協力活動への参加を促すことを目的とし、「国際協力人材セミナーin北海道」を実施致しました。63名の方に参加いただき、参加者のほぼ全員が北海道内からの参加であり、学生・大学院生が大半を占めました。

プログラムは、「国際協力の全体像」として国際協力業界の動向について説明し、続いて以下の国際協力の各アクター（組織・仕事）の紹介およびそれぞれぞれのアクターの活動事例・キャリア形成等について説明しました。その後、各アクターの経験者との意見交換を実施しました。

紹介した各アクター（組織・仕事）：

- JICA：JICA職員、JICA専門家
- NGO：NGOを支援するネットワーク型NGOの相談員、「飛んでけ！車いす」の会 理事
- 開発コンサルタント：開発コンサルタント ECFA、パデコ、国際航業
- 国際機関：外務省国際機関人事センター、国連工業開発機関（UNIDO）。

また、事前申し込み制の個別キャリア相談を実施し、13名が参加しました。参加者に実施したアンケートでは、計52名のうち50名より「非常に満足および満足」との回答を頂き、大変満足度の高い(96%)セミナーを提供することができました。

参加者からのコメント（抜粋）：

- 今回初めてこのようなセミナーに参加し、国際協力に関わる組織や手段に様々な種類があることを知った。
- 普段聴くことができない話を聴き、貴重な時間を過ごすことができた。今後も定期的に実施してほしい。
- 学生としてもっと経験を積むためインターンに参加するという選択肢を知った。また、幅広い知識を習得するという、自分の課題を確認できた。
- 国際機関について、敷居が高いのは当然だが目指す道もあるのだなと思った。目指すには今から必要な力を身につける努力が必要なこともわかった。UNIDOのことは知らなかったが、お話を聞いて非常に興味を持った。
- 開発コンサルタントについて今回初めて話を聞き、セクター別にも多くの分野があることを知り、今まで持っていたイメージが変わった。今後のキャリア形成の一選択として考える機会となった。
- 個別キャリア相談の開催もあり普段札幌ではチャンスが少ないのでとてもいい機会だった。

JICAとしても参加者の熱意に触れ、引き続きより多くの北海道の人材に対して、国際協力業界におけるキャリアに関する情報を提供したいと考えております。

開発コンサルタントセッションの様子

熱心に聴き入る参加者の様子

行事内容

開催日時	2016年11月16日（水）（終了しました）
主催者	オウル大学（フィンランド）
会場	オウル大学（フィンランド）
言語：英語	対象：
行事概要	

※行事変更のお知らせ※

年度当初より、フィンランドの大学とサステナビリティに関わる議論の場を設定しようと、ジョイントシンポジウムという形で調整を行ってまいりましたが、諸事情により、今年度はフィンランドの大学が単独主催することとなりました。

ただし、当初案内の通り、同日、同開催場所で北極域に関するリサーチセッションが行われます。本学からも研究者を派遣予定です。

北極域に関する最新の研究知見を共有する場となりますので、参加を希望される方は、是非会場へお越し下さい。

THULE INSTITUTE

Thule Institute 20th Anniversary Science Seminar

Looking forward with Arctic Attitude

北海道大学側の実施責任者	国際部国際交流課 課長 清水和子
問い合わせ先	国際部国際交流課 TEL：011-706-8146 E-mail：si1[at]oia.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/2016/jp/news/notice-of-change/

第31回 ポテト杯争奪 全日本学生英語弁論大会

行事内容

開催日時	2016年11月20日（日）12:00～18:30（開場 11:30）（終了しました）
主催者	北海道大学英語研究会
会場	学術交流会館
言語：英語	対象：一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	

「ポテト杯」とは？

今年で31回目の開催となる「ポテト杯」は、北海道で開催される唯一の英語弁論の全国大会です。

日本全国から出場者を募集し、原稿審査と音声審査により選ばれた10名が、11月20日の本選で英語スピーチの日本一を競います。スピーカーは、8分間の英語スピーチを行い、審査員による質疑応答と合わせた得点で順位を決めます。

スピーチのトピックは自由で、性やアイデンティティ、SNS、エネルギー問題など、さまざまな社会問題について取り上げます。

「ポテト杯」の見所

今後の社会形成を担う学生が、多岐にわたる社会問題について自ら考え、共有し、ディスカッションで考えを深めていくことは、「持続可能な社会」を作るための重要な取り組みです。共通言語として用いられることが多い英語で発信することで、留学生を含む海外の学生とも情報共有し、同年代の学生が英語でプレゼンテーションする姿を見せることで、将来、国際的に活躍できる人材を北海道大学から輩出することを目指します。

オーディエンスにとっては、今後の英語学習や英語のプレゼンテーションについて、スピーカーに直接話を聞くことのできる機会ですので、特に英語スピーチを磨きたい高校生・大学生には大変好評頂いています。

【今年のテーマ】Chronicle ～Set the Clock Forward～

今年の大会コンセプトは、『Chronicle ～Set the Clock Forward～』です。「年代記」、「時計の針を進める」などといった意味を持つ「Choronicle（クロニクル）」という言葉に、未来に向けての行動を考えるいう意味を込めて決めました。

スケジュール

11:30 開場

12:00～12:15 開会式

12:15～13:35 スピーチ セッション１（1～5）

13:35～13:55 休憩

13:55～15:15 スピーチ セッション２（6～10）

15:15～16:15 休憩／判定時間

16:15～16:40 閉会式

16:40～18:30 交流会

大会公式Facebookページ

最新情報は、Facebookページよりご確認ください。

https://www.facebook.com/potatocup2016/

北海道大学側の実施責任者	大会実行委員長／工学部3年 山元 爽
事前申し込み	（※申し込み受付は終了しました。）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学英語研究会 大会実行委員長 山元 爽 E-mail：31st.potatocup.official[at]gmail.com （※[at]をアットマークに変えて送信ください）

実施報告

持続可能な社会の実現のために、社会問題やアイデンティティに関する問題など、様々な問題の解決法を熱心に考える学生を招き、英語プレゼンテーション大会「ポテト杯争奪英語弁論大会」を開催しました。プレゼンターである10名の出場者は、全国の大学生約60名の応募の中から音声と原稿による審査を勝ち抜き、本大会への出場を決めました。

本大会は、北海道大学の学生サークル「英語研究会」が毎年開催しており、今年で31回目となります。入賞者には、ジャガイモ10kgが贈呈されますが、特に道外の大学からの参加者には毎年、好評をいただいています。

今年は、関西大学（2名）、高崎経済大学（2名）、慶応義塾大学、立教大学、青山学院大学、京都大学、早稲田大学、北海道大学（各1名）が参加しました。優勝は早稲田大学の小島瑠莉さん、準優勝は京都大学の樋田祐一さん、第3位は高崎経済大学の本間義人さんでした。

プレゼンテーションのテーマは、障がい者に対するいじめ、リーダーの在り方、両親の離婚に悩む子供の問題、認知症の本質的問題、病気との向き合い方、ほめることの大切さ、大学生の進路の選び方など、幅広い分野の発表がありました。

参加者・観客は北海道大学の学生に留まらず、他大学の学生や卒業生など、様々な方に参加していただきました。大会後に行ったアンケートでは、特に学生の多くから「高いレベルの英語プレゼンテーションを聞くことができ、英語学習への意欲が高まった」という声や、「社会問題に関する関心が高まった」などという声をいただきました。多くの学生が刺激を受け、グローバル社会へ意見を発信することの大切さを感じたようでした。

北海道大学英語研究会では、更なるグローバル社会への関心、意欲を掻き立てるため、北大生だけではなく他大学の学生と交流を図りながら、また審査員を含む多くの社会人との交流も大切にし、これからもこのような場を提供していこうと思います。

（※それぞれの発表の様子は、YouTubeにて動画で公開しています。下記URLより閲覧可能です。）

北大生を代表して発表した工学部2年生 奥田晃崇さん

優勝した早稲田大学 小島瑠莉さん

発表者の集合写真

発表動画 [スピーチセッション1]

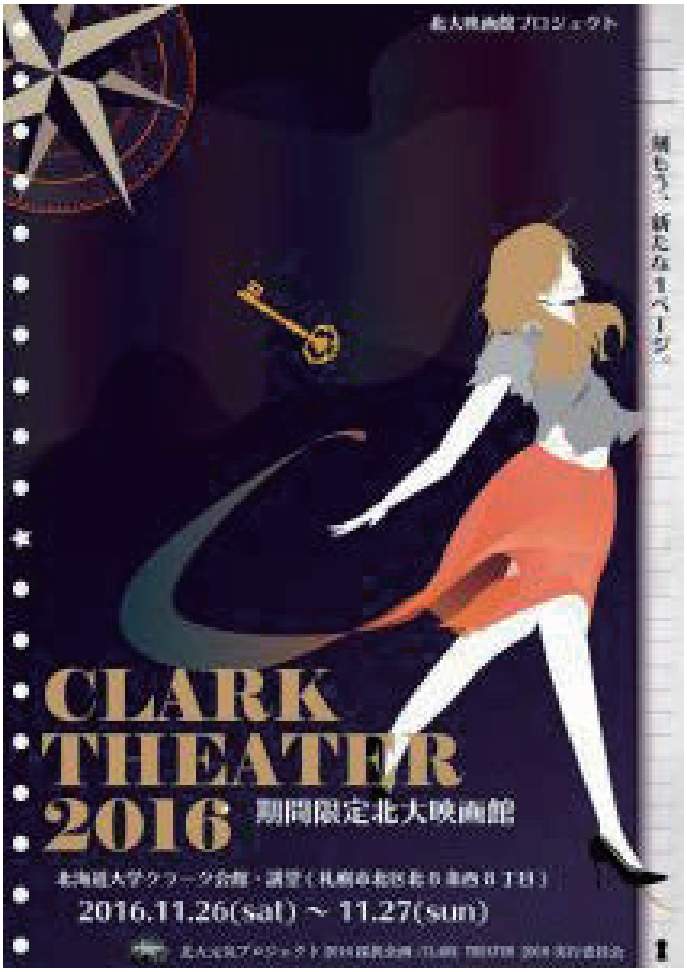
- 重岡さくら（関西大学） https://youtu.be/HYO5LKjcoas
  タイトル：“The Importance of Sitting Next to Each Other”
- 吉永立平（慶應義塾大学） https://youtu.be/btSDVQEh8SU
  タイトル：“Collective Genius”
- 小島匡人（高崎経済大学） https://youtu.be/L_eKhbOl96g
  タイトル：“Responsible Love for Life”
- 本間義人様（高崎経済大学）（第3位） https://youtu.be/kvuhkFdUAok
  タイトル：“Different Roads under the Same Sky”
- 中村瑛里佳（立教大学） https://youtu.be/DniHt7UJYOE
  タイトル：“Courage to Acknowledge”

発表動画 [スピーチセッション2]

- 安達美紗季（青山学院大学） https://youtu.be/a-IcQ8TWRxw
  タイトル：”‘Real’ Dementia”
- 樋田祐一（京都大学）（準優勝） https://youtu.be/zR2HjQt2yZc
  タイトル：“Putting Children First”
- 小島瑠莉（早稲田大学）（優勝） https://youtu.be/vkEbDa0H0As
  タイトル：“Hope for the Best, Prepare for the Worst”
- 仲居瑛美（関西大学） https://youtu.be/P1nzvIIXXMM
  タイトル：“You are great”
- 奥田晃崇（北海道大学） https://youtu.be/6BffZXMJ9fU
  タイトル：“For Whom? For What?”

CLARK THEATER（クラークシアター）2016

行事内容

開催日時	2016年11月26日（土）～11月27日（日）（終了しました）
主催者	北大映画館プロジェクト
会場	北海道大学クラーク会館（講堂）
言語：日本語・英語（同時通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	北海道大学に期間限定の映画館、CLARK THEATER（クラークシアター）を開催します。CLARK THEATERでは、“映像・映画を通じたコミュニケーションの場の創造”を目指し、様々な映画をお楽しみいただけます。 サステナビリティ・ウィークへは、2009年度から今年で7年目の参加となりました。 CLARK THEATERでは、他の映画館とは少し違った、新しい出会いがあります。お客様とお客様同士の出会いだけではなく、大学と地域の方々との出会い、親しみのない作品やジャンルとの出会いなどです。 普段見ることのない作品に出会うことでお客様が奥深い映像の世界へと興味を持っていただければこれほど嬉しいことはありません。そして、大学の中に映画館があればどのようなことが出来るのか、私たちと一緒に想像を膨らませてみてください。 

北海道大学側の実施責任者	北大映画館プロジェクト／法学部3年 土橋 一葉
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	詳細はクラークシアターのウェブサイトにてご確認ください。
問い合わせ先	北大映画館プロジェクト E-mail：info[at]clarktheater.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.clarktheater.jp/ct2016/

実施報告

北海道大学クラーク会館の講堂を使用して、学生や市民に開放した期間限定映画館「CLARK THEATER 2016」を開催しました。当イベントは2006年に始まり、今年で11周年になります。北海道大学に常設映画館を作ることを目標に、その過程の一環として年に一度「CLARK THEATER」を開催しています。北大生を中心とする学生が運営し、作品の選定から自分たちで行いました。

今年は例年よりも開催日数を減らし、一つひとつの作品選定にこだわることで、普段であればなかなか見ることのできない様々なジャンルの作品を上映しました。ジャンルは、アニメ作品からドキュメンタリー作品まで様々でしたが、幅広い年代の方に楽しんでいただけました。

2016年11月に公開された映画「溺れるナイフ」で、独特の十代の少女を描き大注目を集めている若手監督の一人、山戸結希 監督には北大まで足を運んでいただき、トークショーを行いました。来場者にはトークショーを通じて、ただ映画を見るだけではわからないような、映画製作の背景も楽しんでいただきました。

２日間を通じて、来場者には、映画作品そのものとの出会いはもちろん、そうした作品と出会える北大映画館プロジェクトがあることの魅力も伝えることができたと実感しました。
来年度以降も、多くの方に北大構内で開催する「CLARK THEATER」へ足を運んでいただき、ここでしか味わえない映画体験を提供することによって、映像作品との出会いや発見の喜びを感じていただけるよう邁進していきます。

上映前の会場の様子

沢山の方に足を運んで頂いた、当日の受付の様子

GiFT2016 ～Global Issues Forum for Tomorrow～
世界の課題解決に向けたフォーラム

行事内容

開催日時	2016年11月27日（日） 20:00～22:00 （終了しました）
主催者	北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局（国際連携機構内）
会場	インターネット上
言語：英語	対象：大学生・院生・高校生
行事概要	

GiFTとは？

「GiFT（ギフト）」とは、「Global Issues Forum for Tomorrow」の頭文字であり、世界の高校生・大学生とインターネットを通して意見を交換する約2時間のフォーラムです。

2011年に開始し、6年目を迎えるGiFT2016は、北海道大学で勉強する学生が中心となり、議題を提供する2名と、テーマに基づいてディスカッションを盛り上げる5名の学生、世界の高校生・大学生と一緒にと意見交換します。

2016年11月27日（日）、夜8時からの放送に合わせてYouTube Liveでフォーラムの様子を生配信し、北海道大学の学生が世界の視聴者とインターネット・チャットにてディスカッションします。世界各国の学生と共に、世界の課題解決について考え、熱く議論をしてみませんか。

北海道大学から世界へ未来へ
GiFT
Global Issues Forum for Tomorrow

今年のテーマ

地球温暖化の課題を解決するには、高校生・大学生には何ができるのでしょうか？今年は以下の2つのテーマに基づき、議論します。

1. How can we reduce our garbage? （ゴミはどうしたら減らせるか）

2. What kind of actions are you taking to respond to the global warming? （地球温暖化に対しどのような行動を取っているか）

フォーラムの詳細・最新情報

GiFT2016の詳細、最新情報は公式ウェブサイトおよびfacebookページにて公開しています。ディスカッションの話題を提供し、当日フォーラムを盛り上げてくれる学生の紹介や、テーマの詳細などが載っていますので是非チェックしてみてください。

＊GiFT公式ウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

＊Facebookページ：https://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u/

過去のGiFTの様子

GiFTウェブサイトおよびYouTubeにて、過去のGiFTのアーカイブ動画を公開しています。

＊GiFT公式ウェブサイト：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/01-archives/

＊YouTube：https://www.youtube.com/user/hokkaidouniv/playlists

北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ・ウィーク実行委員会実行委員長 上田 一郎（北海道大学理事・副学長）
事前申し込み	不要
参加費	無料

問い合わせ先	北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局（国際連携機構内） TEL: 011-706-8031 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp （※[at]はアットマークに変えて送信ください） Facebook： http://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

実施報告

2016年11月27日（日）、北海道大学の学生と世界の高校生・大学生が世界の課題解決についてインターネット上で意見交換を行うフォーラム「GiFT（ギフト）」を開催し、世界25ヵ国から228名が参加しました。

GiFTは、世界のどこに居てもサステナビリティ・ウィークに参加できるよう開発された、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）を駆使して提供する企画です。国際連携機構に設置したスタジオで行うパネルディスカッションの様子を日本時間の20：00～22：00に、YouTube Live（インターネット生中継）を通じて配信し、世界の若者がチャット機能を活用してパネリストと、もしくは参加者同士とで意見を交換しました。

配信スタジオには、北海道大学で学ぶ7人の留学生（中国、ヨルダン、インド、インドネシア、ネパール、フィリピン、スウェーデン）が集まり、司会役、議題紹介役、パネリスト役、そしてチャットを通じて送られてくる意見を紹介する役を交代で担いながら約2時間、2つの議題について英語で議論を進めました。パネリストと参加者は、各国や地域の状況や取り組みを紹介し合いながら、それぞれの場所で学生としてできることについてアイデアを活発に交換しました。

開催6回目を向かえたGiFTは、年に1回それも数時間開催する形態であるにも関わらず、世界各地から毎年参加するリピーターが生まれつつあります。今年の参加地域は、パネリストの出身国はもちろんのこと、アメリカ、ブラジル、カンボジア、オランダ、ナイジェリア、ロシア、イタリア、ウズベキスタンなど過去最多となる世界25ヵ国・地域となりました。番組後半では、参加者から「北海道大学で学びたい」「北海道大学最高！」というコメントが幾つも送られ、本学の留学生が学修環境の良さをアピールする場面もありました。

GiFTは、北海道大学『近未来戦略150』で掲げた「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョンを体現し、各地に住む次世代の担い手に学び合う機会を提供することにとどまらず、北海道大学の存在と価値を世界へ知らせる有効なメディアに成長しつつあるのです。

＊アーカイブ動画：http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

司会を務めた学生の様子

活発に意見交換する司会学生

生配信の様子

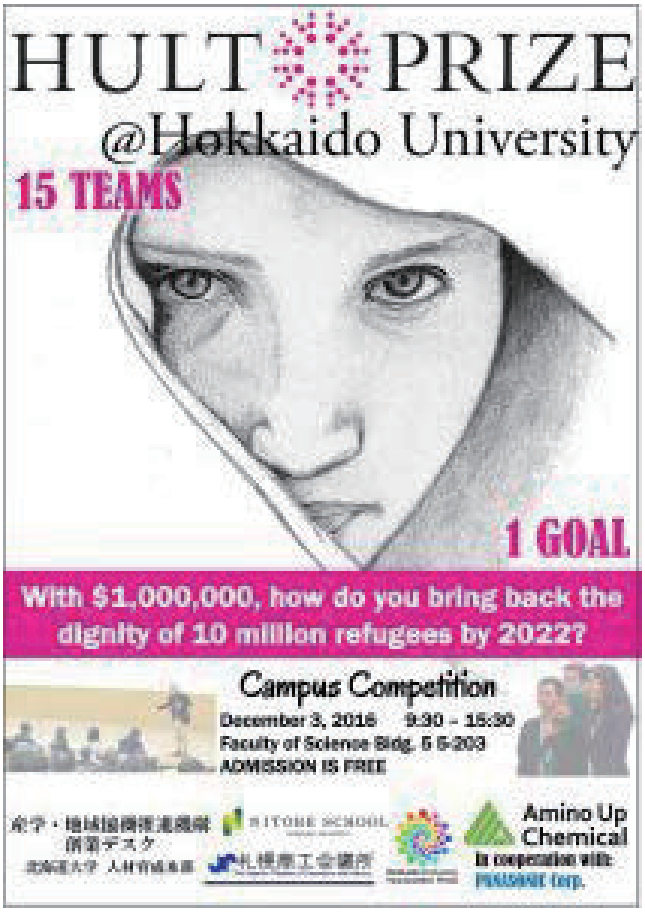
ライブチャットで世界各国から寄せられたコメントを紹介する司会学生の様子

HULT PRIZE@Hokkaido University

～学生による国際社会問題ビジネスコンペティション～

行事内容

開催日時	2016年12月3日（土）（終了しました）
主催者	HULT PRIZE委員会
会場	理学部5号館 大講堂
言語：英語（通訳無し）・日本語（一部のみ）	対象：大学生・院生
行事概要	ハルトプライズは、“HULT PRIZE”という、ビル・クリントン財団（CGI）が後援し、国際的に急速に評価を高めている ビジネス・スクールである Hult International Business School が実施している、社会起業に関する国際学生ビジネスコンペティションです。 大会では、世界中の学生がチームを組み、世界の差し迫る問題を解決するアイデアを出し合い、どれだけ社会に大きいインパクトを残せるかを競います。 具体的には、100万ドルを元手に、テーマとなる世界の問題を解決するような企業を考えます。さらに、最終的な世界決勝の勝者チームには、実際に100万ドルの資金が与えられ、考えたアイデアで起業をすることが出来ます。 本大会では、大学予選として北海道大学での学内予選を行います。



ハルトプライズの歴史

ハルトプライズは、スウェーデンの起業家バーティル・ハルトの支援とアメリカ前大統領ビルクリントンの後援によって2010年に始まりました。そして、今や150カ国以上の国から何千人もの出場者が、ハルトプライズに参加しています。

ハルトプライズ＠北海道大学大会について

大大会は、北海道大学大学院生3名からなる「2015年度実行委員会」によって2015年12月に初めて北大で開催しました。学部生、修士、博士課程の学生からなる計60名、17チームが出場し、優勝チームはボストンに勝ち進みました。

今年度は、2016年9月末に、ハルトプライズ本部（米国）の審査を通過し、北海道大学医学部3年 村上武志のもとに「2016年度ハルトプライズ実行委員会」が発足しました。

今年のテーマ

チームは、毎年ビル・クリントン元大統領が発表するテーマに沿って競います。

2017年度のテーマは、「2022年までに1000万人に及ぶ難民の人権と尊厳を取り戻せるような持続可能で拡大可能な社会企業をたてられるか？」です。

ウェブサイト

HULT PRIZE@HU 公式ウェブサイト：
http://hultprizeat.com/hokkaido

Facebook ：
https://www.facebook.com/Lets-Engage-in-HULT-1713724258859501/
Hult Prize Official HP ：
http://www.hultprize.org/

北海道大学側の実施責任者	キャンパスディレクター／北海道大学医学部医学科3年 村上 武志
事前申し込み	メールにて受付
参加費	無料
問い合わせ先	HULT PRIZE委員会 E-mail: hultprizehokkaido[at]gmail.com （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://www.hultprizeat.com/hokkaido

実施報告

HULT PRIZEは社会企業に関する国際学生ビジネスコンペティションであり、スウェーデンの起業家バーティル・ハルトの支援とアメリカ前大統領のビルクリントンの後援によって2010年から開始されたコンペティションです。今では150以上の国から何千人もの出場者がHULT PRIZEに参加しています。

本大会では、世界中の学生がチームを組んで、世界に差し迫る問題を解決するアイデアでどれだけ社会に大きいインパクトを残せるかを競います。具体的には、参加者は100万ドルを元手にしてテーマとなる世界問題を解決するようなビジネス案を考え、プレゼンを通して競い合います。今年のテーマは「2022年までに1000万人に及ぶ難民の人権と尊厳を取り戻せるような持続可能で拡大可能な社会企業を立てられるか」です。

参加者は、北海道大学の学生15チーム、56人(日本人学生22人、留学生34人)と教職員・審査員・オブザーバー12人でした。各チームのプレゼンを通して、審査員による公平な審査の結果、2017年3月にサンフランシスコかボストンで行われる地区大会に進む1チームを選抜しました。また、今回多くの学生が各専門分野の知識を持ち寄り、英語で意見交換をし、難民について深く考える機会を持てたことは、将来世界をまたにかける北大生にとって有意義な時間となりました。

今後、HULT PRIZE実行委員会は、2017年3月の地区大会に向けて、優勝チームのプレゼンの改善支援、費用に係る準備などを行っていきます。

(※大会の詳細、最新情報はFacebookページにて公開しています。URL: https://goo.gl/1peJNU)

参加者の集合写真

当日の受付の様子

優勝チーム表彰の様子

一般公開フォーラム「シティズンシップと市民運動：LGBTをとりまく日本的事情」

行事内容

開催日時	2016年12月18日（日）13:30～16:30（受付開始 13:00）（終了しました）
主催者	応用倫理研究教育センター
共催	法学研究科附属 高等法政教育研究センター
会場	学術交流会館（講堂）
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生・高校生
行事概要	性少数者の社会・公的認知の拡充方策の一つとして、市民運動を検証・展望します。 世界的な流れである「同性パートナーシップの公的認証制度（同性愛者等に、異性愛者間の婚姻制度に同等もしくは近い権利・機会を与える制度）」の波は日本にも押し寄せ、札幌市でも要望書が市民団体によって提出されました。 今後、性少数者が市民権を享受するためには、行政や性多数者の理解を得るための様々な活動を有意義に行わなければなりません。市民運動はその一つです。しかし、問題をはらんでいないわけでもありません。 本フォーラムでは、社会学者、法学者、LGBTアクティヴィストなどの登壇者を用意し、市民運動の限界と可能性について考えます。

登壇者

講演者

野宮 大志郎（中央大学文学部教授）

社会学・市民運動。グローバルに、国境を越えて展開する反戦平和運動、人権環境運動、援助活動、ボランティア活動など、市民活動の研究をしている。

尾崎 一郎（北海道大学法学研究科教授）

法社会学。本学教員として、ジェンダー・セクシュアリティ関連研究教育で文学研究科応用倫理研究教育センターに協力している。

鈴木 賢（明治大学法学部教授・北海道大学名誉教授）

札幌でLGBTの当事者運動に長年従事。中国法、台湾法専攻。近時は台湾の同性婚運動をテーマのひとつにしている。

司会

瀬名波 栄潤（北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター員）

北海道大学側の実施責任者	文学研究科 教授 瀬名波栄潤
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	応用倫理研究教育センター TEL：011-706-4088 E-mail：caep[at]let.hokudai.ac.jp （※[at]をアットマークに変えて送信ください）
URL	http://ethics.let.hokudai.ac.jp/event/index.html#forum16

実施報告

本フォーラムでは、性的少数者（LGBT）の社会・公的認知の拡充方策の一つとして、「シティズンシップ」と「市民運動」を検証・展望しました。

2015年はLGBTムーブメント飛躍の年でした。まず、5月、カトリック教徒の多いアイルランドで、同性婚の法制化が国民投票で決まりました。翌月、アメリカ合衆国連邦最高裁は、同性婚は「法の平等な保護」を定めた合衆国憲法の下の権利であるとして、同性婚を禁止する州法を違憲と判断、同性婚は合法となりました。特筆すべきは、（2014年末の国際オリンピック委員会での決議を受け）、2015年8月にオリンピック憲章根本原則6条に「性的指向」への差別撤廃が盛り込まれたことでした。

また、日本には、海外では10年以上も前に巻き起こっていた「同性パートナーシップの公的認証制度（同性愛者等に、異性愛者間の婚姻制度に同等もしくは近い権利・機会を与える制度）」制定の波が、押し寄せました。昨年来、渋谷区、世田谷区、宝塚市、那覇市、伊賀市などが制度の検討を終えて、すでに導入しています。民間企業も新しいサービスを模索し始めています。そして、教育行政も新たな局面を迎え、文部科学省は性的少数者へ配慮を求める通知を全国の小中高校へ送るなどしています。

今年6月6日、ドメスティック・パートナー札幌が「同性カップルを含む『同性パートナーシップの公的認証』に関する要望書」を秋元克広市長に提出しました。市長は要綱による制度創設を検討することを明らかにしました。が、今後、性的少数者が「シティズンシップ」を享受するには、行政や性多数者の理解を得るための様々な活動や「市民運動」を有意義に行わなければなりません。しかしながら、表現の自由を許容する現代社会にあって、それを制限する流れがあるのも事実です。

本フォーラムでは、LGBTをとりまく日本の諸状況を踏まえ、「シティズンシップ」と「市民運動」の可能性と課題について、3名の講師の発表とともに、来場者を交えて考え、多様な意見を交換しました。新田孝彦理事と山本文彦文学研究科長にも、それぞれ開会式と閉会式でご挨拶いただきました。最後には、本フォーラムが持続可能な「私たちの街づくり」を探る新たな一歩となることを確認しました。来場者は約80名程度でしたが、当日は北海道新聞、読売新聞、共同通信から取材を受け記事を掲載してもらいました。本フォーラムの情報発信価値は高かったと自負しています。

フォーラムの様子

講演者・関係者の集合写真

３．サステナビリティ・ウィーク 10 周年記念
国際シンポジウムのウェブサイト

サステナビリティ・ウィーク10周年記念
国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGS）に貢献する高等教育のあり方～

実施記録

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
2017年3月

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク2016
Hokkaido University Sustainability Weeks 2016

Hokkaido University

サステナビリティ・ウィーク 10 周年記念

国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

2016 年 10 月 29 日土 30 日日

開会あいさつ

北海道大学サステナビリティ・ウィークの10周年を記念する国際シンポジウムの開催にあたり、ご協力ならびに参加いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

持続可能な社会は、多様な価値観に基づく物事への多角的なアプローチによってこそ実現すると私は信じています。実際、サステナビリティ・ウィークには毎年、「持続可能な社会の実現」という共通の目的を掲げる多彩な企画が自然と集い、そのバラエティさが最大の特徴であり魅力となっています。

今回の10周年記念シンポジウムも、サステナビリティ・ウィークの縮小版になっており、「SDGsに貢献する高等教育のあり方」という共通テーマの下で、学内外の様々な組織が多彩な分科会を提供してくれます。

さて今年1月、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」が発効されました。世界が「持続可能な開発のための2030アジェンダ」という新しい認識に基づいて、2023年までに17個の目標を達成しようと挑戦を開始したのです。サステナビリティ・ウィークの節目のタイミングと一致したわけですが、私には予期せぬ「必然」であるように思えます。

北海道大学もまた、新たな挑戦を開始しようと、サステナビリティ・ウィーク10周年を目前にした平成28年4月、北海道大学の総長は、「サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム」を設置しました。そして、持続可能な社会の実現に貢献する教育と研究に力を入れてきた北海道大学が、その歩みをいっそう強固にするためには、教育において新たにどのような行動を取るべきか将来構想を考えるよう、指示したのです。

本シンポジウムの1日目の最後に、同プロジェクトチームから将来構想の素案が提示され、参加者全員で議論します。その議論が多角的に行われるよう、議論に先立つ2つの基調講演を通じて、世界の先進的な取り組みを学びます。

全体会の前後には、「北極域」、「図書館」、「持続可能な発展のための教育」や「学生目線」、「文化遺産」、「和解」といった特定のテーマごとに分科会を開催して議論や体験を深めます。最後の全体会では、教育と学修の現場のニーズに耳を傾けつつ、SDGs時代に相応しい大学のあり方について、まとめの議論を行います。

参加者の皆様には、北海道大学が10年間の歩みを振り返り将来を展望する機会を活用いただき、SDGsを掲げる新たな時代に必要な、新たな価値観に基づく新たな行動とはどのようなものかを発見するきっかけとなれば光栄です。

本シンポジウムの参加者が、何かしらの実りを携えてそれぞれの現場へ戻ることができるよう祈っております。

北海道大学　理事・副学長
国際連携機構長
サステナビリティ・ウィーク2016実行委員長
上田一郎

趣旨説明

サステナビリティ・ウィーク10周年記念国際シンポジウム
〜SDGsへ貢献する高等教育のあり方〜

2015年9月の「国連持続可能な開発サミット」において「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。このアジェンダは、17の目標で構成される「持続可能な開発目標（SDGs）」を掲げ、地球規模で2030年までの達成を目指す。

このような新たな時代にあって、教育、学修、研究、開発の中核を成す高等教育界や各大学には、積極的な貢献が求められている。それには、新たな価値観に基づく新たな行動が不可欠であると、多くの人が賛同するであろう。

では、新たな価値観とはどのようなものであろうか。たとえそれが理論化されていないとしても、その存在や発生を暗示する現象や活動にはどのようなものがあるだろうか。あわせて、新たな行動を生み出すにはどのような環境を整えればよいだろうか。大学を形成する教職員や研究者、学生そして地域の市民は、何があれば（もしくは無ければ）新たな行動をひらめき、動機付けられ、一歩を踏み出し、継続することができるのであろうか。

教育や学修の現場のニーズに耳を傾けつつ、SDGs時代に相応しい大学のあり方について、参加者とともに議論する。

各全体会・分科会のタイムスケジュール

１０月２９日（土）

10:30 ～ 13:45　分科会１

10:30～12:30　総合博物館ツアー（１回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」
北極域研究センター

11:00～12:30　市民セミナー＆図書館ツアー

「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」
付属図書館

11:30～13:30　総合博物館ツアー（２回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」
北極域研究センター

12:30～14:00　HESDフォーラム総会（クローズド会議）

14:00 ～ 17:30　全体会１

14:00～14:10　開催あいさつ

・北海道大学理事・副学長　上田一郎

・文部科学省　国際統括官付 国際統括官補佐　鈴木規子

14:10～14:30　開催趣旨 ～サステナビリティ・ウィーク１０年の歩み～

北海道大学理事・副学長　上田一郎

14:30～15:15　招待講演１　「SDGs 達成のための高等教育の役割」

AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事　キンバリー・D・スミス

15:15～16:00　招待講演２

「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の”方向性の知”に基づいて～」

フェリス女学院大学 准教授　高雄綾子

16:00～16:20　休憩

16:20～17:30　特別講演 「北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像」

・座長：北海道大学 大学院教育学研究院長　小内透

・発表者：北海道大学副学長　山下正兼

・指定討論者：ソウル大学校 師範大学長　Chan-Jong Kim

・指定討論者：東京大学 大学院教育学研究科 准教授　北村友人

・指定討論者：駐日スウェーデン大使館 科学・イノベーション部
Mats Engström

・指定討論者：駐日ノルウェー王国大使館 通商技術部・シニアアドバイザー　松本宏

17:30～18:30　交流会

１０月３０日（日）

9:00　開場・受付開始

9:30 ～ 12:30　分科会　2

9:30～12:00　講演１ 「HESDフォーラム：事例報告」

HESDフォーラム

9:55～12:00　講演２ 「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」

北海道大学ヘルシンキオフィス

・講演者１：駐日ノルウェー王国大使館　通商技術部・シニアアドバイザー　松本宏

・講演者２：駐日スウェーデン大使館　科学・イノベーション部
Mats Engström

・講演者３：駐日エストニア共和国大使館 Counsellor Argo Kangro

10:30～12:30　総合博物館ツアー（３回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」
北極域研究センター

12:15 ～ 14:30　分科会　3

12:15～13:45　学生ワークショップ１「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

12:30～14:30　総合博物館ツアー（４回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」
北極域研究センター

12:15～13:45　対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

HESDフォーラム

・講演者１：立教大学社会学部教授・ESD研究所長　阿部治

・講演者２：金沢大学国際基幹教育院教授　環境保全センター長
鈴木 克徳

・司会　　：徳島大学大学院理工学研究部　三好徳和

14:00 ～ 16:00　分科会　4

14:00～16:00　学生ワークショップ２

「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」
環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

14:00～16:00　総合博物館ツアー（５回目）

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」
北極域研究センター

14:00～16:00　講演１

「コンフリクトを超える知を生み出す学び－分断社会における和解の可能性を探る－」　教育学研究院

・講演者１：フェリス女学院大学　高雄綾子

・講演者２：南山大学　佐々木陽子

・講演者３：NPOこえとことばとこころの部屋　上田假奈代

・指定討論者：北海道大学教育学研究院　准教授　石岡丈昇

・司会：北海道大学教育学研究院　教授　宮崎隆志

14:00～16:00　　講演２

「文化遺産とSDGs－失われた好機？－」　応用倫理研究教育センター

・講演者：UNESCO「文化財と平和」寄付講座
教授　ピーター・ストーン

16:15 ～ 17:00　全体会２

16:15～17:00　総括ディスカッション「SDGsに貢献する高等教育のあり方」

・座長：北海道大学副学長　山下正兼

・各分科会からの報告

分科会１：市民セミナー&図書館ツアー

「市民セミナー＆図書館ツアー『聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館』」

開催報告

報告者：北海道大学附属図書館利用支援課　調査支援担当　長嶋 岳生

前半は講師の国連広報センターの千葉潔氏から、国連広報センターの概要、国連の現状、国連の広報活動の実際、国連寄託図書館の趣旨などの講話がありました。国連は現在、著名人の起用等による親しみやすい動画を用いた広報活動に力を入れており、これらの動画の紹介も複数あり、国連の取り組みについて映像と音楽で楽しめる内容でした。

後半は附属図書館スタッフによる千葉氏のお話を踏まえての図書館ツアーでした。国連などの国際機関の資料を集めた国際資料コーナーや、札幌農学校2期生であり国際連盟事務次長としても活躍した新渡戸稲造にゆかりの資料展示、地下の自動化書庫等の見学を行いました。新渡戸稲造の資料展示では、図書館の資料だけではなく、大学文書館の協力により、新渡戸稲造が国際連盟の便箋を使った書簡のレプリカも展示しました。

参加者は本学の学生1名と一般市民37名でした。市民の中には高校生や親子連れの方も多く含まれていました。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連のことをたくさん聞ける機会はなかなかないので、とても良い講演で、自分にとってとても興味がわく内容でした。」といった声が寄せられました。図書館ツアーの後、高校生をはじめとする参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。

附属図書館（国連寄託図書館）では、今後も国連の資料の収集・提供に加えて、国連のアウトリーチ活動に寄与するような講演会やセミナーなどを実施する予定です。

千葉氏によるセミナーの様子

図書館ツアーの様子

セッションの目的および概要

北海道大学附属図書館は国連寄託図書館に指定されています。国連についてのレクチャーと図書館（本館）のツアーによって、国連の現状と国連寄託図書館の趣旨を知る市民向けセミナーです。まずは、国連広報センターの千葉潔氏から、国連とその活動、そして、国連を知るうえで役に立つ資料などについてお話いただきます。続いて、附属図書館のスタッフの案内で千葉氏のお話に関連した箇所を中心とした図書館ツアーを行います。国連の活動全般を知り、北大図書館でより深く学ぶきっかけとなる企画です。

セッションのタイムスケジュール

11:00 ～ 12:10　国連についてのレクチャー
（講師：国連広報センター　千葉　潔）

12:10 ～ 12:30　図書館ツアー
（担当：附属図書館スタッフ）

セミナー講演者

千葉　潔
国連広報センター　知識管理担当官

要旨

・国連と、国連の活動について
・国連を知るうえで、役に立つ資料
・国連寄託図書館の意義

略歴

現在、国連広報センターの知識管理担当官。公式文書邦訳、ウェブ運営など。1989年勤務開始。広報/メディア、ライブラリー担当を経て、現在に至る。国連学会会員。

主催

北海道大学附属図書館（国連寄託図書館）

共催

国連広報センター

後援

独立行政法人国際協力機構北海道国際センター (JICA北海道)、公益財団法人札幌国際プラザ、札幌市総務局国際部交流課、北海道総合政策部知事室国際課、日本国際連合協会北海道本部

総合博物館ツアー

「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」

開催報告

報告者：北海道大学大学研究力強化推進本部URA ステーション　URA　小俣 友輝

2016年7月にリニューアルオープンした北大総合博物館に、北極域研究センター展示「いま最も『クール』な研究」が新設されました。そこには北極域の人々の暮らし、陸や海・大気、グリーンランドの氷河に関する北大の研究、および中谷宇吉郎教授の研究について、解説パネルと展示物が設置されています。

総合博物館ツアー「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」は、地球環境変動の影響を顕著に受ける北極域の課題や研究成果を通じて「北極域や持続可能な開発目標と自分との関わり」や「持続可能な開発目標に対する高等教育機関の役割」について来場者とともに考えることを目的として実施しました。

本企画の対象者は本シンポジウム」参加者や、サステナビリティ・ウィークのウェブサイトを通じて企画を知る国内外の幅広い層および博物館を訪問中の北極域に興味のある参加者でした。北極域を研究分野とする本学大学院生が、北極域の概要、それぞれの研究活動、持続可能な開発目標についてツアーの中で解説し、参加者へアンケートを実施しました。

アンケート回答者は海外の方5名を含む学生、市民、企業関係者、教育関係者／研究者等の32名でした。北極域に関しては97%以上が、持続可能な開発目標に関しては85%が「少し以上は関係ある」と回答しました。ときに質疑応答を交えつつ、北極域や地球規模で生じている様々な課題を、より自分たちに関係のある出来事と感じていただけたようです。

ガイドを務めた学生は、性別、年齢、国籍の異なる多様な参加者に対して、フィールドで使用する器具を実際に手に取って見せるなど工夫を凝らし、一般的にあまり馴染みのない課題の共有に熱心に取り組みました。

参加者からは「博物館の展示において、インタラクティブなガイドツアーは新鮮」などの声が聞かれました。本学の多様なアクティビティをより広く深く共有するための手段として、博物館展示を利用した専門家によるツアーは非常に効果的との印象を持ちました。

今後国際連携機構、総合博物館とも継続的に連携し、互いに関係を発展させていきたいと思います。

展示について説明する北大生とツアー参加者の様子

熱心に説明を聴くツアー参加者の様子

セッションの目的および概要

この夏、北大総合博物館に新しく北極域研究センターの展示が設置されました。ここでは北大北極域研究者の様々な研究アクティビティを紹介されています。地球で最も変動の大きい環境、生態系、人々の暮らしや文化を知り「持続可能な開発」とは何か、私たちとどういう関係あるのか、そして何ができるかを一緒に考えてみましょう！

展示室では、人々の暮らし（北方の技術、政治・経済）、生態系（陸上・海棲動物、鳥類）、陸の環境（シベリアとアラスカの環境と人との関係）、海と大気（海氷と生態系の変化、モデリング、衛星観測）、雪と氷（グリーンランドの氷河、北大の北極研究）、中谷宇吉郎教授の研究を紹介しています。

ホッキョクグマの剥製（本物）もあります！

セッションのタイムスケジュール

ツアー１回目　10/29（土）10:30〜12:30
ツアー２回目　10/29（土）11:30〜13:30
ツアー３回目　10/30（日）10:30〜12:30
ツアー４回目　10/30（日）12:30〜14:30
ツアー５回目　10/30（日）14:00〜16:00

集合場所と集合時間

北海道大学 学術交流会館の入り口にツアー看板が立っていますので、ツアー開始の10分前にお集まりください。解散場所は、集合場所と同じです。総合博物館に集合ではありませんので、お気をつけください。

主催

北海道大学北極域研究センター

開催報告

報告者：北海道大学国際連携機構　副機構長　川野辺 創（全体会司会）

基調講演によって、持続可能性を追求する国連のイニシアチブが概説された。同時に、アメリカとドイツにおいて高等教育機関や研究者が関与して行われた社会教育や市民教育の事例、その課題、そして地域社会との協働による教育の発展可能性について、国連のイニシアチブと関連づけて論じられた。特別講演では、北海道大学総長へ提言される予定のサステイナビリティ教育の推進方策案について、国連「持続可能な開発目標（SDGs）」とどのように関連させるのかといった具体的な方策も含めて示された。その後、指定討論者によって当概 方策の特徴や課題、改善案が論じられた。

基調講演の質疑応答の様子

開催趣旨を述べる上田一郎 理事・副学長

セッションのタイムスケジュール

14:00〜14:10　開催あいさつ
北海道大学理事・副学長　上田一郎
文部科学省　国際統括官付 国際統括官補佐　鈴木規子

14:10〜14:30　開催趣旨
〜サステナビリティ・ウィーク１０年の歩み〜
北海道大学理事・副学長　上田一郎

14:30 〜 15:15　招待講演１
「SDGs達成のための高等教育の役割」
AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事　キンバリー・D・スミス

15:15 〜 16:00　招待講演２
「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは〜チェルノブイリ後のドイツにおける市民の”方向性の知”に基づいて〜」
フェリス女学院大学 准教授　高雄綾子

16:00 〜 16:20　休憩

16:20 〜 17:30　特別講演
北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像
北海道大学副学長　山下正兼

全体会１：開催趣旨 サステナビリティ・ウィーク１０年の歩み

開催趣旨： サステナビリティ・ウィーク１０年の歩み

上田一郎
北海道大学理事・副学長
国際連携機構長
サステナビリティ・ウィーク2016実行委員長

HOKKAIDO UNIVERSITY

Contributions to SD to Date & Future

-- Focusing on Education--

Ichiro Uyeda
Executive & vice-president
Executive Director, Institute for Int'l Collaboration
Chair, Executive Committee of Sustainable Weeks
Hokkaido Univ.

Nov 29, 2016

1

Outline

1. **Purpose of the Symposium**
2. **Footprint of HU's Contribution**
3. **Harvested Fruits**
4. **Future Perspective**

HOKKAIDO UNIVERSITY

---

1. Purpose of the Symposium
(1) UN's Campaigns

2000 2005 2015 2016 2030

2000-2015 Millennium Development Goals

2005-2014 UN Decade of ESD

2016-2030

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

HOKKAIDO UNIVERSITY

---

1. Purpose of the Symposium
(2) SDGs & Universities

HEIs are expected to take on new actions grounded in a new set of values in the new era of SDGs.

✓ *What should be this "new set of values"?*

✓ *What type of environment should be prepared in order to foster new actions for education and learning?*

HOKKAIDO UNIVERSITY

---

1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs

HOKKAIDO UNIVERSITY

5

1-1. Policy
(1) Hokkaido Univ. Initiative on SD

2005 2009

An 5-year initiative to encourage the Hokkaido Univ.'s community to engage in international education & research for realizing a sustainable society

HOKKAIDO UNIVERSITY

6

1-1. Policy
(2) Sapporo Sustainability Declaration (SSD)

2008 — Present

G8 Univ. Summit

- The world's 1st Univ. Summit was held in Sapporo.
- 34 leading universities in the world signed the SSD.

*“ **Universities will** serve as driving forces behind the development of a sustainable society ”*

HOKKAIDO UNIVERSITY

7

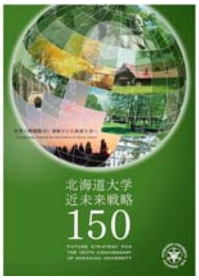
1-1. Policy
(3)Global Action Programme on ESD

On UNESCO's website

HOKKAIDO UNIVERSITY

8

1-1. Policy
(4) Future Strategy for the 150th Anniversary



2014 — 2026

12-year Univ. Reform Strategy

“ To Become the Univ. that Contributes to the Resolution of Global Issues ”

HOKKAIDO UNIVERSITY

9

1-1. Policy
(5) Strategy for Sustainability Education

President's Project for SD in Hokkaido Univ. Education

- ✓ *To Scale-up* **推進方策**
- ✓ *To Build networks* **ネットワーク構築**
- ✓ *To Enhance visibility* **広報**

HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs

HOKKAIDO UNIVERSITY

11

1-2. Organization
(2) Office of Sustainable Campus

2008 — Present

A core organization tasked with promoting campus sustainability to fulfill the SSD.

Hokkaido University 2015-2016 Member
ISCN
International Sustainable Campus Network
The global forum for sustainability in operations, research, and teaching on campus.

stars
Hokkaido University *STARS REPORT* 2012

Environmental Reports 2016

HOKKAIDO UNIVERSITY

12

1-2. Organization
(1) Center for Sustainability Science

CENSUS

2008 — 2015

Diploma programs for grad. students to cultivate a comprehensive view on sustainable issues & solutions.

Graduates

- Hokkaido Univ. Inter-department Graduate Study in Sustainability (HUIGS Program):
- Special coordinated training program for Sustainability Leaders & Sustainability 'Meisters' (StraSS Program):

HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs

HOKKAIDO UNIVERSITY

14

1-3. Activities
(1) Sustainability Weeks

2007 — Present

A period of intensive discussion to pave the way for a sustainable society

- The cumulative number of
  - Programs: 331
  - Participants: >175,000 (as of year 2016)

HOKKAIDO UNIVERSITY

15

1-3. Activities
(2) Sustainability Research Poster Contest

2009 — 2013

To encourage students to review their research from a viewpoint of its contribution toward the realization of a sustainable society

- 100 presenters/year from various academic filed.
- Presenters from HU and partner universities.
- Presentations are evaluated by peers and researchers those who have different expertise.

HOKKAIDO UNIVERSITY

1-3. Activities
(3) Global Issues Forum for Tomorrow

2010 — Present

GiFT

Two-hour live internet forum for high school and college students all over the world to address global issues.

GiFT2016
November 27, 2016
8:00 p.m.-10:00 p.m. (GMT+9).
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

HOKKAIDO UNIVERSITY

1-3. Activities
(4) ProSPER.Net

2008 — Present

ProSPER.Net

An alliance of leading universities in the Asia-Pacific region that are committed to integrating SD into grad. curricula.

Launching Ceremony @ HU in 2008

HOKKAIDO UNIVERSITY

1. Footprint of HU's Contribution

1-1. Univ. Policy

1-2. Organizations

1-3. Major Activities

1-4. Collaborative Education Programs

1-4. Educational Program (1) ESD Campus Asia

2010 Present

1-4. Educational Program (2) PARE Program

2011 Present

To train global leaders to change the negative PARE chain into a positive one

PARE

Populations-
Activities-
Resources-
Environments
Chain

- Chulalongkorn Univ
- Kasetsart Univ
- Thammasat Univ

- Bogor Agricultural Univ
- Institut Teknologi Bandung
- Universitas Gadjah Mada

1-4. Educational Program (3) Hokkaido Summer Institute

Lapland Univ. Helsinki Univ. Aarhus Univ. Karolina Institute Russian Academy of Sciences Stanford Univ. , The Univ. of Edinburgh, Cardiff Univ. Univ. of Groningen, Univ. of Amsterdam Technical Univ. Munich Univ. of Padua , Univ. of Pisa Strasbourg Univ. Univ. of Barcelona Univ. of Zambia UCLA, Univ. of Wisconsin , Univ. of Washington Univ. of Alaska Fairbanks Univ. of Montreal , Univ. of Alberta) KAIST, Seoul Women's Univ. Nanjing Univ. The Australian National Univ. , Univ. of Technology, Sydney Singapore Management Univ. , Univ. of Singapore Univ. of Peradeniya and more

- HSI2016
  - 71 courses
  - 107 Students &
  - 103 Researchers from overseas

1-4. Educational Program (4) New Graduate Schools

Graduate School of

- ✓ Global Infectious Disease
  x Univ. College, Dublin
- ✓ Global Food Resources
  x Univ. of California, Davis
- ✓ Medical Science and Engineering
  x Stanford Univ.

2. Harvested fruits for a decade

As a result of responding to global calls, Hokkaido Univ. could

- ✓ *increase awareness among faculty members & students of SD*
- ✓ *start inter-disciplinary education programs for SD*
- ✓ *start internationally-collaborative education programs for SD*

3. Future Perspective
(1) Sustainability Weeks 2.0

Hokkaido University Sustainability Weeks

+

Hokkaido Summer Institute

From Summer 2017

Off-curricula discussion opportunities
with students & researchers gathering from the world to
contribute to the resolution of global issues

HOKKAIDO UNIVERSITY

3. Future Perspective
(2) SDGs & Universities

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

To contribute to the SDGs, we'd like to find through this symposium:

- ✓ *What should be "new set of values" for education and learning?*
- ✓ *What type of environment should be prepared in order to foster new actions for education and learning?*

HOKKAIDO UNIVERSITY

26

Thank you for your attention

10th ANNIVERSARY

HOKKAIDO UNIVERSITY

招待講演 1 : SDGs達成のための高等教育の役割

キンバリー・D・スミス
AASHE（米国の高等教育における「持続可能な発展」に向けた活動を促進する非営利団体）理事
大ポートランドRCEコーディネータ
ポートランド・コミュニティ・カレッジ シルバニア・キャンパス社会学講師

要旨

持続可能性を追求する取り組みは、世界中で拡大し続けています。しかし持続可能な未来を実現するには、より広範なイニシアチブによる連携と、支援活動の拡大により、全体的な影響力を高めていく必要があります。

今回のプレゼンテーションでは、国連の2030アジェンダと 持続可能な開発目標（SDGs ）、持続可能性教育に関するユネスコのグローバル・アクション・プログラムといった、国内外の主導的イニシアチブを概説します。具体的なプログラム、ネットワーク、アウトリーチ活動および評価ツール等を通して、高等教育機関がどのように関与し、その影響力を高めることができるかを、実際の事例から探っていきます。その成果から、こうした新たなイニシアチブがどのように実施され、評価されてきたを明らかにした上で、持続可能な未来をさらに推進していくために、高等教育機関がその内部で、あるいは互いに協力して、またその枠組みを超えて、教育訓練を推進し、社会の認識を高めていく方法を提言します。

略歴

キム・スミス博士はインディアナ大学で環境社会学と社会運動を専攻し2000年に 社会学の博士号を取得。1996年よりポートランド・コミュニティ・カレッ ジ（PCC ）で社会学を教える。また国連大学でESD地域拠点（RCE）に認定されている大ポートランド持続可能性教育ネットワーク(GPSEN)のコーディネータを務める。 その一方でPCCの サービスラーニングコーディネーター、ティーチングラーニングセンターコーディネーター、PCCサマーサスティナビリティインスティテュートの研修コーディネーターを務め、ポートランドの多くのNPOと 密接に協力している。また2012年国連地球サミットリオ＋20に、高等教育機関サステナビリティ推進協会(Association for the Advancement of Sustainability in Higher E ducation) (AASHE)代表として出席。現在AASHEの理事を務める。ESDの国連パー トナーシップ国際フェロー。2014年ユネスコESD世界大会で米国派遣団のリーダーを務める。教育と市民参加による持続可能な未来の推進に希望を与える取り組みに力を入れている。

The Role of Higher Education in Achieving the Sustainable Development Goals

INTERNATIONAL SYMPOSIUM COMMEMORATING THE 10TH ANNIVERSARY OF THE SUSTAINABILITY WEEKS

HOKKAIDO UNIVERSITY

OCTOBER 29, 2016

DR. KIM SMITH

1

Four Inspiring Philosophies

- The Frontier Spirit
- Global Perspectives
- All-round Education
- Practical Learning

HOKKAIDO UNIVERSITY

2

3

THE WORLD WE WANT

4

Where is Portland, Oregon?

5

6

7

Agenda 2030

SDG 4.7: Education for Sustainable Development (ESD)

Goal 4 - Ensure inclusive and equitable quality education and promote life-long learning opportunities for all.

4.7 - By 2030, ensure all learners acquire knowledge and skills needed to promote sustainable development, including among others through education for sustainable development and sustainable lifestyles, human rights, gender equality, promotion of a culture of peace and non-violence, global citizenship, and appreciation of cultural diversity and of culture's contribution to sustainable development.

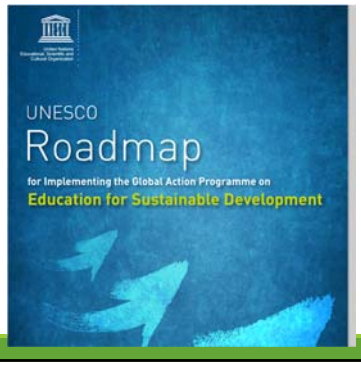
9

Ahmedabad Plan of Action (2016)

We acknowledge the **responsibility** that higher education and TVET institutions bear in the pursuit of Agenda 2030 and the sustainable development goals. Through **teaching, research,** and **civic engagement**, we can examine the existing cultures and structures of higher education and society, address **competencies**, utilize diverse pedagogical **strategies**, and contribute to the **transformation** of societies as co-creators of a sustainable future.

Higher education can serve as an engine of change and implementation for all 17 SDGs.

10



11

UNESCO's Global Action Programme on ESD Priority Action Areas

1. Advancing policy
2. Transforming learning and training environments
3. Building capacities of educators and trainers
4. Empowering and mobilizing youth
5. Accelerating sustainable solutions at the local level

12

Advancing Policy: Missions and Strategic Plans

www.pcc.edu/sustain

13

Association for the Advancement of Sustainability in Higher Education (AASHE)

14

AASHE Campus Sustainability Hub

https://hub.aashe.org/

15

Transforming Learning and Training Environments

- Operations
- Green Construction
- Energy Consumption
- Purchasing
- Waste Reduction
- Transportation
- Learning Gardens
- Hiring Practices
- Accreditation

16

Building Capacity of Educators and Trainers

- Professional Development
- Conferences
- Sustainability Curriculum Trainings
- Multi-Sector Partnerships
- Research Opportunities
- Resource Clearinghouses

17

Building Capacity of Educators and Trainers

- Green Outcomes
- Sustainability-Related Courses
- Sustainability Degrees and Focus Awards
- Applied Learning Opportunities
- Green Initiative Funds

18

Research and Social Change: Should Professors Profess?

Marc Edwards,
Professor of Civil Engineering, Virginia Tech U
Researched Lead Pipes in Flint, Michigan

Marcia Chatelain
Professor of History, Georgetown University
#FergusonSyllabus

19

Empowering and Mobilizing Youth

- Living Labs
- Course-Based Assignments
- Career and Leadership Development
- Internships
- Portfolios

20

Empowering and Mobilizing Youth

- College and Youth Networks
- Virtual Youth Conference
- Train-the-Trainer Workshops
- Service-Learning
- Sustainability Focus Awards

21

Accelerating Sustainable Solutions at the Local Level

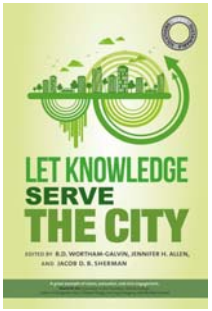
Community-Based Learning
Civic Engagement
Community Partnerships

22

A New Book!

Research on sustainable solutions,
community collaboration,
and civic engagement.

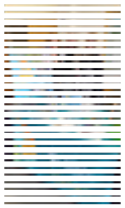
Portland State UNIVERSITY



23

Outreach & Impact

How do we tell our stories?
How do we increase our collective impact?



24

Sulitest.org
The sustainability literacy test

- ✓ On-line Multi-Choice Qs
- ✓ 30 international questions
- ✓ 20 local questions
- ✓ Covers full scope of sustainable development

25

United Nations University
Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

26

education equity environment economy GPSEN

GREATER PORTLAND SUSTAINABILITY EDUCATION NETWORK
A Regional Centre of Expertise on Education for Sustainable Development

Educate ~ Empower ~ Engage

www.gpsen.org

28

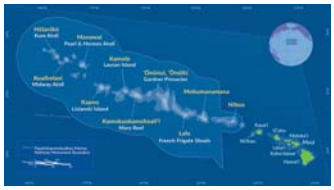
What does it mean to be a global citizen?

Commodore Matthew C. Perry

29

International Friendships

Kyoto University Sustainability Symposium



Papahānaumokuākea Marine National Monument

30

We're all in
this together.

Let's increase our handprints!

31

Arigatou gozaimasu! Thank you!

Comments? Questions? Ideas?

Dr. Kim Smith
kdsmith@pcc.edu

32

招待講演２: リスク社会における不確実性を生きるための知識とは
～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の"方向性の知"に基づいて～

高雄綾子
フェリス女学院大学　准教授

要旨

現代のリスク社会では、先の見えない不確実性が増している。持続可能な発展を目指すためには、この不確実性に向き合い、次の行動に踏み出すための知識である「方向性の知」を獲得する学びが、コミュニティレベルで展開される必要がある。

ここでは､リスク社会論の嚆矢となったチェルノブイリ原発事故後のドイツにおいて､市民が不確実性に対処するために展開した学びと実践に焦点を当て､この知識獲得プロセスについて検討する。

略歴

日本大学文理学部独文学科卒業、東京都立大学大学院都市科学研究所修了、東京大学大学院教育学研究科修了、フェリス女学院大学国際交流学部准教授。主要業績「ドイツ・脱原発への市民の学習リスク認識から地域再生へ」『地域学習の創造』（共著、東京大学出版会、2015年）

1

リスク社会における不確実性を生きるための知識とは

ー　チェルノブイリ後のドイツにおける市民の"方向性の知"に基づいて　ー

SW10周年記念 国際シンポジウム

～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

2016年10月29日(土)　北海道大学

フェリス女学院大学国際交流学部　高雄綾子

2

グローバルな統合EUの不確実性とリスク

- EU官僚の主導する運営や規制への反発
- 移民・難民と主権・国境管理・失業問題
- 産業間・地域間と世代間の格差・相違

解決のための意思決定機関が遠くなることで、社会を秩序立てていた骨組みがもろくなる

我々は「自己生成していく不確実な条件下で、未来を決定しなければならない世界」に生きている (Beck 2007, 26)

3

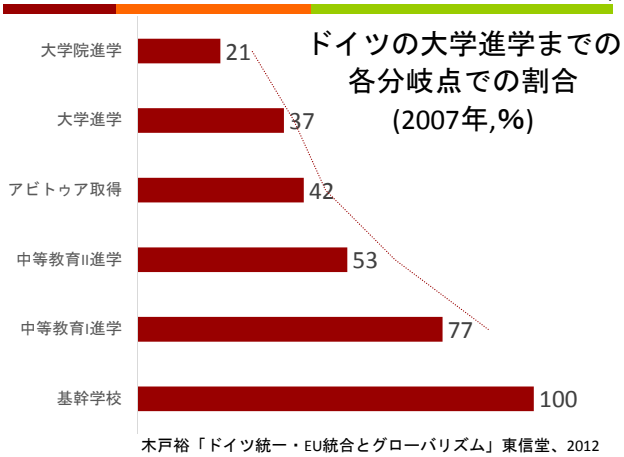
EU/マーストリヒト条約('92)による(高等)教育のグローバル化の始まり

- ヨーロッパ次元の教育を発展させること
- とりわけ学位および学習期間の大学間の承認を促進することにより、学生および教員の移動を促進すること。
- 教育機関の間の協力を促進すること

・・・（第三章　第126項　教育）

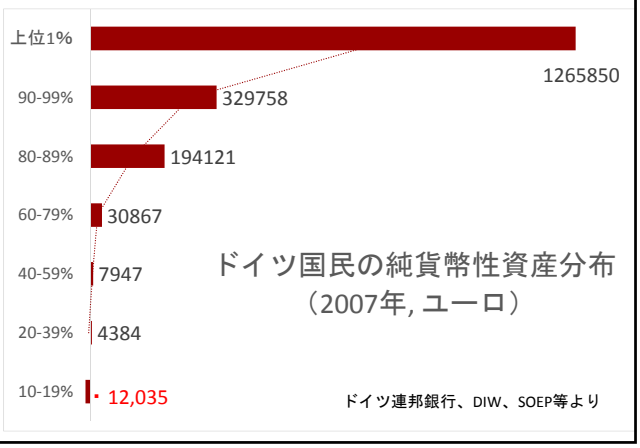
2007～2013年のEU教育統合計画で最も多くの予算(40%)が投入されたのは「高等教育」

4



木戸裕「ドイツ統一・EU統合とグローバリズム」東信堂、2012

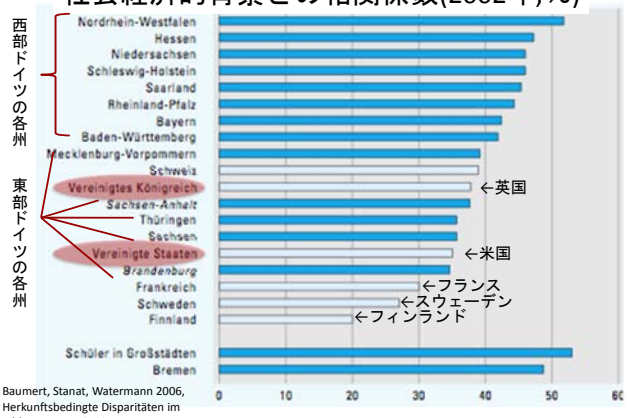
5



ドイツ連邦銀行、DIW、SOEP等より

6

生徒のPISA2000(読解力)の成績と社会経済的背景との相関係数(2002年,%)



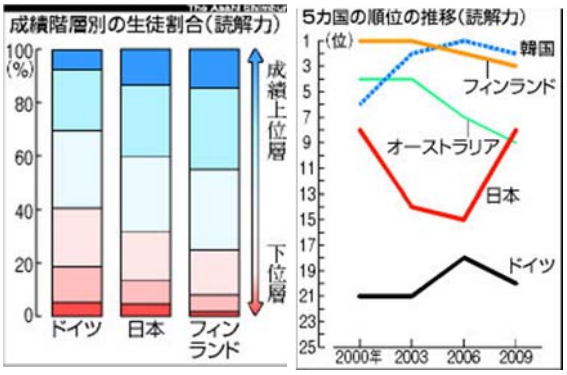
Baumert, Stanat, Watermann 2006, Herkunftsbedingte Disparitäten im Bildungswesen S. 62

7

ドイツの16州の財政規模の格差(2013年,ユーロ)

連邦財政省、Statista、Zeit Onlineより

8



朝日新聞「国際学習到達度調査（PISA）に揺れる各国　シンポで報告」2010年12月10日

9

グローバル化に付随するリスク

- 高学歴エリートによるEUの肥大化・官僚化を直接コントロールできない。民主主義の欠如。
- グローバルな学歴競争に乗れない人々の方が多いドイツ。国内格差が理由。
- それにかかわらず平等に降りかかる生活、安全、環境などにおけるリスク。

「不確実性はますます社会経験の基盤となっていき、人生や生活のリスク問題が増大する。その解決にもはや唯一の正解はなく、矛盾に満ちた、多様な選択肢があるだけである。」(Bonß 1996, 173)

2015年3月9日（月）、朝日新聞社の浜離宮朝日ホール(© picture alliance / dpa)

10

ドイツのエネルギー政策における リスク認識の変化

「極めて高度な科学技術を持つ国で福島のような事故が起きたのを目の当たりにし、（原発には）予想しない『残余リスク』が生じることを認識した」

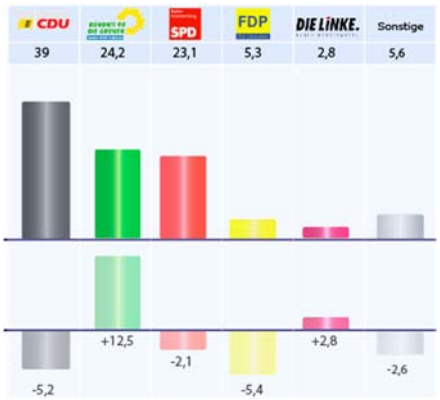
2011年3月15日　閣議を終えたメルケル首相が官邸で記者会見

11

「『原発稼働延長法』を事実上3ヶ月間棚上げし、古い原発７基を緊急に停止し、フクシマのような事故が起こる可能性について検証する」

2011年3月27日、南西部バーデンヴュルテンベルク州で緑の政権誕生

12



州首相に緑の党の
クレッチェマン氏

出典：Statistisches Landesamt Baden-Württemberg

2011年3月28日　ベルリンのキリスト教民主同盟の党本部で「敗北宣言」の記者会見

13

前日のバーデン・ヴュルテンブルク州の選挙で、キリスト教民主同盟が58年ぶりに敗退、史上初めて緑の党の首相が政権を奪取

14

2011年3月26日　ベルリン反原発デモ

15

16

17

18

若者を中心とする政党
政治への不信の増大

地方レベルの
緑の党の躍進

このような「異議申し立て文化」がドイツで結実したのはなぜか?

19

ドイツのリスク管理への行政介入の変化

福島の東電原発事故の後は、残余リスクにも介入する「脱原発」を決定。

脱原発は「科学」よりも「倫理」を重視したもの。

「科学」と「倫理」が同列に扱われるようになった契機は?

高リスク

危機 (Gefahren)	危機の排除 (Gefahrenabwehr) 確実な国家介入を要する。国民の生命･身体･財産の保護を目的とする。
リスク (Risiko)	リスクの予防 (Risikovorsorge) 適切な国家介入を要する。リスクの低減が目的で、不確実性も大きい。
残余リスク (Restrisiko)	受忍すべきリスク 国家介入は許されない (法的に許容されたリスク)

低リスク

(下山憲治「ドイツ公法学におけるリスク管理手法研究序説」『行政社会論集』第15巻第1号、37～38ページ)

20

チェルノブイリ事故後の3つの反応に見るリスクに向き合う市民の学び

21

1.「怒り」の表現の強化

原発や中間処理場の立地地域（田舎）での反原発デモ展開

ゴアレーベン最終貯蔵施設候補地での建設反対運動の中心人物マリアンネ・フィリッツェン氏
（TBS「秘話開封…ドイツのメルケル首相が脱原発決めた瞬間」2012年3月24日放送）
http://www.dailymotion.com/video/xpnn2n_20120324-yyyyyy-yyy-yyy_news

22

2.不安の表明と共有

小さな子どもを持つ親たちを中心とした市民測定活動

23

市民グループによる独立測定の開始

全国で40カ所以上。
小さな子どもを持つ母親たちと、物理学や生物学の専門知識を持つインテリ層が中心。

市民測定グループ	都市	州
独立系放射線測定所/放射線テレックス	ベルリン	ベルリン
放射線ルーペ	ベルリン	ベルリン
汚染されていない食品を求める消費者の会	キール	シュレスヴィヒ・ホルシュタイン
人間自然研究所	フェルデン	ニーダーザクセン
放射線測定技術協会	ミュンスター	ニーダーザクセン
残余リスクに対抗するエムスラント親の会	リンゲン	ニーダーザクセン
ガンマ測定所	ケルン	ノルトライン・ヴェストファーレン
残余リスクに対抗する親のイニシアチブ	ヴィースバーデン	ヘッセン
ミュンヘン環境研究所	ミュンヘン	バイエルン
土壌と植物	ケーニヒスドルフ	バイエルン
MGA フリュステンフェルトブルック	カウフボイレン	バイエルン

主な独立系市民測定グループ

24

母親の主観的な不安と専門家の客観的な知識の融合

母親グループの代表エリザベートさん

1989年2／3月の検体ミルクナッツチョコレート。「<53Bq/kg」の文字が見える

- 1986年の初夏、3児の母でオペラ歌手のエリザベートさんは、政府の対応に不信感をき、事故後1週間後から母親達のグループで汚染されていないミルクの共同購入を行っていた。
- 物理学者ヴェルニッケ博士は、行政の食品測定の現状に満足せず、所有する測定器で自宅で測定していたが、市内の流通食品の獲得に苦心していた。
- この2人が出会うことによって、母親のニーズと科学者の専門知識が結びついた独立の市民放射線測定所の構想が持ち上がる。

25

放射線防護協会の編集長デルゼー夫妻

市民目線で行政情報の不十分さをカバー

- 公的機関の測定では、商品名、工場名などの詳細な情報は記載されない。また生鮮食品のみ。
- 西ベルリン市（当時）の場合、月に約2,500サンプル以外の食品はノーチェックで流通
- 市民測定所は、スーパーに流通している加工商品を対象に、商品名、原産地、製造加工日、製造者固有番号、メーカー名、販売店舗名も公開
- 推奨する基準値も公的機関よりもかなり厳しかった。
- 日々の生活の「リスク不安」を解消する情報の正当性が示された。

翌年に市民測定所が検出した基準値(100Bq/kg)超え食品の例

1月26日	ベビーフード(182)
2月2日	パスタ(107)
2月9日	牛乳(187～305) 生クリーム(211～293) ヘーゼルナッツ(211～293)
3月2日	フランス産ハーブティー(4485)
3月23日	チーズ(132)、パスタ(118)

26

3.再生可能エネルギー自治

市民が各地で草の根の再生可能エネルギー会社を設立

例：「原子力のない未来のための親の会」→シェーナウ電力会社

2011年ゴールドマン環境賞受賞ウルズラ・スラーデック氏
（ジャンル:持続可能性、シェーナウ電力会社）
http://www.goldmanprize.org/2011/europe

27

「リスク」に向き合うなかで獲得した意思決定への主観的な関与

- 「危機は主観や状況に左右されない。これに対しリスクは常に、ある不確実性に対する主観的な意思決定を前提とする」（Bonß 1995; 53)
- ただし個人から見れば、主観的な意思決定の余地が全くなく、そこから疎外されていることがすでに危機に直結したリスクとなる。

意思決定からの疎外というリスクに、どのような学習プロセスで取り組むべきか?

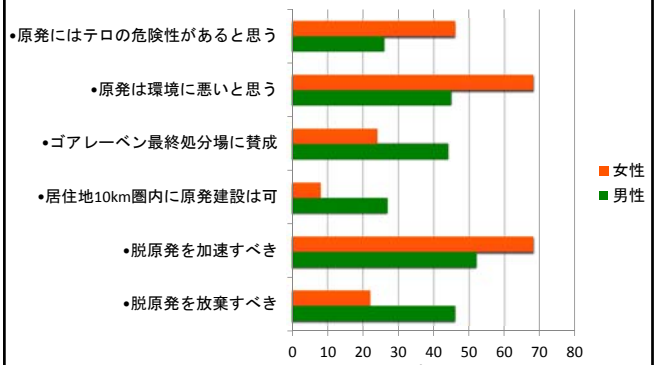
それが適切に行われるには、どんな社会的、心理的視点を配慮すべきか?

28

リスクに向き合う学習プロセスのゴール ～ESDとSDGsへの示唆～

29

男女の原発への見解の違い



Greenpeace Magazine, 2005, Ergebnisse der Emnid-Umfrage zur Einstellung der Bevölkerung zur Atomenergie

30

女性の原発リスクへの不安に現れる意思決定をにおける構造的な不公平

- 意思決定に影響を及ぼす可能性が低いほど、リスク感覚は鋭くなる。
- 女性の権限や影響力は原則的に男性よりも制限されているため、このような大きな差が出てくるのではないかと説明できる。

一般的なリスク認識の度合いの高さ（性差、教育、収入、人種等カテゴリーごと）

白人男性 < 白人女性 黒人男性 < 黒人女性

Slovic, P. (1999): Trust, emotion, sex politics, and science: surveying the risk assessment battlefield. In: Risk Analysis, Vol.19, No.4

31

不安に向き合う市民測定活動の学習プロセス

1. 小さな子どもを持つ母親や妊婦など、リスクへの脆弱性の高いグループは、不安からリスクを高く認識する傾向がある。
2. しかしこのようなグループは通常、意思決定に関与できる構造になっていない。意思決定から疎外された状況は主観的な不安を増幅し、無知が脅威となり、再び高いリスク認識に陥らせるという悪循環を生む。
3. 構造的に不公平なリスクに対し、不安の正当性を基盤とした市民測定活動では、普通の市民が放射線や測定技術を学ぶことで、リスクを「制御できる」、「知っている」と感じる感情が生まれた。
4. これが「不安」と「怒り」を結びつけ、不安に正当性を与え、市民を次の行動に向けてエンパワメントしていった。

32

学習プロセスの社会的、心理的な要素

1. 信頼：不安を正当化し、コミュニティに受け入れられるという感覚。不確実な未来や無知という条件下での行動に確実性をもたらす。「システム外部の不確実性（客観的な知識）の欠如は、システム内部の確実性（信頼）によって補足されうる（Luhmann 1989, 16f)」
2. 曖昧さへの耐性：少ない情報や知識から来る無力感を緩和し、複雑で展開が読めない状況を耐えることができる力。客観性を強く求めすぎない。（Fenkel-Brunswik 1949）
3. 感情：認知的判断は感情と深く結びついており、人はその均衡を保とうとする。「制御できる」、「知っている」という感情が実際の問題解決能力と行動力を促進する。「警告レトリック」では行動は制限される。

33

学習プロセスのゴールとしての「方向性の知」(Orientierungswissen)

1. 多様なアクター間の行動や状況の複雑な相互作用を考慮しつつ、ある程度不確実性に対処できるようになるための学習は、日常的、もしくは学術的にも、社会の行動範囲を規定する「**方向性の知**」を生み出す。
2. 不完全で不確実な状況においても無力感に陥らず、そこから問題解決に向けて最大限の有効な情報を引き出し、方向感覚のように次の行動指針を自ら作り出すことのできる能力。客観的な専門知識と並びリスク社会に不可欠。
3. コミュニケーションプロセスに参加する各アクターの**個人的、社会的視点が配慮された学習環境**でのみ、「方向性の知」の獲得が可能となる。

Evers, A., NowotonyH. (1987). Über den Umgang mit Unsicherheit. Die Entdeckung der Gestaltbarkeit von Gesellschaft. Frankfurt: Suhrkamp

34

その後のドイツの科学技術政策の変化

1. 脆弱性の高いグループを考慮した規制科学（レギュラトリ・サイエンス）の見直し
2. リスクコミュニケーションにおける参加アクターの増加
3. 連邦文部省の助成金による学際的な社会エコロジー研究 (Sozialeökologische Forschung)の発足
4. 多様な日常生活の参加者の経験知の協働

Schultz, I. (2006): Frauen aktiv gegen Atomenergie – Spuren in der Wissenschaft. In: genanet, Röhr, U.: Frauen aktiv gegen Atomenergie –wenn aus Wut Visionen werden.

35

SDGs「最後の人を最初に」アプローチ

- あらゆる形態・規模の貧困をなくし、すべての人が尊厳と平等、健康な環境の中で自己実現を図れるようにする「誰も取り残さない」アプローチ
- MDGsでは、「貧困を半減する」ために、やりやすい、効率よくできるところからやる、という手法がとられたが、SDGsは「最後の人を最初に」として、一番厳しい状況に置かれている人々にまず最初にアプローチする
- 「エボラ」や「IS」の爆発的拡大という失敗を踏まえて、「取り残される人が世界を脅威に陥れる」教訓

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

36

「方向性の知」からのSDGsとESDへの示唆

「ESDコンピテンシー」

- 不確実な未来にとって極めて重要なテーマや学習領域は学際的である。解決すべき（持続不可能な）問題の状況を、適切な形で提示する。
- 客観的なディシプリンによって科目を分断するのではなく、個人的、主観的な利害関心（例えば健康）を考慮して、学習環境を作り上げる。

（トランスファー21「ESDコンピテンシー」明石書店、2012年、p.26）

「SDGsアプローチ」

- 感情に基づくリスク認識を直視し適切に扱うことで、意思決定から疎外された「最後の人」にも、主観的な安全と制御可能性の感覚を作り上げる。
- 個人のリスク認識を適切に扱うことの必要性は、援助・被援助といった分断の視点ではなく、個人や社会が「方向性の知」に基づき、貧困脱却への行動力を育成するという目標から導かれる。

37

- Beck, U. (2007) Weltrisikogesellschaft. Frankfurt am Main: Suhrkamp
- Bonß, W. (1996) Die Rückkehr der Unsicherheit. Zur gesellschaftliches theoretischen Bedeutung des Risikobegriffs. In: Banse, G. (Hrsg.) Risikoforschung zwischen Disziplinarität und Interdisziplinarität. Von der Illusion der Sicherheit zum Umgang mit Unsicherheit. Berlin: edition sigma, S. 165-184
- Baumert, Stanat, Watermann (2006), Herkunftsbedingte Disparitäten im Bildungswesen S. 62
- Evers, A., NowotonyH. (1987). Über den Umgang mit Unsicherheit. Die Entdeckung der Gestaltbarkeit von Gesellschaft. Frankfurt: Suhrkamp, S.12-24
- Schultz, I. (2006): Frauen aktiv gegen Atomenergie – Spuren in der Wissenschaft. In: genanet, Röhr, U.: Frauen aktiv gegen Atomenergie –wenn aus Wut Visionen werden.
- 木戸裕(2012)「ドイツ統一・EU統合とグローバリズム」東信堂
- 高雄綾子(2015)「ドイツ・脱原発への市民の学習」『地域学習の創造』東大出版会, p295-318
- トランスファー21(2012)「ESDコンピテンシー」明石書店、p.26

ご静聴ありがとうございました。

フェリス女学院大学国際交流学部 高雄綾子
takao@ferris.ac.jp

全体会１：特別講演

北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像

山下正兼
北海道大学副学長

要旨

北海道大学では、ディプロマ・ポリシーにおいて「多様な文化を理解し、人類の未来に寄与する創造的かつ指導的役割を担いうる人材の育成」を謳っている。これには「持続的発展のための教育」（ESD：Education for Sustainable Development）がめざす人材の育成が含まれていることは自明である。しかしながら、「持続的発展」（SD）に対する本学の取組は明文化されておらず、積極的にアピールする必要がある。

これを受け、北海道大学総長のイニシアチブにより、「サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム」が設置され、具体的な方策を検討することとなった。

本講演では、チームで議論されたいくつかの案、例えば、1）ディプロマ・ポリシーにおいて「世界の持続的発展のための課題解決に貢献できる人材の育成」を明記する、2）シラバスにおいて各開講科目と持続可能な開発目標（SDGs）との対応を示す、3）全学教育にSDに関する新たな教育プログラムを開設する、4）SDに関する情報ネットワークを充実させる、などの方策を提案したい。

本シンポジウムにおける学内外から意見を踏まえ、これらの提案をブラッシュアップし、実現可能かつ効果的な施策案を総長に提言したい。

略歴

北海道大学サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム　チーム長
北海道大学副学長
理学研究院教授
新渡戸スクール副校長

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク10周年記念
国際シンポジウム
～持続可能な開発目標（SDGs）に貢献する高等教育のあり方～

北海道大学における サステナビリティ教育の将来像

Future Design of Education for Sustainable Development in Hokkaido University

北海道大学サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム 座長
北海道大学副学長
山下正兼

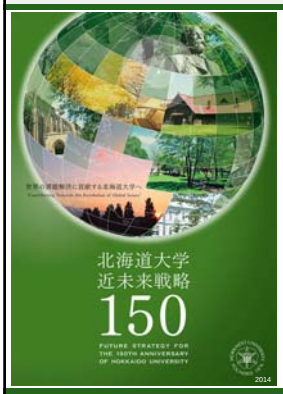
Masakane YAMASHITA
Chief, President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education / Vice-President, Hokkaido University

2016.10.29

北海道大学近未来戦略150

Future Strategy for the 150th Anniversary of Hokkaido University

1



2026年に創基150年を迎えるにあたり

世界の課題解決に貢献する北海道大学へ

Contributing Towards the Resolution of Global Issues

社会において大学が果たすべき役割の重要性を深く認識し、「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向けて、建学以来の基本理念と長期目標を踏まえた大学改革を大胆かつ着実に進める。

Hokkaido University profoundly acknowledges the importance of the role that a university should play in society. We have decided to boldly and steadily move forward with reforms based upon the basic philosophies we have held ever since our founding. Our long-term objective is to become "a Hokkaido University that contributes to the resolution of global issues".

研究: 様々な課題を解決する世界トップレベルの研究を推進

教育: 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成

Education: Hokkaido University will produce graduates who will play a leading role in contributing to the development of a global society.

社会貢献: 学外との連携により、知の発信と社会変革を提言

管理運営: 総長のリーダーシップの下、持続的な発展を見据えた大学運営

情報発信: 世界に存在感を示す

サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム

President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

2

設置の趣旨

本学では，2008年度に開催されたG8大学サミットにおいて採択された「札幌サステイナビリティ宣言」に端を発し，サステイナビリティ学教育研究センターの設置，サステイナブルキャンパス推進本部の設置，サステナビリティ・ウィークの実施など，「持続的発展（Sustainable Development: SD）」に関する教育・研究活動を推進してきた。

2016年3月にサステイナビリティ学教育研究センターが廃止された。また，社会情勢が大きく変化する中，本学が取り組むべき「サステナビリティ戦略」について，あらためて検討が必要となった。北海道大学創基150年に向け，本学が持続可能な発展を遂げ，世界の課題解決に貢献する人材を育成するためには，「持続的発展のための教育」（Education for Sustainable Development: ESD）の推進が不可欠である。そこで「サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム」が設置され，サステイナビリティ教育の在り方について検討を開始した。

任務

次の事項について検討し，総長に答申すること。

・サステイナビリティ教育を推進する方策
・サステイナビリティ教育に関するネットワークの構築
・サステイナビリティ教育の学内外への積極的な発信

北海道大学におけるサステナビリティ教育の内容には踏み込まない。
本学におけるサステナビリティ教育のシステム（枠組み，運営，発信など）を検討する。

サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム

President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

3

構成員 Members

座長　副学長（理学研究院） Chief, President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education/ Vice-President, Faculty of Science	教　授 Professor	山　下　正　兼 Masakane YAMASHITA
総長補佐（文学研究科） Advisor to the President Graduate School of Letters	教　授 Professor	弥　　和　順 Kazuyori YUHAZU
文学研究科 Graduate School of Letters	教　授 Professor	瀬名波 栄　潤 Eijun SENAHA
高等教育推進機構 Institute for the Advancement of Higher Education	教　授 Professor	細　川　敏　幸 Toshiyuki HOSOKAWA
地球環境科学研究院 Faculty of Environmental Earth Science	教　授 Professor	谷　本　陽　一 Yoichi TANIMOTO
サステナブルキャンパス推進本部 Office for a Sustainable Campus	特定専門職員 Coordinator	池　上　真　紀 Maki IKEGAMI

会議 Meetings

予備会, 3/28; 本会議 1st, 5/11; 2nd, 7/22; 3rd, 8/19; 4th, 9/7; 5th, 9/30; 6th, 10/14

本講演の趣旨 The Aim of This Talk

4

サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム

サステナビリティ教育検討プロジェクトチームは北海道大学総長のイニシアチブにより設置された。その任務は本学におけるサステナビリティ教育の現状と問題点を整理した上で、総長へ提言する将来構想の素案を提示することである。本講演ではプロジェクトチームが検討した素案に基づき、SDGsに貢献する大学に相応しい構想とはどのようなものかについて、指定討論者ならびに会場の参加者と共に議論を行う。

President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

The "President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education" was established as an initiative by the president of Hokkaido University. The team will summarize the current state and issues of the University's sustainability education and then present a draft proposal to the president for future strategy and action plan for sustainability education. Based on the team's presentation, designated commentators and session attendees will discuss the appropriate initiatives for universities that aim to contribute to SDGs.

北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

Sustainability-related Classes in Hokkaido University

5

平成26，27年度　サステイナビリティに関する科目の割合は 8～11%
FY2014 and FY2015 The ratio of sustainability-related classes is 8-11%

平成26年度 FY2014	
学部 Undergraduate	425科目
大学院修士課程 Postgraduate (Master level)	319科目
博士・法科・専門職大学院 Postgraduate (Doctoral level)	35科目
合計 Total	779科目
該当率 Ratio	8%

平成27年度 FY2015	
学部 Undergraduate	415科目
大学院修士課程 Postgraduate (Master level)	343科目
博士・法科・専門職大学院 Postgraduate (Doctoral level)	88科目
合計 Total	846科目
該当率 Ratio	11%

北海道大学では相当数のサステイナビリティーに関する科目が開講されている。
Many sustainability-related classes have already opened in Hokkaido University.

ASSC™ Sustainability-related classes are identified in our Assessment System for Sustainable Campus, Hokkaido University.

サステイナブルキャンパス推進本部 調査データ

6

サステイナビリティー教育に関する将来構想案
Proposal for Future Strategy and Action Plan for Sustainability Education

1. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies
ディプロマ・ポリシーに「人類社会の持続的発展に貢献できる人材の育成」を明記
Declaration of the production of graduates who will contribute to the sustainable development of the human society in diploma policies .

2. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System
シラバスで各開講科目と持続可能な開発目標（SDGs）との対応を示す
Clarification of the correlation between classes and SDGs in syllabi.

3. ESDプログラムの開設 New ESD Program
全学教育に持続的発展に関する新たな教育プログラム（ESD）を開設する
Establishment of a new ESD program in the Core Curriculum (General Education Courses).

4. 組織整備 New Organization for Sustainable Future
サステイナビリティに関する活動の統合と全学展開を可能とする組織を整備する
Setup of a new organization in which the sustainability-related activities are unified and propagated to the whole university.

北海道大学

7

1a. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

北海道大学

8

1b. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

学士課程ディプロマ・ポリシー 現行文 (Present Undergraduate Diploma Policy)

北海道大学の学士課程教育は，世界における市民としての自覚をもって社会に参加できること，専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身につけること，専門分野を広い視野の下に学ぶことをめざした教育を進めています。それを通じて，国際的に通用する高度な学問的素養をもち，的確な判断力とリーダーシップを発揮する人材を育成します。すなわち，本学は卒業生に対し，多様な文化を理解し，人類の未来に寄与する創造的かつ指導的役割を担いうる人材であることを求めます。

こうした人材を育成するため，本学では，4つの基本理念の下，学部ごとに教育理念，教育目標を定め，常に先進的な教育を行います。各学部の教育課程により学業を修め，学部・学科等ごとに定められた学位授与水準（学力・能力・資質）を満たし，上記能力を持つ人材として認められる学生に対し，学士の学位を授与します。

Hokkaido University promotes undergraduate education which aims students to be socially involved with the awareness of being a world citizen, to acquire communication skills and basic knowledge for a certain discipline, and to study a specialized field from a broader perspective. Through the provision of education, we produce quality graduates with academic sophistication at an international standard and capacity to provide good judgement and leadership. In other words, we expect our graduates to assimilate diverse cultures and take a creative and leading role in contributing to the future of humanity.

北海道大学

9

1c. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

学士課程ディプロマ・ポリシー 修正案 (Suggested Undergraduate Diploma Policy)

北海道大学の学士課程教育は，世界における市民としての自覚をもって社会に参加できること，専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身につけること，専門分野を広い視野の下に学ぶことをめざした教育を進めています。それを通じて，国際的に通用する高度な学問的素養をもち，的確な判断力とリーダーシップを発揮する人材を育成します。すなわち，本学は卒業生に対し，多様な文化を理解し，創造的かつ指導的役割を担い，人類社会の持続的発展に貢献できる人材であることを求めます。

こうした人材を育成するため，本学では，4つの基本理念の下，学部ごとに教育理念，教育目標を定め，常に先進的な教育を行います。各学部の教育課程により学業を修め，学部・学科等ごとに定められた学位授与水準（学力・能力・資質）を満たし，上記能力を持つ人材として認められる学生に対し，学士の学位を授与します。

Hokkaido University promotes undergraduate education which aims students to be socially involved with the awareness of being a world citizen, to acquire communication skills and basic knowledge for a certain discipline, and to study a specialized field from a broader perspective. Through the provision of education, we produce quality graduates with academic sophistication at an international standard and capacity to provide good judgement and leadership. In other words, we expect our graduates to assimilate diverse cultures and take a creative and leading role in contributing to the sustainable development of the human society.

北海道大学

10

1d. 北海道大学学位授与の方針 Modification of Diploma Policies

大学院課程ディプロマ・ポリシー 現行文 (Present Graduate Diploma Policy)

北海道大学大学院は，本学が掲げる4つの基本理念の下に，専攻分野における高度な教育研究と先端的・学際的な教育研究を行うことにより，高度な専門性に加えて，広い視野ならびに高い倫理観を備え，人類社会の持続的発展に貢献しうる高度な専門家および職業人の養成を教育目標としています。

また，大学院の各課程において学位を授与される者は，次に掲げる学識・能力を身に付けている必要があります。

中略

上記の教育目標を達成し，各課程で身に付けることが必要な学識・能力を修得させるため，各研究科等において，各々の教育目標に即した学位授与方針を定めています。そして，当該方針に基づく教育課程を編成・実施し，各研究科等で求める学力，能力，資質を満たすと認められる者に対し，修士もしくは博士の学位または専門職学位を授与します。

Graduate schools of Hokkaido University conduct advanced education research in specialized fields as well as leading-edge and interdisciplinary education research under our four basic philosophies. Through promoting the education research, our educational goals have been determined as to train advanced experts and professionals who can contribute to the sustainable development of the human society with high level of expertise, a wide perspective and high ethical standards.

etc.

Students are required the following educational attainment and capability to receive a postgraduate degree from the University at the completion of their education program.

北海道大学

11

2a. SDGsに対応したシラバス New Syllabus and Registration System

北海道大学

12

2b. SDGsに対応したシラバス　New Syllabus and Registration System

北海道大学

13

2c. SDGsに対応したシラバス　New Syllabus and Registration System

北海道大学

14

2d. SDGsに対応したシラバス　New Syllabus and Registration System

北海道大学

15

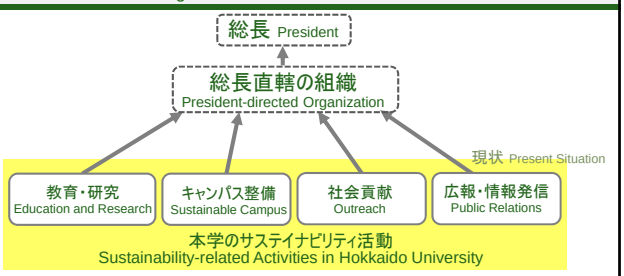
3a. ESDプログラムの開設　New ESD Program

- 独立した全学教育のコースとして設計 Planned a course in the Core Curriculum
- 1～2年で修了 Complete within freshman or sophomore
- 多くは既存の科目で併用可能 Elective course including existing lectures
- 合計10単位を修了要件 Require 10 credits
- 必修科目（2単位） サステナビリティ概論　文系理系が融合した講義 / 全体像がわかる
  Compulsory course (2 credits) Introduction to sustainability studies: Can view global image from arts, humanity and science
- 選択科目（以下の全学教育科目から8単位）Elective (Select 8 credits from followings)
  - ➤ 一般教育演習 Freshman seminar
  - ➤ 環境と人間 Environment and people
  - ➤ 社会の認識 Perceptions of society
  - ➤ 科学・技術の世界 The world of science and technology
  - ➤ フィールド型合宿授業（年2回，サステナビリティ概論受講が受講条件）
  Training camp in field (Twice per year, Open for students completed the Introduction to sustainability studies)

北海道大学

16

4a. 組織整備　New Organization for Sustainable Future



総長直轄の担当組織を設置し，現状，様々な組織で行われているサステイナビリティに関する活動を統合，全学展開する。
We propose to set a new president-directed organization, in which the sustainability-related activities presently performed in various organizations are unified and propagated to the whole university.

北海道大学

17

4b. 今後の展開と可能性　Sustainable Future We Believe in

総長直轄の組織 の検討課題

サステイナビリティにおける大学ガバナンス：
事業戦略とアクションプランづくり
全構成員が持続可能性の問題を考え，意識する

教育・研究 Education and Research	**学部・大学院でのサステイナビリティ教育プログラムの確立** 実践的教育の実施 イノベーション研究・実践 世界のサステイナビリティ研究の実践拠点
キャンパス整備 Sustainable Campus	アカデミック・プランを支えるキャンパス整備 社会実験の場としてのキャンパスの活用
社会貢献 Outreach	長期的視野に立って社会のニーズを分析 北海道の地域課題を捉え「持続可能な北海道」に貢献 札幌サステイナビリティ宣言（SSD）実現の牽引
広報・情報発信 Public Relations	教育研究活動をリオ宣言やSDGs等を援用して国際社会へ発信 基本理念および近未来戦略を世界にPR 広報拠点，情報窓口機能，総合博物館の活用 サステイナブル人材育成のための大学賞

平成27年9月サステイナビリティに関する提案
（総務企画部まとめ）より抜粋

北海道大学

18

御静聴ありがとうございました。
御意見・御批判をいただけると幸いです。

Thank you for your attention.
We appreciate your comments and criticism.

北海道大学

北海道大学で開講されているサステイナビリティに関する科目

学部科目

26，27年度ともに開講されているもの（抜粋）
- 100年後の未来学
- 「大人になる」こととジェンダー
- 2030年エレクトロニクスの旅
- インフラストラクチュアーの世界　ー古代ローマから現代までー
- グローバル化と環境の社会学
- ヒグマ学入門
- 海のふしぎ－海と人との関わり－

26年度のみ開講されているもの（抜粋）
- 地球に暮らす～生活と土木・建築技術の関わり～
- ソ連崩壊とその後の世界
- ホルモンの生物学
- 環境・美学・芸術

27年度のみ開講されているもの（抜粋）
- アジア政治論
- フェミニズム法学
- ヒトとは何か：人類史入門
- 観光創造学の世界に触れる

北海道大学

北海道大学で開講されているサステイナビリティに関する科目

大学院（修士）科目

26，27年度ともに開講されているもの（抜粋）
- Hydrogeology（地下水保全工学E）
- PARE基礎論Ⅰ－人口・活動・資源・環境の連環
- インバウンド・ツーリズム論演習
- エネルギーメディア変換材料学特論
- リサイクルシステム特論
- 温暖化影響論
- 家畜生産生物学総論

26年度のみ開講されているもの（抜粋）
- Urban Planning（都市環境デザイン学E）
- Water Quality Risk and Control（水・物質循環工学E）
- サステイナビリティ学総論Ⅰ　地球システムと人間の関わりと持続性
- サステイナビリティ学総論Ⅴ　サステイナビリティ学最前線
- メディア文化特論　メディア，そして文化

27年度のみ開講されているもの（抜粋）
- アイヌ・先住民研究特別講義Ⅰ
- フィールド環境情報学
- 環境適応学総論
- 教育社会特論　職業能力形成特論2015
- 極東・北極圏の環境・文化・開発－RJE3概論

北海道大学

北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

科目の選定方法

156 の検索キーワード一覧

シラバスキーワード検索でヒットした科目を選定

1 LCA	31 環境化学
2 エコマテリアル	32 環境改善
3 エネルギー	33 環境管理
4 エネルギー材料	34 環境技術
5 エネルギー資源	35 環境教育
6 エネルギー変換	36 環境経済
7 グリーンツーリズム	37 環境計測
8 グローバル・イシュー	38 環境材料
9 サステイナブルケミストリー	39 環境社会
10 ジェンダー	40 環境修復
11 ツーリズム	41 環境浄化
12 バイオマス	42 環境政策
13 バイオ燃料	43 環境生理学
14 マイノリティー	44 環境設計
15 まちづくり	45 環境調和
16 ライフライン防災	46 環境動態
17 リサイクル	47 環境負荷低減
18 レクリエーション	48 環境保全
19 温暖化	49 環境法
20 科学コミュニケーション	50 観光
21 火山災害	51 気候
22 海洋環境	52 気候変動
23 海洋資源	53 気象
24 開発・援助	54 景観・環境
25 環境	55 景観形成
26 環境デザイン	56 景観生態
27 環境モデリング	57 経済思想
28 環境リスク	58 芸能・芸術
29 環境影響評価	59 建築環境
30 環境衛生	60 建築計画

北海道大学

北海道大学で開講されているサステナビリティに関する科目

61 交通工学	91 食料自給	121 地震災害	151 民俗学
62 公害	92 食料政策	122 地方自治	152 民族学
63 公共政策	93 森林教育	123 畜産バイオマス	153 木質バイオマス
64 再生可能	94 水域汚染	124 低炭素	154 有用遺伝子組み換え
65 再生可能エネルギー	95 水工学	125 低炭素社会	155 緑化
66 災害リスク評価	96 水収支	126 低負荷	156 緑地管理
67 参加型まちづくり	97 水理地質	127 電力系統工学	
68 施設園芸	98 生育環境	128 都市環境	
69 資源環境バランス	99 生態・環境	129 都市環境デザイン	
70 資源経済	100 生態系	130 都市経済	
71 資源循環システム	101 生態系サービス	131 都市計画	
72 資源植物	102 生物多様性	132 都市農村交流	
73 持続可能	103 生分解性物質	133 土壌	
74 自然エネルギー	104 先史・歴史	134 土地利用	
75 自然環境	105 多文化教育	135 土木環境	
76 自然共生	106 太陽地球システム	136 土木計画	
77 社会システム工学	107 炭素収支	137 燃料電池	
78 社会思想	108 地域力バナンス	138 廃棄物	
79 社会集団	109 地域環境・災害	139 比較民俗学	
80 社会人類学	110 地域看護	140 復旧・復興工学	
81 社会組織	111 地域居住	141 物質循環	
82 住居環境	112 地域景観	142 文化遺産	
83 住居計画	113 地域経済	143 文化財	
84 住生活	114 地域計画	144 文化財政策	
85 省エネルギー	115 地域政策	145 文化資源	
86 省エネルギー技術	116 地域防災	146 文化人類学	
87 省資源	117 地域防災計画	147 保全	
88 種生	118 地域防災政策	148 保全修復技術	
89 植物工場	119 地球環境	149 保全生態学	
90 食と環境	120 地産地消	150 保存・再生	

北海道大学

23

サステナビリティー活動ポータルサイト

サステナ ポータルサイト

http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/huisd/jp/

北海道大学

北海道大学サステイナビリティ学教育研究センター
Center for Sustainability Science, CENSUS

24

5.2 教育プログラムによる年度別修了者数、統計資料等

本センターが提供した教育プログラムに関係する修了証を取得した学生数を以下に示す。

修了年度	HUIGS	StraSS 環境リーダー	StraSS 環境マイスター	履修証明プログラム	SSC
平成 20 年 3 月	8				
平成 20 年 9 月	8				
平成 21 年 3 月	14				10
平成 21 年 9 月	3				0
平成 22 年 3 月	14	0			13
平成 22 年 9 月	5	0			0
平成 23 年 3 月	19	2			3
平成 23 年 9 月	8	1			5
平成 24 年 3 月	18	8	0	3	8
平成 24 年 9 月	4	2	0	1	3
平成 25 年 3 月	12	8	0	6	7
平成 25 年 9 月	2	2	1	2	3
平成 26 年 3 月	20	12	0	9	6
平成 26 年 9 月	5	4	0	3	0
平成 27 年 3 月	25	10	0	6	7
平成 27 年 9 月	6	3	0	3	3
平成 28 年 3 月	14	8	0	6	4
計	185	60	1	39	72

CENSUS
活動成果報告書
(2016.3.31)より

北海道大学

サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム
President's Project Team for Sustainable Development in Hokkaido University Education

25

基本方針

- サスティナビリティ学教育研究センターのような教育組織等を新たに作るのではなく，現行の科目を上手く利用して，本学においてサスティナビリティ一教育を積極的に実施していることを外に向かってアピールする具体的方策を練る。
- ディプロマポリシー等に，北大（学部並びに大学院）での教育の柱の一つが「サスティナビリティ」であることを明確に示す。
- 現行のサスティナビリティに関連する科目を束ねて適切な名称を付した枠を作る。例えば，全学教育においては，サスティナビリティに関連する科目が外から見える形になるように，全学教育科目の授業区分を修正あるいは変更する。各学部で実施されているサスティナビリティに関連する科目は，第三期中期目標期間中に実施予定となっている「学部共通授業科目」に組み込み，サスティナビリティ教育枠を可視化する。大学院共通授業科目の①特別科目群（社会的要請に対応するため，大学が戦略的に開講する科目）として開講する，など。
- サスティナビリティ科目の必修化や副専攻化など，さらに進んだ教育システムについては，取組実績を踏まえた上で新たに検討することとし，本チームでは具体的な方策について扱わない。
- サスティナビリティ科目の見える化に加え，サスティナビリティに関連する科目を担当する教員や，SDGsに関する研究に関わっている教員が情報共有できるネットワークの構築を検討する。例えば，サスティナビリティに関連する授業の紹介，研究論文が公表された場合の案内，関連研究・教育集会の案内などを公表できるサイトを構築し，北大におけるサスティナビリティ関連情報を一元化することで，学外から本学の取組を見えやすくする。

北海道大学

座長

小内透
北海道大学大学院教育学研究院長
北海道大学大学院教育学研究院教授

指定討論者 1

キム・チャンジョン
ソウル大学校師範大学長

略歴

ソウル大学校師範大学長。1989年テキサス大学オースティン校で博士号を取得。2006年から2010年まで 国際地学教育機関（IGEO）の委員長、同時に2004年から2010年まで国際地学オリンピック（IESO）諮問委員会の委員長を務めた。研究の専門分野は、「日常での科学学習と社会文化的観点に立った科学の授業におけるモデリング」。

Comments on Future Design of ESD in HU

Chan-Jong KIM
Prof. Earth Science Education
Dean, College of Education, SNU

Education
COLLEGE OF EDUCATION
SEOUL NATIONAL UNIVERSITY

1

Sustainable Development (SD)

- "Meeting the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs." (Brundtland report, 1987)
- Three dimensions of SD (Complex and integrated)
  - economic
  - social
  - Environmental
- Need integrated approaches in Social science, Humanities & Arts as well as Science & Engineering
- Education for Sustainable Development
  - 2005-14 "Decade of Ed for SD" (UN 2003)
  - IAU, UNESCO, UNEP/GUPES

2

Focus of discussion

- Coordinated, whole-institution approach
  - Leadership, Plan, Implementation, Participation, Assessment
- Academic Staff Development
  - Transform curricula and pedagogy towards SD
- Overcome disciplinary boundaries
- Empowering and mobilizing youth

3

HU Status

- SD Initiative continuity for last 10 years
- Many SD-related courses:
  - 8% (2014)
  - 11% (2015)
- University wide SD week
- Much more

4

Coordinated, Whole-institution Approach

- HU Proposal
  - Established **"President's Project Team"** for SD in HU, review status and plan for future
  - Establish **"President-directed Organization"**
  - Plan for every level (Diploma, syllabus & registration, Program, and organization)
  - Aligning to UN 17 SDGs

5

Coordinated, Whole-institution Approach

- Leadership: Transformative
- Plan: Systematic
  - Core curr., Elective courses, Training camps
  - Assessment and feedback (need to be visible)
- Challenges
  - Staff development
  - Overcome disciplinary boundaries
  - Empowering and mobilizing youths

6

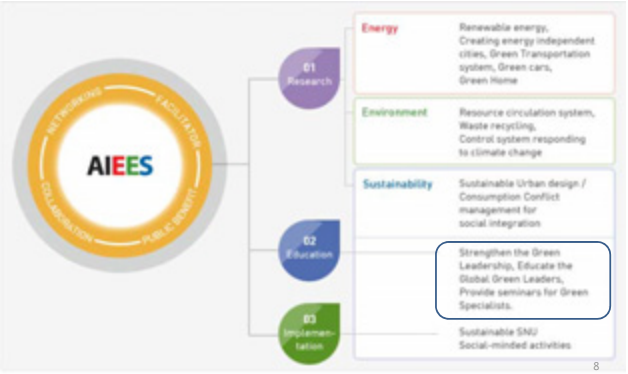
SD in SNU

AIEES Asian Institute for Energy, Environment & Sustainability
아시아에너지환경지속가능발전연구소

- Announced **"Sustainable SNU"** in 2008
- Established **AIEES** (Asian Institute for Energy, Environment & Sustainability)
  - Think-tank embodying Sustainability.
  - Collaboration in multidisciplinary researchers
  - Network between human resources and intellectual infrastructure
  - Heightening the University's social stewardship.

7

SD in SNU



8

More thoughts 1

- Need **Priorities** among 17 SDGs?
  - More urgent ones: climate change
  - **Why 2°C**

    According to the **IPCC**, global warming of more than 2°C would have serious consequences, such as an increase in the number of extreme climate events. In Copenhagen in 2009, the countries stated their determination to limit global warming to 2°C between now and 2100. To reach this target, climate experts estimate that global greenhouse gas (GHG) emissions need to be reduced by 40-70% by 2050 and that carbon neutrality (zero emissions) needs to be reached by the end of the century at the latest.

9

More thoughts 2

- Importance of ESD
  - Long-term Impact!
    - Begin with Formal Schooling
      - Research for Teacher Education
      - School, district-wide program
      - International alliance: "ESD Campus Asia" Program
    - Lifelong learning
      - Outreach
      - Community

10

More thoughts 3

- Empowering and Mobilizing youths
  - Example 1: **Our Children's Trust**

    http://www.ourchildrenstrust.org/press-releases/

The Court's ruling is a major victory for the 21 youth Plaintiffs, ages 8-19, from across the U.S. in what Bill McKibben and Naomi Klein call the "most important lawsuit on the planet right now." These plaintiffs **sued the federal government for violating their constitutional rights to life, liberty and property, and their right to essential public trust resources**, by permitting, encouraging, and otherwise enabling continued exploitation, production, and combustion of fossil fuels.

11

More thoughts 3

- Empowering and Mobilizing youths
  - Example 2: **ASEAN Power Shift 2015**
    - Period: 24-26 July 2015
    - **Venue:** United World College of South East Asia (UWC SEA), Singapore
    - http://world.350.org/singapore/asean-power-shift-2015/about-asean-power-shift-2015/

The problem that this proposal aims to address is the **weak position the region** has in terms of climate change policies, and its youth participation, amidst its pursuit for economic prosperity. This is largely due to inept political commitment, unsustainable industry practices and the lack of capacity needed to drive **grassroots initiated bottom up changes**.

12

- HU is a **Leading** University in ESD
  - Adopting Whole-institution Approach
  - Well Articulated Goals and Plans at various levels
  - International Collaboration and Leadership in SD and ESD
- Hope to collaborate in SD & ESD for safe and prosperous future

13

14

指定討論者２

北村友人
東京大学大学院教育学研究科准教授
東京大学サステイナビリティ学連携研究機構兼任准教授

略歴

東京大学大学院教育学研究科・准教授／東京大学サステイナビリティ学連携研究機構・兼任准教授。慶應義塾大学文学部人間関係学科教育学専攻卒業。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA ）教育学大学院社会科学・比較教育学科修士課程・博士課程修了。Ph.D .（教育学）。国連教育科学文化機関（UNESCO ）パリ本部教育局教育専門官補、名古屋大学大学院国際開発研究科准教授、上智大学総合人間科学部教育学科准教授を経て、現職。他に、ジョージ・ワシントン大学フルブライト研究員、ダッカ大学（バングラデシュ）日本研究センター客員教授、王立プノンペン大学（カンボジア）学長特別顧問、等を歴任。現在、日本学術会議連携会員（第23-24期 ）、日本比較教育学会理事を務める。主著に、『国際教育開発の研究射程―「持続可能な社会」のための比較教育学の最前線』（東信堂）、『＜岩波講座・教育 変革への展望１＞教育の再定義』（共著、岩波書店）等。

北海道大学サステナビリティ・ウィーク10周年記念国際シンポジウム
（於・北海道大学、2016年10月29日）

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

＜コメント＞

サステナビリティ教育を支える学習観

東京大学大学院教育学研究科・准教授／
サステナビリティ学連携研究機構・兼任准教授
北村 友人

1

はじめに

北海道大学のサステナビリティ教育

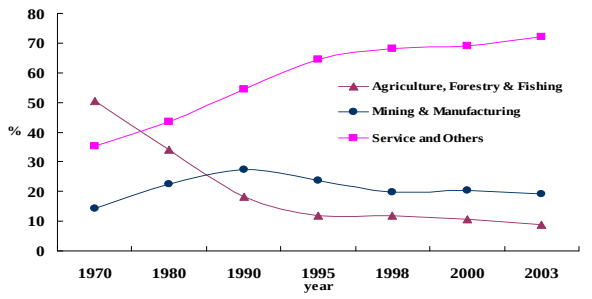
「多様な文化を理解し、人類の未来に寄与するとともに創造的かつ指導的役割を担い、世界の持続的発展に貢献できる人材」の育成

↓

いかなる学習観に支えられているのか、について考えてみたい

2

産業種別による雇用の変化(1970-2003)

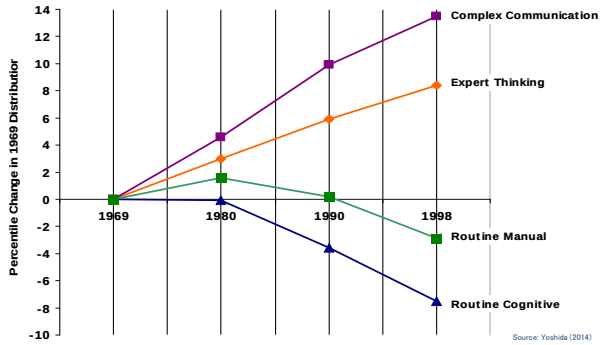


Source: Yoshida (2014)

3

求められるスキルの変化

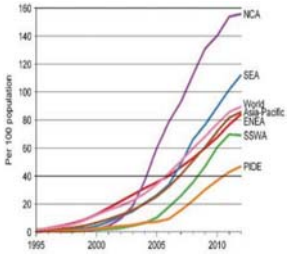
経済活動における単純労働（routine）と非単純労働（non-routine task）の比較
: 1969-1998 (1969=0)



Source: Yoshida (2014)

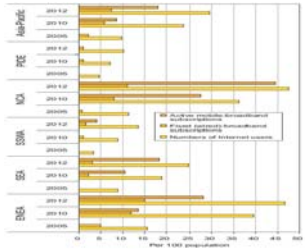
技術の革新

地域別の携帯電話契約数,
1995-2012



Source: ESCAP (2013), Statistical Yearbook for Asia and the Pacific

インターネット使用者数　（固定ブロードバンド及び携帯ブロードバンド契約数）, 2005, 2010 , 2012

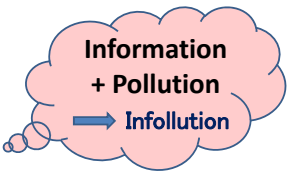


* ENEA: East and North-East Asia / SSWA: South and South-West Asia /
PIDE: Pacific Island dev. Econ / NCA: North and Central Asia /
SEA: South-East Asia

<Presented by Dr. Gwan-Jo Kim, Director of UNESCO Bangkok at the University of Tokyo on December 10, 2015>

5

「情報公害」(Infollution)



インターネットを介した情報の過剰供給が、暴力的コンテンツやネットいじめ、技術中毒など子どもに相応しくない内容をさらしている状態の「デジタル公害」を引き起こしている

<Presented by Dr. Gwan-Jo Kim, Director of UNESCO Bangkok at the University of Tokyo on December 10, 2015>

6

柔軟な「学び」のあり方

- 体系化された「知識」や「スキル」を身につけるだけでは、すぐに古くなってしまう
- ひとつの「正解」を求めるだけでは、世界を理解することはできない
- 「失敗」も含めて、多様な学びの機会を逃さない
- 「学び方」を学ぶ

7

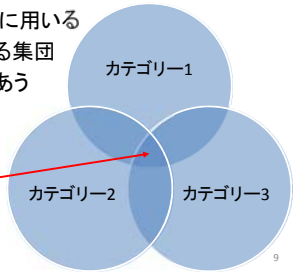
学習観の変容

伝統的アプローチ	進歩的アプローチ
市民性に関する教育	市民性のための/市民性を通した教育
社会秩序の再生産	変化への転換・適応
服従・追従 (conformity/compliance)	行動ならびに市民的社会参画 (action & civic engagement)
内容重視 (content-led)	過程重視 (process-led)
知識基盤型	原理基盤型 (principle-based)
講義による伝達	双方向的(interactive)アプローチ 批判的解釈
教師主導型アプローチ	生徒主導型アプローチ
試験中心型	全人的発達
教科書主導型の学習環境	マルチメディア活用型の学習環境
教科の知識	生涯学習のためのスキル
模倣	創造
近代的な教授法	未来志向の教授法

出典：Tawil(2013)を参照のうえ筆者作成

学力観の国際的な潮流

- 「コンピテンシーの定義と選択」OECD教育インディケータ事業
  (Definition and Selection of Competencies: DeSeCo)
- コンピテンシー
  カテゴリー1：道具を相互作用的に用いる
  カテゴリー2：異質な人々からなる集団で相互にかかわりあう
  カテゴリー3：自律的に行動する



反省性(reflectivity)
(省察的な思考・行動の基盤)

9

「学び(Learning)」の5つの柱

- 知ることを学ぶ(Learning to know)
- 為すことを学ぶ (Learning to do)
- 共に生きることを学ぶ (Learning to live together)
- 人間として生きることを学ぶ (Learning to be)

『学習：秘められた宝』(ユネスコ・21世紀教育国際委員会報告書、1996年)

＋

- 自分自身と社会を変革することを学ぶ
  (Learning to Transform Oneself and Society)

10

SDG 4.7 の重要性

2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シティズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

⇒ ダイナミックに変化する今日の社会において、目標4.7が包含する課題は非常に重要である。

11

ESDの基礎となるグローバル・シティズンシップ教育

世界中で多くの国が多民族・多言語・多宗教などにもとづく多文化国家となっている

それぞれの国に固有の
社会文化的な価値観を重視
・
国を越えた
普遍的な価値のあり方についても
理解を深める

普遍的≠西洋的

サステナビリティ教育のあり方

- 学習観の共通性と多様性
  - 「教授・学習の様式」の変容
  - 政治的・経済的・社会文化的なグローバル競争に資する人材の育成
  - 伝統文化、宗教、言語、政治体制などのローカルな文脈（＝それぞれの社会にとって自立的な営みである教育）
- 学習成果（learning outcomes）を重視
- 民主的な社会の担い手である「市民」の育成

13

SDGsのローカル化

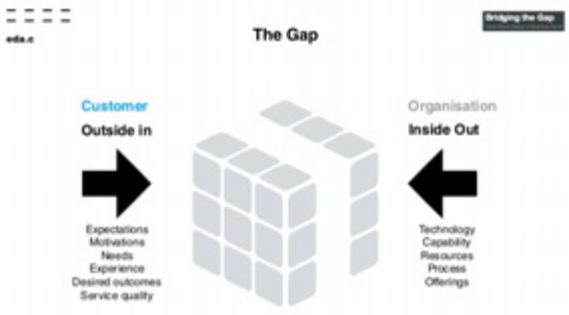
環境省S-11「持続可能な開発目標とガバナンスに関する総合的研究」プロジェクト(研究代表・蟹江憲史慶應義塾大学教授)において、SDGsを日本で実施していくための処方箋を考え、報告書にまとめた。

テーマ：貧困と格差社会、食料、健康、教育、ジェンダー、水、資源・エネルギー、生物多様性、ガバナンス

SDGsにもとづくカリキュラム開発のご参考になるかもしれません。

14

Inside Out, Outside In —アプローチの転換？—



Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda.c Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (http://www.slideshare.net/JPMC12/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther)

15

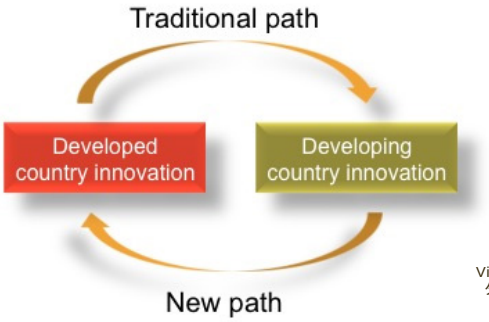
市民の参画
—Trans-disciplinaryなアプローチの可能性—

Full outside in and inside out alignment

Source: Designing Experiences with Outside-In Architecture Mike Clark, Business Designer Milan Guenther, eda.c Enterprise Architecture Conference Europe June 16-18 2014 (http://www.slideshare.net/JPMC12/designing-experiences-with-outside-in-architecture-mike-clark-milan-guenther)

16

Reverse Innovation



Vijay Govindarajan
ダートマス大学教授
ick.dartmouth.edu/people/vg/

http://ajayswamy.com/2013/08/21/reverse-innovation-and-the-role-mobile/

結び—大いなる期待と若干の質問—

- 変化の激しい社会における「学び」のあり方と学習観の変容
  - ⇒ 北海道大学の非常に意欲的かつ先駆的な取り組みに対する大きな期待
- 「普遍的」な価値観と「社会文化的に固有」な価値観との間で、いかにバランスをとっていくのか
- サステナビリティ教育における学習成果をどのように評価するか

18

東京大学大学院教育学研究科・准教授
サステナビリティ学連携研究機構・兼任准教授
北村 友人

指定討論者 3

Mats Engström
駐日スウェーデン大使館　科学・イノベーション部

略歴

駐日スウェーデン大使館の科学・イノベーション参事官。前職のスウェーデン環境省国際部長・国務副長官時代にはスウェーデンと欧州の持続可能な開発に関する意思決定に携わる。またスウェーデン外務省の特別顧問および主要な科学誌の編集長でもある。工学物理学修士号を有する。

KTH's sustainability initiative

- Sustainable Campus – focus on campus activities and the development of an Environmental Management System led by the Environmental Manager
- KTH-Sustainability – focus on integrating sustainability in education, research and cooperation led by the vice-president for sustainable development.
- Two parts working together and since 2016 organized as KTH Sustainability Office.

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

1

KTH Sustainability Office

- 6.5 people employed at the moment
- JPY 100 million (億円) per year (8 million kronor, 0.9 million US $)
- Vice-President for Sustainable Development is also Director of the Sustainability Office
- EMS (14001) Environmental Manager

https://www.kth.se/en/om/miljo-hallbar-utveckling/kontakt/organisation-och-kontakt-1.424825

2

Sustainable development in education: Two complementary approaches

- Evaluation of the progress of integration of sustainable development on the program level
- and
- providing tools and support for Program directors and teaching staff to achieve the goals set by the university

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

3

Integration of sustainable development at the program level

- 2011 – Education Assessment Exercise and career surveys pointed out the need for integration
- 2012 - all programs submitted self-assessments
- 2013 - follow-up through a dialogue with schools
- 2013 - all schools set up an action program for integration of sustainable development into their educational programs
- 2014 - all schools followed the action programs
- 2015 - a follow-up
- 2016 - new action programs set up

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

4

Tools for integration of sustainable development in educational programs

- Clarification of the overall learning outcomes
- Mapping of courses and programs with ESD-relevance
- "Coaching" of teachers and Program directors, contact information on teacher resources
- Pedagogical course - Learning for Sustainable Development
- Development of a Toolbox for Teachers
- Development of course modules
- Seminars and networking
- Seed funding for developing new courses etc.

Source: Göran Finnveden, KTH Vice-President for Sustainable Development

5

Requirements for master exam

- Ability to develop and design products, processes and system taking account of human circumstances and needs and society's goal for economically, social and environmentally sustainable development.
- Understanding of technology's possibilities and limits, its role in society and human responsbility for how technology is used, including social, economic, environmental and working environment aspects.

6

Clarification of the overall learning outcomes

Students should be able to

- Reflect on and discuss the definition of sustainable development with regard to the motives, history, definitions, identifying the most important global challenges. Students should also be able to give examples of connections between ecological, economic and social sustainability.
- Critically discuss current objectives for sustainable development in Sweden, the EU and the UN.
- Describe those activities and technological solutions in society, that are within the scope of the educational programs, and which affect global and prioritized Swedish sustainability aspects. The students should also be able to discuss and evaluate various strategies to strengthen environmental impacts and prevent negative impacts.

7

- Explain economic and institutional factors that can inhibit sustainable development
- Describe, evaluate and apply general, and sectoral and technology-specific methods and strategies used in the development and design of products, processes and systems that contribute to sustainable development.
- Identify and understand the link, with relevance to the educational program, between sustainability concept and innovation.

8

- Discuss ethical aspects, especially relating to their future profession, of gender perspectives and other equity issues of sustainable development, such as the distribution of resources within and between generations.
- Connect an understanding of sustainable development (as described in the goals above) to the skills and knowledge specific for the educational program by proposing and discussing technical solutions, innovations and ideas that can contribute to sustainable development.

9

Chalmers University of Technology

- Vice-President for Education coordinating ESD
- Programme Directors responsible for ESD within the respective fields
- Different design of mandatory SD course depending on programme
- Collegial Educational Developer for ESD

10

指定討論者４

松本宏
駐日ノルウェー王国大使館　通商技術部・シニアアドバイザー

略歴

35年間にわたりプラズマ 物理、核融合工学研究開発に携わり、その間20年以上は国際プロジェクトに従事してきた。退職後、「京」スパコン事業 、欧州委員会のフレームワークプログラムであるホライズン2020に携わった後 、現在シニアアドバイザーとして、またノルウェー科学技術大学(NTNU)及びベルゲン大学の日本代表として駐日ノルウェー王国大使館にて勤務する。

分科会２：講演１

「第10 回HESD フォーラムin北海道」

開催報告

報告者：琉球大学　教授　大島 順子

HESDフォーラムは、ESDに取り組む高等教育機関がその実践等に関する様々な情報交換を行い、ESDの質の向上を図ることを目的として2007年に設立されました。この度、第10回HESDフォーラムを北海道大学のサステナビリティ・ウィークに合わせて開催することができました。開催に際し、会場のご提供ならびに運営にご協力頂きました北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局の皆さまに厚く御礼申し上げます。

午前中の大学セッションでは、五つの大学より事例報告がありました。まず、北海道大学より「ESDキャンパス・アジアパシフィック・プログラム」の成果と展望についての報告があり、続いて、立教大学のESD研究所より、大学の附置機関を通したESD教育研究の可能性とESD研究所の10年間の取り組みについてレビュー頂きました。

次に、徳島大学より、2000年以降多数の大学が取り組んだ文部科学省の「現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）」の持続可能な社会につながる環境教育の推進について、徳島大学が採択を受けて実施したプログラムの内容と実施後の展開をお話し頂きました。

そして、金沢大学からは大学のESDの取り組みをお話し頂きました。金沢大学は、さまざまな変遷を経ながら、現在もESDの関連科目を共通教育のレベルで展開している好事例の一つだと思います。

最後に琉球大学より、文部科学省の展開する「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」という、地域の課題を解決するための事業について、現状と課題を発表頂きました。全体としては、各大学が文部科学省からの様々な補助事業を受け、展開してきた／している取り組みの現状と課題、今後の方向性について、具体的な事例に基づいて忌憚のない意見交換ができたと思います。

また、学生セッションとして、北海道大学と琉球大学の学生による発表の機会を設けました。琉球大学からは、「エコロジカルキャンパス学生委員会」の活動を率直に学生目線で話しました。ボランティアであると同時に、単位付与されるキャンパスの中での活動という点が、非常に特徴的だったと思います。北海道大学は、双方向型の短期留学プログラムについて、写真を基に発表して頂きました。

今までは大学教員や大学としての報告がほとんどでしたが、昨年度より学生セッションを設けました。大学側がある目的をもって行っているものを学生はどう受け取っているか、学生の目線をきちんと知らないと、一方的なやり方になるのではないかという反省もあったためです。今年も学生側の話が聞けたことは非常に良かったと思います。

今後も、各大学の全学教育としてESDをどのように継続することが期待されているか、あるいは望ましいのかということをざっくばらんに話し合うことができることを期待し、HESDフォーラムを継続していきたいと思います。今回の発表内容は、HESDフォーラムのウェブサイトでも公開されますので、事例の報告内容の詳細はぜひ後ほど確認して頂ければと思います。

学生発表の様子

大学セッションでの発表の様子

セッションの目的および概要

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」に取り組む大学が、2007年に第１回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、立教大学、岡山大学、上智大学、徳島大学、京都大学、金沢大学、名古屋市立大学、琉球大学と開催してきました。ここ北海道大学での開催が、記念すべき第10回大会になります。

セッションのタイムスケジュール

9:30　開会
（進行：琉球大学観光産業科学部　大島順子）

HESDフォーラムについて
（HESDフォーラム代表／立教大学ESD研究所　阿部治）

【大学セッション】

9:35 ～ 9:50　『ESDキャンパスアジアーパシフィック・プログラムの成果と展望』
（北海道大学大学院教育学研究院　水野眞佐夫）

9:50 ～ 10:05　『大学の付置機関をとおしたESD教育・研究の可能性
ー立教大学ESD研究所の10年間の取り組みをとおしてー』
（立教大学ESD研究所　阿部治）

10:05 ～ 10:20　『現代GP「豊饒な吉野川を持続可能とする共生環境教育」の報告とその後（改組２）～持続可能な地方発展に関する一考察～』
（徳島大学理工学部　三好徳和）

10:20 ～ 10:35　『金沢大学におけるESDへの取組み』
（金沢大学国際基幹教育院　鈴木克徳）

10:35 ～ 10:50　『地（知）の拠点として取り組む琉球大学の事業の現状と課題』
（琉球大学観光産業科学部　大島順子）

10:50 ～ 11:00　休憩

【学生セッション】

11:00 ～ 11:15　琉球大学エコロジカルキャンパス学生委員会の活動
（琉球大学　清水萌衣、宮城俊貴、用あかり）

11:15 ～ 11:30　北海道大学教育学部・大学院教育学院における双方向型短期留学プログラム
（北海道大学　増田風雅、真鍋優志、田中真一郎）

11:30 ～ 12:00　総合討論　教員＆学生

12:00　終了

分科会２：講演２

「北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方」

開催報告

報告者：北海道大学欧州ヘルシンキオフィス　所長　成田 吉弘

2012月4月にフィンランドのヘルシンキに開設された欧州ヘルシンキオフィスは，北欧を中心とした欧州全体の大学，研究機関との学術交流のリエゾン役を果たしている．またFSP (First Step Program) や海外インターンシップなど，北大の学生が欧州で海外体験をする際の手助けをしている．欧州は持続可能な社会実現に対する関心が深いが，とくに北欧はサステナブル社会の実現に貢献する教育でよく知られている．本企画は，サステナブルな高等教育に関して，先進的な取り組みをしている国々の現状を紹介する機会を設け，3人の講師を外部からお招きした．

はじめに駐日ノルウェー王国大使館の松本宏氏が，ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試みを紹介した．続いて，駐日スウェーデン大使館の Mats Engström氏は, スウェーデンの高等教育において実施された先進的な試みと評価を詳細に話された．バルト3国からの唯一の代表となったエストニアからは，Argo Kangro氏がノルウェー，スウェーデンとは異なる視点での持続的発展と教育の紹介をされた．最後に北大欧州ヘルシンキオフィスを代表して，所長の成田が欧州全体の高等教育の流れを総括した後，とくにFinlandの大学改革の歩みを紹介した．

聴衆は約30名であり，講演後に時間を越えて，3人の外部Kangro氏講師へそれぞれ熱心な質問が投げかけられた．札幌で北欧やバルトの国々の高等教育，とくに持続可能な社会実現に向けた試みを聞く機会はほとんどないため，次年度以降もこうした企画の継続が期待される．

エストニア大使館 アルゴ・カングロ氏による講演の様子

講演会終了後に4人の講師で記念撮影
(左から松本氏，Engström氏，成田ヘルシンキ所長，Kangro氏).

セッションの目的および概要

持続可能な社会実現に貢献する高等教育の実施例としては、北欧（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）とバルト（エストニア、ラトビア、リトアニア）の国々がよく知られています。本企画では、サステナブルな高等教育に関して、先進的な取り組みをしているこれらの国々の現状を紹介いたします。

セッションのタイムスケジュール

9:55	開会
10:00 ～ 10:30	「ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試み」 （駐日ノルウェー王国大使館　松本宏）
10:30 ～ 11:00	「言葉から結果へ：持続的発展のための高等教育に関するスウェーデンの経験」 （駐日スウェーデン大使館　Mats Engström）
11:00 ～ 11:30	「エストニアから見た持続的発展と教育」 （駐日エストニア共和国大使館　Argo Kangro）
11:30 ～ 12:00	「欧州全体の高等教育の流れとFinlandの大学改革の歩み」 （北海道大学欧州ヘルシンキオフィス　成田吉弘 ）

講演者 1

松本宏
駐日ノルウェー王国大使館　通商技術部・シニアアドバイザー

略歴

35年間にわたりプラズマ 物理、核融合工学研究開発に携わり、その間20年以上は国際プロジェクトに従事してきた。 退職後、「京」スパコン事業 、欧州委員会のフレームワークプログラムであるホライズン2020に携わった後、現在シニアアドバイザーとして、またノルウェー科学技術大学(NTNU)及びベルゲン大学の日本代表として駐日ノルウェー王国大使館にて勤務する。

講演者 2

Mats Engström
駐日スウェーデン大使館　科学・イノベーション部

略歴

駐日スウェーデン大使館の科学・イノベーション参事官。前職のスウェーデン環境省国際部長・国務副長官時代にはスウェーデンと欧州の持続可能な開発に関する意思決定に携わる。またスウェーデン外務省の特別顧問および主要な科学誌の編集長でもある。工学物理学修士号を有する

講演者３

Argo Kangro
駐日エストニア共和国大使館　Counsellor

略歴

駐日エストニア共和国大使館公使参事官。タリン大学法科大学院で学び、1997年法学修士号取得。1999年から2002年までエストニア外務省（MFA）政策担当官や大使館員を、2006年から2008年まで国家儀典部訪問儀式課長を務める。また2011年から2014年までオランダエストニア共和国大使館参事官。2014年から2016年まで外務省対外経済開発協力部（タリン）に勤務。

主催

北海道大学国際連携機構　欧州ヘルシンキオフィス

入場： 無料
言語： 日本語，一部英語(スライドは日本語併記)

分科会３：学生ワークショップ１

「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」

開催報告

報告者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス　大崎 美佳

遠い世界の出来事として捉えがちな「SDGs（持続可能な開発目標）」。本ワークショップでは、３名の学生を招き、SDGsを使った取り組みや自身の活動とSDGsの関わりを発表いただきました。

はじめにEPO北海道から、報告書「成長の限界（1972年）」等に触れ、昔から世界の資源は有限であり、持続可能な社会を作っていくことが必要と言われてきたことを踏まえ、SDGsの経緯や特徴について紹介させていただきました。

和田恵さん（慶応義塾大学　総合政策学部４年生）からは、所属する研究室での取り組みとして、SDGsを同世代の方へ普及啓発するためにSNSを活用した情報発信、シールにしたSDGs各目標を大学構内の関連個所等に貼る「キャンパスSDGs」についてご紹介いただきました。世界の目標を自分事としてとらえてもらうための工夫を凝らした取り組みでした。

三品未和さん（酪農学園大学　環境共生学類２年生）、赤松遼太朗さん（東海大学札幌キャンパス生物学部３年生）からは、学外の取り組みとして、お二人が所属するNPO法人ezorockの「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」とSDGsの目標４「質の高い教育をみんなに」や目標15「陸の豊かさも守ろう」との繋がりについてご紹介いただきました。また、登山者への長靴貸し出し等の活動一つ一つが、どのように自然保護とつながっているのか活動の効果を丁寧に説明いただきました。

発表いただいた内容は、グラフィックレコードをという手法を用いて、牧原ゆりえさん（一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ）、丸藤たつのりさん（ユースコミュニティデザイナー）にまとめていただきました。

参加者からは、「SDGsを身近に感じることができた」などの声を頂き、発表内容から多くの示唆を得ることができたようです。その後参加者には、もう一つのワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」へ続けて参加頂きました。

ワークショップの様子

学生発表の様子

セッションの目的および概要

世界の大きな流れの１つである「持続可能な開発目標（SDGs）」。これだけ聞くと敷居が高く、自分事としてとらえることが難しく感じますが、視点を変えてみると、実は私たちとつながっていることが多く発見できます！３名の大学生の方からお話を伺ってヒントをみつけませんか。ランチを食べながら参加者の皆さんで交流できる時間にしたいと思います。 気軽にご参加ください。

この後は14時からの分科会４ 「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」も続けてご参加ください。私たちにとって身近な存在である「教育」を通して、どのように世界の目標に貢献していけるかワークショップ形式で考えていきます。

分科会４の詳細は、こちらをどうぞ！

セッションのタイムスケジュール

12:15	開会
12:20 ～ 12:30	情報提供：世界の目標「SDGｓ」について
12:30 ～ 13:00	事例紹介１ 「大学内でのSDGsの普及啓発について」
13:00 ～ 13:30	事例紹介２ 「実は身近な世界の目標」
13:30 ～ 13:45	参加者同士の交流会
13:45	閉会

司会者／ファシリテーター

大崎美佳
環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

事例紹介１：大学内でのSDGsの普及啓発について

講演者

和田恵
慶應義塾大学 総合政策学部4年

要旨

SDGsを中心とした環境問題を専門とする慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス　蟹江憲史研究会では、実践プロジェクトとしてSDGsの普及啓発活動に取り組んでいます。例えばインスタグラム（SNS）を利用し、SDGsと自分の関心の関連を考えてもらう活動、またキャンパス内をSDGsの１７要素でカバーする「キャンパスSDGs」プロジェクトなどです。特に「キャンパスSDGs」など、学生であること、そしてキャンパスを活かしたプロジェクトについてお話します。

略歴

慶應義塾大学４年。東京出身、在住。ゼミ長を務める蟹江憲史研究会にて、SDGs（国連・持続可能な開発目標）を中心とした環境ガバナンスを専攻。SDGs達成のための国内・国際制度のあり方に関心がある。同大学院政策・メディア研究科環境デザイン・ガバナンスコース進学予定。現在、大学キャンパス内でSDGsの普及啓発プロジェクト「キャンパスSDGs」実施中。

また、学外ではこども国連環境会議推進協会、日本青年国際交流機構、NPO法人新宿環境活動ネット、OECD Student Ambassador等で活動。

在学中には、国連グローバル・コンパクト日中韓ラウンドテーブル、内閣府青年国際交流事業Ship for World Youth Leaders、日中韓環境大臣会合等に、日本代表青年として参加。今年静岡で開催された第18回日中韓環境大臣会合では、インスタグラム枠を用いたSDGs普及啓発活動を実施した。

北海道へは小学校4年生以来約10年ぶり。ジンギスカンにわくわくしている。

事例紹介２：実は身近な世界の目標

要旨

大学の授業で学んだ「生物多様性」。机の上では理解はできたけど、実世界ではどうなっているのか・・・学外の環境団体（NPO法人ezorock）による環境保全活動に参加して、植物と土や水の関係性などを現場で五感から言葉の意味や概念を体験することで理解がより深まりました。ここでは私たちが行う活動内容の紹介と、それがSDGsのどの目標とつながっているのか紹介します。

講演者１

三品未和
酪農学園大環境共生学類　2年

略歴

NPO法人ezorockの大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクトで環境保全のボランティア活動を行っています。大学には野生動物について勉強したいと思い入学しましたが、1年生の授業に自然環境に関する授業があまりありませんでした。

そこで、ただ大学で授業を聞いているという受け身の体制ではいけないと思い、様々な環境活動を行っているezorockで活動を始めました。

講演者２

赤松遼太朗
東海大学札幌生物学部　3年

略歴

小さい頃から生き物が好きで、いろんな生き物を観察したり、どんなことを考えているのかを考えるのが好きでした。生き物好きがそのまま中学・高校と続いて、高校では理系の生物を選び、大学でも生物を学びたいというところからここまできました。

環境について勉強しようと思ったのはすごく最近のことで、今までは自分の好きな生物に関わる仕事をしたいけど、具体的にどんな仕事があるのかわからず、思いつくことと言えば動物園の飼育員くらいというような状態でした。

そんなとき、たまたま参加した「ふくしまキッズ」という活動を通して、ezorockと出会いました。環境というキーワードに対していろんな角度からいろんな手段でアプローチをしていて、活動に参加していく中で、やっぱり自分が環境について詳しくないとその活動の目的や意味を見出せないと思い、環境についてもっと勉強し、深めていきたいと思うようになりました。

主催

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

共催

北海道大学

後援

一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ

分科会３：対談

対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

開催報告

報告者：徳島大学大学院理工学研究部　教授　三好 徳和

「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」という題にて、立教大学の阿部治先生、金沢大学の鈴木克徳先生に対談をしていただく予定であった。しかし、参加者が１０余名であったため、両先生に話題提供していただき、フロアーからの質問に答える形として実施した。

簡単に内容をまとめると、まず、SDGsに関する前に、ESDに関し参加者全体での共通認識を作るためのディスカッションを行った。資本主義社会における競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るためにどのようにしなければならないのか。そのように価値観の変換を求めるものがESDである。

では、高等教育機関としてはどのように実施していくかが課題となる。体験プログラムで地域問題を理解するという観点からしたら、初等教育と高等教育では一見すると同じような中身かもしれない。しかしESDとしての中身は、深さが違う。高等教育では問題解決のための調査研究がなされる。

ただ、そうすると、ESDは専門教育と言うことになりはしないか。ESDとして、課題解決のための専門教育もある。しかし、ESDには、先に述べた、競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るために価値観の変換を求めるいわゆる「教養」も重要なことである。これらの事に関しディスカッションを行い相互理解に努めた。

SDGsに関しては、深く議論はできなかったが、post ESDとして、今後ESDを推進する高等教育機関が何を目指すべきかという有用な議論が行えた。第１０回目のHESDフォーラムとしては、次の１０年に向けて、総括を含めた良い議論ができたと考えている。

議論の様子

セッションの目的および概要

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」に取り組む大学が、2007年に第１回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、立教大学、岡山大学、上智大学、徳島大学、京都大学、金沢大学、名古屋市立大学、琉球大学と開催し、ここ北海道大学にて開催が、記念すべき第１０回大会になる。今年はまた、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」が発効した年でもあり、ポストESDとして、今後高等教育機関がSDGｓに対しどのようにかかわっていくべきか、考えるための対談とフリーディスカッションを行う。

セッションのタイムスケジュール

12:15 ～ 12:30　開会並びにHESDフォーラム１０年の歩みについて（紹介）

12:30 ～ 13:15　阿部治教授、鈴木教授との対談（事前意見聴取に関する応答を交えて）

13:15 ～ 13:45　会場参加者とのフリートークセッション

司会者／ファシリテーター

三好　徳和
徳島大学大学院理工学研究部

SDGsへ貢献する高等教育のあり方について

要旨

HESDフォーラムは、国連「持続可能な開発のための教育の10年」に取り組む大学が、2007年に第１回大会を岩手大学にて開催後、自主的に集合し、ここ北海道大学にて開催が、記念すべき第１０回大会になる。今年はまた、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」が発効した年でもあり、ポストESDとして、今後高等教育機関がSDGｓに対しどのようにかかわっていくべきか、あらかじめ募集した質問や意見を基に、対談形式にて講演を行う。その後、フリートーク的ディスカッションを行う。

講演者１

阿部治
立教大学社会学部教授・ESD研究所長

略歴

1955年新潟県生まれ。立教大学社会学部・同研究科教授、専門は環境教育/ESD。現在、同大学ESD研究所長などとして、日本を含むアジア太平洋地域の環境教育/ESDのアクションリサーチを行っている。前日本環境教育学会会長（Fomer President, Japanese Society of Environmental Education)

講演者２

鈴木克徳
金沢大学国際基幹教育院教授　環境保全センター長

略歴

環境省（環境庁）に在籍し、オゾン層保護、気候変動等の国際交渉、国際環境協力等に従事。その間、国連アジア太平洋経済社会委員会、世界銀行、日本環境衛生センター酸性雨研究センター、国際連合大学高等研究所（UNU-IAS）等の国際的機関に出向し、活動。UNU-IAS時代には、UNESCOとともに、国連ESDの10年（DESD）の推進を図り、DESD国際実施計画づくりなどを行う。また、ESD地域拠点（RCE）づくりを推進。現在、金沢大学で、北陸におけるESD活動を推進している。

主催

HESDフォーラム

共催

北海道大学　国際連携機構

分科会４：学生ワークショップ２

「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」

開催報告

報告者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス　大崎美佳

本ワークショップでは、SDGsの達成に向け、よりよい地域づくりのために高等教育がどうあるべきかを参加者と一緒に考えました。まず、自分たちの暮らしや実現したい夢が、SDGsのどの目標と関わりがあるのか考え、話し合う時間をとおして、SDGsをさらに身近なものにしました。

次に、牧原ゆりえさん（一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ）より「サステナビリティ」実現に向けた考え方の紹介があり、SDGsの達成に向けて高等教育がどうあるべきか参加者と意見交換をしました。高等教育に期待することとして参加者の方から「学内外の方とつながることができるオープンな場所」「無駄なことに挑戦できる」「学生結婚の推奨・支援」「シラバスを教員と一緒に作成すること」等、多彩な意見がでてきました。また、高等教育が学びの部分で恵まれた場所であるかを再認識した機会ともなりました。

最後に、大沼　進准教授（北海道大学大学院文学研究科）が全体をとおして「活発なディスカッションがされ貴重な意見が出された」とまとめました。

参加者からは、「多様な意見がでたけど高等教育に求めることは皆同じでおもしろい」等、普段は会えない人と意見交換する良い機会になったという声が多く寄せられました。

２つの分科会をとおしてEPO北海道は、今後も持続可能な地域づくりに向けSDGsの普及啓発を行うとともに、社会の次世代の担い手である学生の取り組みや意見が国内がいへ発信される場づくり等をしていきます。 分科会を開催するにあたり関係者の皆さまには改めて心より感謝申し上げます。

ワークショップの様子

参加者の集合写真

セッションの目的および概要

ここでは参加者の皆さんとワークショップ形式で、「SDGsの貢献とは？」「世界とのつながりを持つにはどうしたらいいのか？」などを学生目線から教育について考え、シンポジウム全体に意見を発信します。

ランチセッションで学んだことをヒントに参加者の皆さんと話しながら自分の想いを形にしていきませんか。もちろん、ここだけの参加も歓迎です。「SDGsに関する授業があるといい」など小さなことから、「SDGsに貢献する海外の取り組みを知るために留学制度があるといい」など大きなことまで、世界の目標と関りを持つ教育になるよう、皆さんの声を届けましょう！

ランチセッションの詳細は、こちらをどうぞ！

セッションのタイムスケジュール

14:00	開会
14:05 ～ 15:45	ワークショップ形式で世界の目標と関りを持つ教育について、参加者の皆さんと考えます！
15:45 ～ 16:00	まとめ
16:00	閉会

司会者／ファシリテーター

牧原ゆりえ
一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ

プロフィール

出産を機にサステナビリティに強い関心を持つようになり、４年間のスウェーデン滞在中に２つの修士プログラムを学ぶ。北欧滞在中に得た「自分の暮らしをハッピーにしてくれるサステナビリティに必要な学び」を日本でも伝えるべく、活動中。参加型リーダーシップの実践のグローバルのコミュニティArt of Hosting 日本支部世話人、女性のインナーリダーシップに気づき慈しむグローバル・プログラムComing Into your own 日本ファカルティ。地方創生のためのグラフィック・ハーベスティング呼びかけ人.
http://www.sustainabilitydialogue.vision

主催

環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）

共催

北海道大学

後援

一般社団法人サスティナビリティ・ダイアログ

分科会４：講演１

「コンフリクトを超える知を生み出す学び　～分断社会における和解の可能性を探る～」

開催報告

報告者：北海道大学大学院教育学研究院　教授　宮崎隆志

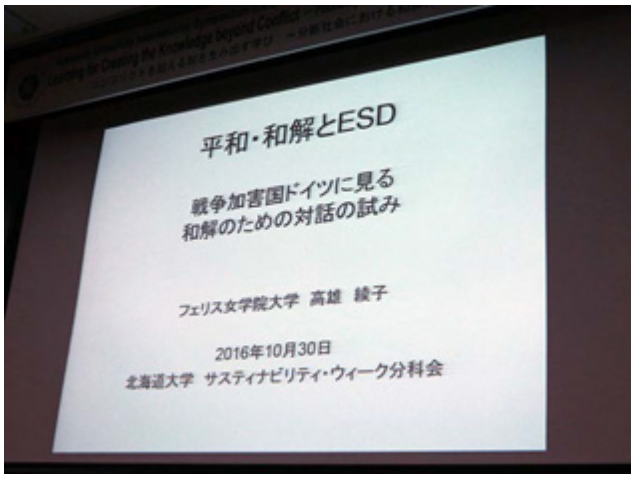
SDGsに取り組む際に必ず浮上するのが、利害対立に起因する葛藤です。この分科会では、葛藤そのものに焦点をあてて、和解や赦しとしての平和を構築するために必要な学びを３つの事例に即して検討しました（スタッフ3人・登壇者4人を除く参加者は45名、計52名）。

高雄先生（フェリス女学院大学）からは、ドイツとポーランドの市民レベルの和解の模索の実践、佐々木陽子先生（南山大学）からはイスラエルの占領下にあるパレスチナのジェニン自由劇場での表現活動、そして上田假奈代さん（ココルーム代表）からは大阪の釜ヶ崎地区における表現による関わりづくりの活動を紹介して頂き、本学の石岡先生（教育学研究院）からコメントを述べて頂きました。

討議では、マクロなレベルで語られる紛争解決としての「和解」ではなく、個人としての当事者の間での「マイクロな平和」に着目する必要性が確認されました。また、そのためには、第一に、分断社会の下で引き裂かれた状況にある個人の声を発することができ、その声が聴き取られる場を社会的に構築することが必要であること、第二に、それにもかかわらず、そのような場を組み込んだシステムが成立していない状況で、演劇のようなシミュレーションによって感情や関係性を取り戻す可能性に着目する必要があること、さらに第三に、関係を固定化させないで揺らし続ける活動が重要であることが確認されました。

環境正義や地球市民という概念は、コンフリクトを解消するものとして語られることがありますが、この分科会ではそれらを平和をもたらす「青い鳥」として扱うのではなく、むしろコンフリクトのもつリアリティから出発し、その矛盾と不断に対峙しながら問いを深める学びが重要であることが明らかにされました。教育学研究院ならびに子ども発達臨床研究センターでは、このような課題をさらに多くの実践者とともに探求していくつもりです。

討議の様子



高雄綾子准教授による講演時のスライド

セッションの目的および概要

排除型社会は分断と囲い込みをもたらし、人々の間に、そして諸個人の内部にコンフリクトを生じさせる。このコンフリクトを超えて、和解としての平和を構築するためにはどのような学びが必要なのか？

本分科会では、被害・加害の対立を超える対話的実践、紛争地域における演劇活動、そして貧困集積地域でのアート活動をとり上げ、この主題について検討する。このような活動がESDとして持つ意味についても検討したい。

主催

北海道大学教育学研究院

セッションのタイムスケジュール

14:00　開会

14:00 ～ 14:05　趣旨説明

14:05 ～ 14:25　報告１
「平和・和解とESDー戦争加害国ドイツに見る和解のための対話―」

14:25 ～ 14:45　報告２
「占領下で「抵抗する芸術」ーパレスチナ、ジェニン自由劇場の事例から」

14:45 ～ 15:05　報告３
「釜ヶ崎で表現の場をつくりつづける喫茶店、ココルームで考えたこと」

15:05 ～ 15:15　指定討論
「貧困を生きる者の視点から―フィリピンの事例をもとに―」

15:15 ～ 16:00　討議・まとめ

報告１: 平和・和解とESD　―戦争加害国ドイツに見る和解のための対話―

高雄綾子
フェリス女学院大学

要旨

国同士の戦争では、国家の発展、世界平和、自衛などの「大きな物語」により、個人の平和は覆い隠されてきた。それは差別という形をとり、その後の長きにわたるコンフリクトの元凶となる。大きな枠組みでの被害と加害を越え、個人としての和解の対話を始めたポーランドの女性たちの事例から、コンフリクトを越える知とは何かを考える。

略歴

日本大学文理学部独文学科卒業、東京都立大学大学院都市科学研究所修了、東京大学大学院教育学研究科修了、フェリス女学院大学国際交流学部准教授。主要業績「ドイツ・脱原発への市民の学習-リスク認識から地域再生へ-」『地域学習の創造』（共著、東京大学出版会、2015年）

報告２: 占領下で「抵抗する芸術」―パレスチナ、ジェニン自由劇場の事例から

佐々木陽子
南山大学

要旨

イスラエルの植民地主義的な軍事占領下に長期間おかれたパレスチナ状況の過酷さは、単に土地に代表される収奪や水や交通など基本的インフラの支配にとどまらない。見えない「精神領域」が同時に侵され、自尊と自治を希求するための自由発想が損なわれていく。現地で行われているさまざまな「芸術を通した抵抗」 のなかでも、現地の子どもと歩んできた地域演劇の事例を、収奪に対する「抵抗」 であるとともに、生存と共生への試みであるとして紹介したい。

略歴

香港大学、熊本大学にて国際教育交流に従事後、多文化共生を目的としたコミュニケーション研究と教育に携わり現職（総合政策学部講師・南山大学）。ポストコロニアリズムを共生志向として捉え、暮らしの現場で創られる民衆の知を重視しながら、ワークショップやコミュニケーションのデザインをしています。

報告３: 釜ヶ崎で表現の場をつくりつづける喫茶店、ココルームで考えたこと

上田假奈代
NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）

要旨

日本最大の寄せ場・釜ヶ崎で、10数年に渡る表現の場づくりを行ってきたNPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）。商店街で喫茶店のふりをしながら、毎日場を開き、メディアセンターをつくったり、まちかど保健室などを行う。高齢化にともない、地域の施設を会場にかりて、だれもが学び合う「釜ヶ崎芸術大学」を実施。2016年春にはゲストハウス事業をはじめた。

略歴

詩人。1969年奈良県生まれ。3歳より詩作、17歳から朗読をはじめる。92年から詩のワークショップを手がけ、2001年「詩業家宣言」。03年、ココルームをたちあげ「表現と自律と仕事と社会」をテーマとする。著書「釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム」（フィルムアート社）大阪市立大学都市研究プラザ研究員。2014年度 文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞

指定討論: 貧困を生きる者の視点から―フィリピンの事例をもとに―

指定討論者

石岡丈昇
北海道大学大学院教育学研究院　准教授

司会者

宮崎隆志
北海道大学大学院教育学研究院　教授

主催

北海道大学大学院教育学研究院

分科会４：講演２

「文化遺産とSDGsー失われた好機？ー」

開催報告

報告者：北海道大学文学研究科　応用倫理研究教育センター　准教授　眞嶋 俊造

本行事は、文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステイナビリティの倫理についての研究の第一人者である英ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授に"Cultural heritage and the Sustainable Development Goals. A missed opportunity?"というタイトルの講演を行って頂きました。

SDGｓの11-4にも掲げられているように、文化遺産・文化財の保護というのは現代社会において喫緊の課題であり、また持続可能な社会を構築するために必要不可欠であることが指摘されました。また、文化遺産・文化財の保護を通した持続可能な社会の構築に向けた課題と展望についての議論を深めました。

ストーン教授は大学教員になる前にイングリッシュ・ヘリテージ財団に勤務し、ハドリアヌスの壁の管理責任者であった実務経験を踏まえた議論は、教育の重要性を強調するものでした。ストーン教授がこれまで行った、英国国防省より依頼されたイラク戦争における遺跡の損壊・破壊に関する調査、またユネスコにおけるリビア等での武力紛争における遺跡の略奪状況などの調査についての報告は、当事者でしか知ることができないであろう非常に興味深い、また貴重な内容でした。

歴史家であるストーン教授が講演において強調された言葉は以下の通りです。「私たちが歴史を学ぶのは現代を理解するためであり、また未来を創るためである」。文化遺産や文化財を保護しそれらの歴史を学ぶことの重要性を論じることは、人性の涵養という持続可能な社会の構築について考えるという、まさに本シンポジウムの趣旨に合致するものでした。

講演を行うピーター・ストーン教授

会場の様子

講演者

ピーター・ストーン
ユネスコ文化財保護＆平和委員会事務局長

要旨

2015年9月25日、国連は「持続可能な開発のための目標」(SDGs)を始動させました。これは2030年までに「貧困に終止符を打ち、地球を守り、すべての人の繁栄を確保する」ための行動目標を「持続可能な開発のための新アジェンダ」として示したものです。

その11番目の目標が「持続可能な都市及び人間居住」です。これには「包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）な都市を実現する」という副題が付いています。11.4では「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」という取り組みを定めています。SDGsの中で「遺産」や「分化」に具体的に言及した箇所は、他にはありません。

「人間、地球、繁栄、平和、パートナーシップ」というコンセプトを中心とするイニシアチブが、1つの目標の下に遺産保護を取り込むのに、都市をターゲットとするのはどこか奇妙にも思えます。何と言っても、世界で自然遺産が見つかる都市というのは皆無に近いのですから！実際のところ、世界の都市人口が増加し続ける一方で、有形の文化遺産のほとんどが、この発展し増え続けるコンクリート街の外に存在しています。エコノミスト以外の人にとっては、「すべての国が持続的で、包摂的で、持続可能な経済成長を享受できる世界」で、この目標を達成できる、と考えるのは、現実の世界の原理に即していないように思えます。

本質的には、これらの目標は人類の長きに渡る存続を実現するのに不可欠な、まさに賞賛すべきアジェンダを定めたものです。これらの目標は、暗に世界を脅かしているものの真因が、概して人類であることを認識しています。では、これらの目標が、人類と地球上の他の生物とを分け隔てる唯一のもの、すなわち「人間の文化」を無視しているように思えるのは、少なくともほとんど注目していないのは、一体なぜなのでしょうか？

主催

応用倫理研究教育センター

全体会２：総括ディスカッション

SDGsに貢献する高等教育のあり方

開催報告

報告者：北海道大学国際連携機構　副機構長　川野辺 創（全体会司会）

分科会の代表者による報告ならびに参加者間の議論を通じ、継続的に議論が必要な課題が次のとおり明確となった。

- SDGsの元となる国連の決議「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の第７、８、９パラグラフ（注１）が示す「目指すべき世界像」の実現に対し、高等教育がどのように貢献し得るか論じることが重要である。
- 学生が、変わっていく社会の中で学び、自らも変わっていき、そして社会が変わっていくことに貢献していくことを可能にする教育をどのように制度的に実現できるのか議論が必要である。
- 学ぶ主体である学生の意見をより積極的に取り入れて、学生と教員が協働する形で、授業や授業科目群を発展させていく方法や制度を開発していく必要がある。
- 持続可能な発展に貢献する人材を育成するための教育の実践、評価、見直し、そしてファカルティ・デベロップメントといった一連の取り組みをどのように制度的に実現していくのか議論が必要である。

（注１）外務省仮訳『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』、「宣言」第７、８、９パラグラフより引用。

概要

シンポジウム2日目には、3つの分科会において10の企画が実施される。中には、「持続可能な発展のための教育」や「学生目線」、「和解」といった特定のテーマごとに、教育や学修の実践経験と課題が共有される。

シンポジウム最後のプログラムとなる全体会では、教育の現場そして学びの現場がより活き活きとSDGsに向けて実践するには、大学という組織、高等教育界というセクターがどう変わっていくことが望ましいのか、参加者とともに議論する。

セッションのタイムスケジュール

10月30日（日）　16:15 ～ 17:00　総括ディスカッション

座長

山下正兼
北海道大学副学長

略歴

北海道大学サステイナビリティ教育検討プロジェクトチーム　チーム長
北海道大学副学長
理学研究院教授
新渡戸スクール副校長

1

新渡戸スクールの概略

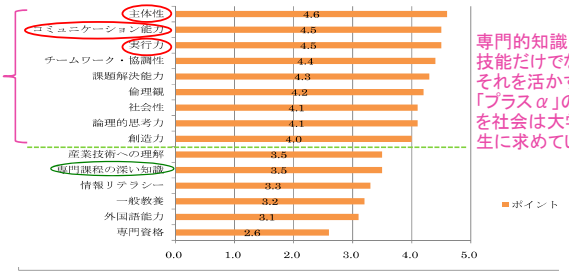
- 総長を校長とする全学教育プログラム
- 2015年5月開校
- 対象：本学の全大学院生（18大学院・51専攻）
- 定員：基礎プログラム(修士課程) 60名
- 修了要件：修士号取得、新渡戸スクール科目8単位、ポートフォリオ作成
- 入校者: 64名（2015年度）[78名（2016年度）]

2017年度より
- 基礎プログラム(修士課程) 120名
- 上級プログラム(博士課程) 25名 [2016年度に試行]

2

日本経済団体連合会による「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組み」に関するアンケート結果（2015年3月17日）

大学生の採用にあたって産業界が重視する素質、態度、知識、能力



専門的知識や技能だけでなく、それを活かす「プラスα」の力を社会は大学院生に求めている。

［非常に重視する＝５ポイント、重視する＝４ポイント、普通で良い＝３ポイント、余り重視しない＝２ポイント、重視しない＝１ポイントで計算］

3

「3+1の力」：専門性を活かす力

新渡戸スクールでは、現在社会が期待する「専門性を活かす力」を「3+1の力」と定義した

能力更新力：問題に応じて自己能力を把握し、向上を図る力（自分に対する力）

組織形成力：多様な専門性を持つ人材を組織・統率し、課題を解決できる力（他者に対する力）

社会還元力：イノベーティブな解決によって、社会に創造的価値をもたらす力（社会に対する力）

専門職倫理：多様な価値観の中で、専門家として公平・公正な判断ができる

4

新渡戸スクールの特徴（1/5）：国際社会の縮図

様々な知識、技能、経験、価値観を持つメンバーから構成されるチームにおいても、コミュニケーションを十分に取ることで相互理解を深め、課題解決に向けて自身の持つ専門的能力を最大限に生かすことができる人材を育成する

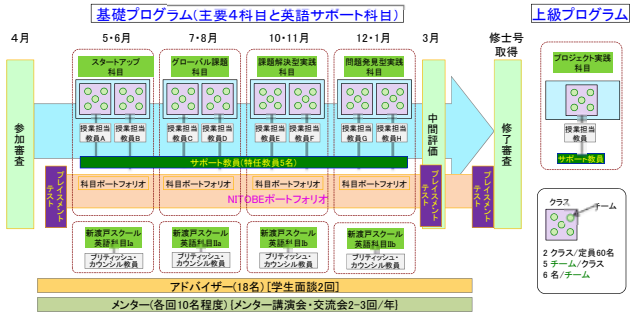
チーム学習を中心としたアクティブラーニング

新渡戸スクールにおいて、多様な専門性、文化、国籍を背景に持った学生が全大学院から参加する教室「国際社会の縮図」を創り出す

北海道大学には、6,000名以上の大学院生が在籍する80の国(地域)から約1,500名の留学生を受け入れている18大学院・51専攻で多種多様な専門分野の教育・研究を実施

5

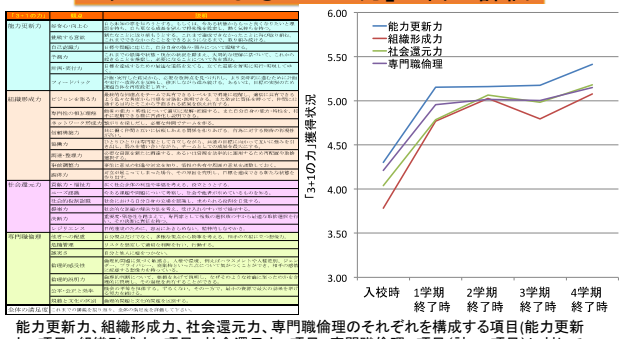
新渡戸スクール進行図



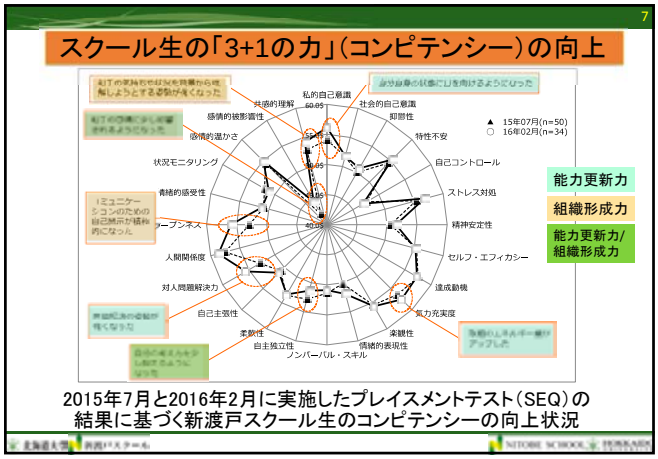
*プレイスメントテスト: 外国語能力試験[TOEIC, TOEFL]・適性能力診断[SEQ: Student Emotional Intelligence Quotient]

6

スクール生による「3+1の力」の自己評価



能力更新力、組織形成力、社会還元力、専門職倫理のそれぞれを構成する項目(能力更新力6項目、組織形成力8項目、社会還元力6項目、専門職倫理7項目（計27項目）に対して、受講生が〈できない(1)–半分程度できる(4)–できる(7)〉の7段階評価で回答


7
スクール生の「3+1の力」（コンピテンシー）の向上
私的自己意識
社会的自己意識
共感的理解
即興性
感情的被影響性
特性不安
感情的温かさ
自己コントロール
状況モニタリング
ストレス対処
情緒的感受性
精神安定性
ケーブンネス
セルフ・エフィカシー
人間関係度
達成動機
対人問題解決力
気力充実度
自己主張性
柔軟性
楽観性
自主独立性
情緒的表現性
ノンバーバル・スキル
▲ 15年07月(n=50)
○ 16年02月(n=34)
能力更新力
組織形成力
能力更新力/
組織形成力
2015年7月と2016年2月に実施したプレイスメントテスト（SEQ）の
結果に基づく新渡戸スクール生のコンピテンシーの向上状況

作成日：平成 29 年 3 月
作成者：北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目
TEL　011-706-8031／ E メール contact@oia.hokudai.ac.jp
北海道大学国際部国際企画課
〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目
E メール planning@oia.hokudai.ac.jp